文學士 岩橋遵成著

倫理叢書第六編

近世日本儒學史 上卷

東京 寶文館藏版

序

過ぐる大正十四年の秋、予は「日本儒敎概說」と題して、日本儒學の大要を敍述せる一書を公刊したが、近世儒者の學說については、敍述甚だ簡に過ぎたので、その補遺として他日「日本に於ける儒敎倫理說」と題して、別に一書を編述すべきことを誓つて置いた、爾來俗務のためその誓を果し得ず、一年有餘を怱忙の中に過して終ふことになつた。然るに今玆諒闇の新年を迎へ、いつになく物寂しくはあつたが、却つて靜かに讀書する機會を得たので、此時こそと筆を執つて、この稿を起し始めたが、一月の末頃からは、復た日々の勤務の忙しさに、可なりその業を妨げられつゝ、漸く三月の末に至つて兎も角脫稿することが出來た、而して豫てから本叢書のために執筆を約してあつたので、之を以てその責を果すことにした、且つ本叢書中すでに西洋倫理學史が刊行されてゐ

るので、此書の題名もそれに對して「近世日本儒學史」の名が寧ろ相應はしきを思ふて、豫定の名を變じてかく命名することにした、本書執筆の動機は、以上の如く「日本儒教概說」の補遺たらしめんが爲であつたので、努めて前著との重複を避け、事蹟に關するやうなことは凡そ之を省略することにした、而して各學派の代表的學者の學說については、簡單ながらも萬遺漏なきを期したのであるから、初學の士は先づこれに依て近世儒學の大要を知ることが出來るであらう、尙ほ進んで各學者の思想を深く硏鑽するには、その遺著を精讀することを要する、そこで本書に於ては各節の終りに必讀すべき遺著を擧げ、且つ讀者の便を思ふて、現代刊行されてゐる叢書類、例へば國書刊行會本とか、日本倫理彙編といふものゝ中に收載されてゐるものは、特に之を記入することにした、是れ一は以て本書敍述の遺漏を補ひ、一は以てこれに依て深く我が先哲の遺著に關する硏究の盛ならんことを希望する微衷に外ならぬ、倫理、哲學の硏

究が盛んに行はれてゐる現代に於て、我が先哲の遺著についての考究が、比較的寥々として振はず、日本哲學若くは日本倫理の研究を疎外するやうな狀態にあることは、予の常に遺憾に思ふてゐる所である、我が先哲の遺著にも、泰西の碩學或は支那の鴻儒のそれに比して決して損色なきものが尠からずあるのである、若し夫れ今日の科學的知識を以て之を考究研鑽するときは、必ず今日の學界又は風敎上に裨益する所少くないのであらう、日本現代の文化を考察する上に於ても吾等は我が先人の思想的考察を十分に理解することを要する、幸に今日は此等先人の遺書が續々活字本となつて世に公刊されてゐる時代であるから、斯學研究に取つては絕好の機會である、敍述の簡なるに比して此等先哲の遺著を列擧するに力を用ゐたのは此の理由に據るのである、完全なる日本儒敎史の撰述は予が畢生の業として他日を期するのである、今はたゞ初學入門の手引として、平素講義しつゝある原稿をまとめたに過ぎない、書中引用の語が或

は原文のまゝとなり、或は和譯して之を掲げ、また原文が片假名であるのを平假名に直して引用し、大に不統一の點を免れなかつたのは、著者自らも遺憾に思ふ點であるが、別に他の理由によるのでなく、たゞ講義原稿をそのまゝ利用したからである。然しながら一切原文のまゝ掲げることは、初學の人に取つては却て迷惑ともなるのであるから、不統一とはいふものゝ、或はこれによつて難易を折衷することにならうと思ふて、姑くこのまゝにすることにした、之を要するに本書は舊著「日本儒敎概說」と併せて讀まるべき性質のもので、歷史的發展の方面は概說に讓り、理論的方面を主として述べたものである。

昭和二年四月二十五日

岩橋遵成識

近世日本儒學史上卷

目次

第二篇　陽明學派

目次畢

近世日本儒學史 上卷

岩橋遵成 著

第一篇 朱子學派

第一章 京學及び林家の祖林羅山

第一節 藤原惺窩の學風

永祿四年（一五六一）――元和五年（一六一九）

日本儒教史を繙けば室町時代の末に於ても既に薩南の地には桂菴一派の朱子學が行はれ、朱子の書物なども刊行されたことが明らかである、然し時未だ文教勃興の機運熟せず、僅かに九州の一隅に止まつて未だ全國に流布するに至ら

なかつた、且つこの頃の朱子學といふものは單に支那に於ける朱子の新說を傳へたといふのみで、未だ以て眞に日本朱子學といふに足りない、然るに我が國歌道の名門たる冷泉家の血統を引ける惺窩藤先生の出づるありて、初めて之を京師の地に唱道し、幾多の俊才その門下より輩出し、朱子學は遂に德川時代文敎の中心となり、永く幕府敎育の根本思想となりて全國に普及するに至つたことも、亦た日本儒敎史に依て知らるゝ事實である、今こゝに惺窩の事蹟を述ぶることは一切之を省略して、直ちにその學風如何を考察して見よう。

彼は從來の桂菴一派の人々と異なつて徒らに支那思想の宣傳を以て足れりとせず、我邦固有の神道に依て之を日本化し、我が國民性の神髓を把捉し、日本人としての進むべき道を初めて稱へたのである、卽ち眞實の意味に於ける日本朱子學は彼れに依て開かれたのである、從つて朱子學を唱道しても決して宋儒の弊に執する所なく、廣く古今の諸書に通じ、調和的態度を持して德敎の振起

に努力したのである、故にその學風は佛敎と雖も敢て之を排せず、陸王といへども之を棄つることなく極めて寛大なる學風を鼓吹した、神儒佛三敎に對して極めて公平なる態度を執つたので多少旗幟不鮮明の嫌はあつたが、この淸濁併せ呑む底の學風が却て德川時代文敎隆盛の因となつたのであらう、物徂徠は我が國文敎の由來を記して「吾東方の國泯々乎として知覺なし、王仁氏あつて後に民始めて字を識り、黃備氏あつて後に經藝始めて傳はり、菅原氏あつて後に文史稱すべく、惺窩氏あつて後に人言へば天を稱し聖を語る、此の四君子は世學宮に尸祝すと雖も可なり」といつて惺窩に依て初めて我が國の倫理道德に關する學問が開かれたことを言つてゐるのは能く惺窩の功績を稱讃したものと謂つてよい、實に惺窩は獨り京學の祖としてのみならず、我が國近世文敎の祖として尊崇すべき人である。

朝鮮人姜沆は惺窩と共に赤松廣通公の爲めに、文敎の振起に努めた人である

が、嘗て惺窩の爲めに惺窩記を作つてゐる、その中に惺窩の人物及び學問を評して左の如くいつてゐる。

その人となりや、隱居教授、聞達を求めず、人聞くべくして見るべからず、見るべくして知るべからざるなり、簞瓢陋巷之れに處して裕如たり、義可ならざる所、千駟萬鐘といへども屑しとせざる所あり、惡を疾むこと風の如く、善を見ること驚くが如し、道合せざる所は、王公大人と雖も顧みざる所あるなり、其學たるや師傳に由らず、小道に局らず、佛老の學に始まり、箇の昭昭地を得たり、その心迹の背馳するを以て終に棄去して爲さず、而して千載の遺經に因て千載の絕緖を繹ね、深造獨詣、旁ら遠紹を搜り、結繩の替する所龍馬の載する所、神龜の負ふ所、孔聖の籍する所より、濂洛關閩性理の諸書に至るまで貫穿せざるなく、馳騁洞念一切を曉析す、天理を廣め放心を收むることを以て學問の根本と爲す。（惺窩稿續卷三）

惺窩は德川家康の知遇を受けたるも敢てその招聘に應せず、その他當時の權門勢家に優遇されたるも亦た敢て進んで祿仕するを肯んぜず、終身民間に在りて斯道の盡瘁に甘んじたる彼れの面目が、よく此の文中に現はれてゐる、而してその學問の該博なる決して一派の學に拘泥するものでなかつたことも、亦たこれに依て窺はれる、然しながら彼れが朱子の學問に對しては大に尊崇の念を持し、自ら唱道する所の道德主義も主として朱子學を中心としてゐることは慶長九年吉田素庵に代つて林羅山に答へた文書の中に、

如二朱夫子一者、繼二往聖一、開二來學一、得二道統之傳一者也、後生區區置二異論一哉。（惺窩文集答林秀才）

とあるに依て明らかである、卽ち彼れは儒敎を說くに常に朱子の學說を以て正しきものとして之れに準據したのである、けれども前旣に述ぶる如く彼れは決して徒らに支那思想を宣傳するものではなかつた、能く我が國固有の精神を把

持して之を日本化せんことに力を用ゐたことは神儒一致説を稱へてゐることに依て知られる、彼れが老母の爲めに儒學の大意を述べたりと稱せらるゝ「假名性理」といふ著書の中には、

日本の神道も我心をたゞしうして、萬民をあはれみ、慈悲を施すを極意とし堯舜の道もこれを極意とするなり、もろこしにては儒道といひ、日本にては神道といふ、名はかはり、心は一つなり。

といつて明らかに神儒一致説を唱へてゐる、而して天道を畏れ敬む儒道の根本主義を説くに當つても其例を天照大神の御事蹟によつて之を述べたるが如き、その眞意の那邊に在るかは一讀して知らるゝのである、佛敎に對しては時々之を斥くるが如き口吻を漏らしてゐるが、其眞意は佛敎その者の攻擊でなくして腐敗せる當時の僧侶が、釋迦の敎を汚辱してゐることを痛嘆してゐるものと觀るべきであらう、惺窩はその少年時代五山の學林に於て學を修めたるのみなら

ず、その半生は僧侶として世に立つた人であるから佛學に造詣する所淺くなかつたのは勿論である、其著書を通讀する時は非常に佛教思想の影響が多いことが知られる、彼れが道德を說くに我が神道に於て最も重しとする正直の德と、佛教の根本義たる慈悲の道とを以て、道德上の二大原理として教を垂るゝが如き、或は因果說を述ぶるが如き、縱令ひその表面には儒書の文字を以て之を說いてゐるにしても此等は明かに佛教思想の影響する所であらうと思はれる、其他陸王の說も五山に於て深く研究した結果その特長を知れるが故に敢て之を排するやうな言論を爲さなかつたのである、之を要するに惺窩の學風は何處までも調和的であつた、門人林羅山なども此點は大に師說に慊らなかつたのであらう、羅山文集を見ると柴立子の說を非難してゐる所がある、今吾人は惺窩が此くの如き寬大なる學風を以て德川時代文教の基礎を築きたる人であることを一言して其學說の詳細は凡て之を省くことにする、何となれば啓蒙時代の學者は

その任たゞ學問の勃興を促すことであつて、深き研究はその本職とする所でないからである。

【參　考】

天照大神は、日本のあるじなれども、宮作はかやぶきなり、御供は黒米なり、家居をかざり給はず、食にめづらしきものをとゝのへずして、天下の萬民をあはれみ給ふなり、神武天皇其おきてを守りて、道をおこない給ふによりて、後白河法皇まで幾千年といふ數をしらず、代々子孫に天下をゆづりて、さかえ給ふなり、いにしへの天子は、みづから鍬をとりて、田のうちはじめをあそばして、民のくるしみを報じ給ふ、延喜の帝は、寒夜に御衣をぬぎて、國土の民どものいかに寒むからんとなげき給ふ、神道には正しきを、もぱらとして、萬民をあはれむを極意とするなり、上一人正しかれば、下萬民すぐなるものなり、上一人の欲ふかければ、下萬民上のごとくなり、こゝろだに誠

の道にかなひなば、いのらずとても神や守らん、誠の道とは天道の誠なり、神佛に金銀を進上して、我身のうへをいのる事、おろかなる事の第一なり、人さへすこし道の心あるものは、よこしまなるまひなひをうけず、惡人にちかづかず、まして民をくるしめず、被官一類をかつゑにおよばせて、神佛に音信申たるとてうけ給はんや、其身正直にして、慈悲を人にほどこしぬれば、いのらぬとても神守り給ふなり、叶はぬ事を神佛にいのりて、叶ふといふ事はなき事なり云々。(千代もとくさ)

儒道と佛法とのかはり

釋迦佛一切經の中に、心はあるものなり、極樂地獄もあるものなりと、ときたる所も多し、又心もなし、極樂地獄もなしと、說れたる所もおほし、しかれば、心はなきものぞと落着たり、心あるものならば、かりそめにも、心はなきものぞとは、說き給ふべからず、しからば、後生はなきものに落着た

り、ふかく思惟して、よく〳〵心得わけ給ふべし、儒道には此性は天の性をうけ得て生れ、又もとの性へかへると落着たり、しかれどもこゝろにいつはりて、人をそこない、人をそねみ、こゝろよこしまにして、おごりをきはめたるものは、此世にては天のせめをうけ、其身ほろぶるか、又子孫にいたりてほろび、又死して後此心流浪して、天にかへらざるなり、これによりて、天をおそれ、明德を明らかにして、心を誠にし、五常五倫をおこない、慈悲をもぱらにして、此性の天の本土にかへる事をたのしむ、天にいのりきたうしてかへるにはあらず。（同　上）

【著　書】

文章達德錄百卷等多くの著書があると謂はれてゐるが、其倫理道德に關する方面に於ては假名性理一卷（或は「千代もとくさ」）と惺窩文集（八卷の書と十七卷の書と二種あり）とを見れば十分である。「此の二書は日本倫理彙編第

七冊朱子學の部上卷及び續々群書類從第十三冊詩文部に據て見るの便あり」尚ほ大江萬里氏が雜誌大東文化（第四卷第一號）に於て「京學の興起と其普及」なる論文を寄せられてゐるが、惺窩初め羅山、尺五等の著書及び學風等を詳細に說述してゐるから、京學の研究には好個の參考書であることを附記して置く。

第二節　松永尺五

文祿元年（一五九二）――明曆三年（一六五七）

惺窩の門下としては所謂藤門四天王と稱せらるゝ林羅山、松永尺五、那波活所、堀杏菴の外に菅得菴、三宅寄齋、石川丈山、吉田素菴、永田善齋等幾多の碩儒俊才はあつたが、眞に能くその衣鉢を傳へ得たものは松永尺五である。その事蹟の詳細は、門人瀧川昌樂の撰べる「尺五堂恭儉先生行狀」に依て知られる、彼れの父貞德翁は逍遙軒と號して當時有名なる歌人であつた、而して祖父

永種の配は惺窩の姉（大江氏の説に據る）で惺窩とは深き關係あつたことが知られる、その一生の行蹟が惺窩のそれに彷彿たるものゝあつたのも全く偶然でなかつたと想はれる。

尺五は此くの如く惺窩と同じく有名なる歌人の家に生れ、八歳の頃より父に就てその歌學を修め、一家の學を研習する傍ら惺窩の門に入つて儒學を修めたのである、惺窩は自分の親戚の子供でもあり、且つその性質頗る溫厚にして誠實であつたので深く、之を愛して特にこの少年の將來に囑目してゐたやうである、行狀記に惺窩が自分の學問を此少年に傳へる證として自ら着する所の深衣幅巾を授けたとあるのを觀ても師弟關係の他に異なつてゐたことが知られる、而して彼れの才學は實に驚くべきものであつて早く詩文に於て儕輩の間に嶄然頭角を顯はし、年十三にして四書及び六經に通じ、大阪城に招かれて豐臣秀頼の爲めに、書經を講じた程である、かゝる才學絶倫の人であつたから秀頼を始

め、その他の侯伯から屢々祿仕を勸められたが、師惺窩の衣鉢を傳ふることを以て深く自任せる故に悉く之を固辭し、師と同じく民間の教育家として一生を終ふるに至つた、行狀記に據ると三十歳の時一子相傳の誓盟として惺窩から周易、河圖洛書、先天後天、卜筮九圖、太極圖、書洪範九疇、春秋の奥義を傳へられたとある。

彼れは惺窩と同じく宋儒以下諸子百家の學に通じたるのみならず、又た進んで佛教の研究を怠らなかつた、行狀記に之を左の如く記してゐる、

先生歳四十一、博覽强記、本朝外國之篇籍、殆涉ニ獵之一、貞德翁命曰、汝已入ニ儒關一且通ニ諸子百家變正一、今轉覽ニ大藏經一以可レ該ニ貫釋敎一焉、此我願也、先生以爲道不レ同相爲不レ謀、然家君之命、不レ可レ違也、自ニ正月一入ニ建仁寺一到ニ明歳暮春一閲覽了。

この文に據れば佛典の研究は家翁道遙軒の勸告に由つたのであるが、而も敢て

之れを斥けず、熱心にその修業に努めた所は羅山などの學風とは大に異なつてゐることが知られる、而して彼れはこの研究の結果「一切經拔萃大海一滴」の一書を撰して之を　後水尾天皇に獻じ大にその叡感を辱ふしたといふのであるから佛學に於ける造詣も亦た格別であつたことが知られる、尚ほ彼れの常言に「吾雖レ不レ至ニ富貴ニ忘ニ貧窶ニ而不レ忮不レ求、藏書萬卷、詩文三千篇、此外又無レ願焉」とあるが、その性格の惺窩と相同じきものがあつたことが益々明らかに知られる、而して博學是れ努め宋學の外、佛老の學は固より小說雜書といへども之を窺はざることとなしと謂はれてゐるのであるから、その學風全く惺窩の神髓を傳承せるものなることも推して知らるゝであらう。

【著　書】

尺五先生全集二卷（續々群書類從第十三卷に收載さる。（尺五堂恭儉先生行狀は此書の卷頭にあり）

尺五の遺著と稱するもの尙ほ此外に多くあるべしと思はるゝも、未だ之寓目するを得ず、他日の研究を期す、前節參考書として擧げたる大江氏の論文など大に參照すべきである。

第三節　林羅山

天正十一年(一五八三)——明曆三年(一六五七)

一、學　風

羅山が朱子學を主張して所謂林家の學を與したのは惺窩を待つて初まつたのではない、彼れの幼時世間未だ宋學を知らず、彼年十八歲の時始めて朱子集註を讀んで大にその說に服し、遂に徒を聚めて朱子學を講じたことは其事蹟に現はれてゐる、此時尙ほ古來の慣習に依て古註の講習盛んに行はれてゐたので隨分周圍の人々から異端として排斥されたのであるが、家康は彼れの非凡の才學を認めて敢て之を禁せず、寧ろ彼れを激勵したので彼れの朱子學に對する信念

は益〻強く後ち惺窩の門に至りて師弟の禮を執つたけれども朱子學に對する信念は既にこれより前に確立してゐたのである、隨つて其學風は惺窩と一致することは出來なかつた、惺窩が朱子學を講じて尙ほ陸王老佛の説を斥くることを爲さず、頗る寛大なる態度であつたことは彼れに取ては甚だしく不滿であつたのである、入門前から吉田玄之を通じて再々惺窩と之を論議してゐる、例へば慶長九年廿二歳の三月吉田玄之に與へた書簡に、

向者先生、(惺窩を指す)專言二陸氏之學一、陸氏於二朱子一、如二薰猶氷炭之相反一、豈同器乎、同爐乎、其無極大極之論、問答甚多、陸氏遂塞、陸氏之問莚也、朱子之答鐘也、朱子不レ廻レ頭、有レ如三寸莚撞二鉅鐘一、其事詳見二朱子集、及經濟文衡一若夫論二太極一則有二周子之志一可也、有二陸氏之志一不可也。(文集第二寄田玄之)

と論じて、陸氏の學を排し、更に進んで孔門の學、朱子を以て宗とすべき論

じて曰はく、

夫子之道在二六經一、解レ經莫レ粹二於紫陽氏一、舍二紫陽一弗二之從一而區區象山之是信、不レ幾二於似レ惑歟、唯是學二四書一而後言レ道亦不レ晩也。（同　上）

羅山の主張は實に此くの如く旗幟鮮明であつた、佛老を排し、陸王を喜ばなかつたのは是れが爲めである、此の信念は彼れの一生を通じて變る所なかつたのである、此の信念を以て、終に江戸幕府を動かし、天下學問の基準をして朱子學に取らしめ、斯學をして隆々たる勢を以て四方に傳播せしめ、遂に德川時代儒敎文化の世を現出せしむる基礎を强固ならしめたことは、其功績寧ろ師惺窩に勝るとも劣るものでなかつたのである、彼れは此くの如く朱子學を中心として道を論ずるも決して朱子の説に盲從せず、朱子の理氣二元論を否定して唯心の一元説を主張してゐる、その他道德説に於て宋儒の形式論に拘泥せず、飽くまでも日本固有の道德觀念を加味して之を日本人として行ふも決して矛盾する

所なきやうに注意してゐる所など、流石に日本儒者の先達としての偉大さを想はしむるものがある。

彼れは惺窩と同じく德川氏の初期文敎漸く勃興の機運に際會し、その非凡の才學を以て大に學問普及の爲めに力を盡したことは吾人の忘るべからる所である、其の道德論に至つては何處までも朱子一點張りで、多少偏狹固陋の點は免れなかつたけれども、一般の學問研究といふ立場からは敢て宋學の一方に偏せず、凡べての方面にその研究の端緒を開き大に後學を裨益してゐる、此の點に於ては惺窩と違つて時代の進步といひ、自己の幕府に於ける地位といひ、頗る便利であつたから、惺窩の爲し得なかつた事業をなし遂げてゐる、四書五經の加點は固より、老子、莊子、楚辭、文選、國語、戰國策、十三經註疏等より爾雅、急就篇の類に至るまで凡そ三十餘種の多きに及んである、殊に後世の學者を裨益し、學問普及に功績の著大であつたことは、以上の經子史集等の加點の外に多

くの經解（諺解）を著はして童蒙に便したことである、此の經解類も亦十有餘種の多きに及んでゐる、後年物徂徠がその學問の始をなしたのも羅山の大學諺解に由つたものであることは有名な話である、羅山が「經典題說」を著はして支那の古典を平易に解釋してゐるが之を讀んで吾々の感心するのは凡て日本の例を引いて何人にも一讀分明ならしむることに注意してゐることである、又た彼れは單に支那の古典を解題するのみならず、日本書籍考を著はして本邦古典の尊崇すべきことを敎へてゐる、彼れは決して偏狹なる支那心醉の學者でなかつたことは以上の事蹟に依て明らかに知らるゝであらう。

尙ほ最後に彼れの學風に就て辨ずべきは、彼れが幕府顧問の地位に在りて、其優遇を受けたるに依て、敬幕思想を鼓吹して反朝廷の氣運を促し、後世名分の論を紊亂するに至りしは、彼れ實にその俑を作つたのである、彼れには尊王思想を見ることが出來ないといふ非難である、これも羅山の著書を通讀すれば

決してかゝる非難はなし得ないのである、彼れが國史に精通してゐたことは本朝通鑑（其子鵞峰に至りて完成）の編著ありて大に史學研究の必要を後世に示されたるに依て知られる、（勿論呉太伯を日本の祖と爲すやうな僻說はあつたが）、苟も國史に精通する者は必ず本邦上代の事を知悉して武家政治の變體なることは自然に了解さるゝことは言はずして明らかである、只その身幕府に事へてその顧問に備はるの故を以て之を如何ともする能はず、況んや家康に於ては皇室を尊崇するの念厚く、決して彼れの思想に反するものでなかつたのである、そこで彼れの立場としては目下の幕政をして、ますく朝廷を尊崇する實蹟を擧げしむるに在つた、卽ち皇室尊崇を標榜して幕府の發達を計るに在つた、敬幕思想と皇室尊崇の念とは彼れ自身に在つては何等相反するものと考へなかつたのであらう、換言すれば幕府として皇室尊崇の實蹟を天下に知らしめ、以て天下の人心を幕府に集注せしめんとしたのである、そは兎もあれ彼れ一個人として卽ち私人と

ての羅山は實に勤王心の欝勃として抑へ難きものがあつたのである、羅山文集一部を繙て見ばその證歴々として明らかである、その子鵞峰その孫鳳岡の如き皆その遺志を繼承してゐる、卽ち世の一部の論者の如きは未だ能く彼れの眞精神を了解せざるものなること以て知るべきである。

二、學　說

羅山は惺窩と同じく啓蒙時代の學者として其任たゞ學問の普及に在りたるなれば自家の創見を世に發表するの餘裕なかつたのみならず、その職務は繁劇なる幕府の顧問といふのであつたから研鑽の功を積む閑を有しなかつた、師の惺窩は羅山の才學を以てして徒らに俗務に鞅掌して自己の志操を卓勵せざるは惜しむべしと爲し曾て羅山に書を與へて早く閑地に就て不朽の著作を爲さんことを勸めたけれども、羅山はその言を用ゐる機會を得なかつたのである、そこで羅山の事業は書籍の蒐輯或は出版に力を用ゐ、著述萬卷なるも徒らに編纂の業

に止まつて自家の創見に乏しい、倫理學說として春鑑抄、三德抄、敵戒說又は童觀抄の類は、たゞ書物の解釋に過ぎないので特に述ふべき程のものはないから、朱子學尊崇の信念より他の諸敎を排したことゝ、國體の精華を發揚し、神儒一致說を高調した點を簡單に記して置かう。

（イ） 異端排斥の論

彼は前述の如く常に朱子學以外の老佛陸王の敎義に對して反對の意見を發表した、老子に就ては左の如く批評してゐる、

李耳曰く、道の道とすべきは、常の道にあらずと、其所謂道は淸淨無爲といふなり、天地未分をいふなり、夫れ人今の世に生れて上古の無事をなすべからず、而るを況んや何を以て此身を天地未だ判れざるの先に置かんや、若し天地を以て譬喩となし、渾沌未だ開けざるを以て一念を起さずとせば、則ち一息未だ斷えざるの間、何を以て一念を起さゞらんや、人は本と活物なり、

爭か枯骸と似んや、蒙叟が枯木死灰及び柴立の說亦是の如く異端の言語なり、聖人の道は然らず、其道、君臣父子男女兄弟朋友の外にあらず、之れを行ふ所以のものは五常なり、五常本と一心にあり、此心の具ふる所の理、卽ち是れ性なり、人人の共に由る所のもの道なり、道を心に得る之を得といふ、故に道德仁義禮智は其名異にして實は一なり、李耳が云ふ所の道にあらざるなり、若し人倫を棄てゝ別に道ありといはゞ、卽ち儒道にあらざるなり、聖人の道にあらざるなり、堯舜の道にあらざるなり。（文集卷六十八參照）

老子の所謂道と儒教に於て謂ふ所の道とは固より異なるものなることは羅山の言を竢たずとも何人も之を知る、たゞ彼れは未だ深く老子の哲理を解せずして常識を以て、之を一概に排し去る所その研究の深淺亦た問はずして明かである、要するに朱子學尊崇の立場より之を論じたるもの今日より觀れば一顧の價値なきものである、次に佛教を評しては左の如き言をなしてゐる。

浮屠氏畢竟、山河大地を以て假となし、人倫を幻妄となし、遂に義理を絶滅し、我道に罪あり、……彼れ君臣を去り父子を棄て以て道を求む、我れ未だ君父の外別に所謂道あるを聞かざる也。（文集五十六參照）

夫れ道は人倫を敎ふるのみ、倫理の外何ぞ別に道あらんや、彼は出世間と云ひ遊方外と云ふ、然らば則ち人倫を捨てゝ虛無寂滅を求むるなり實に是れ理なし。（雜著卷一參照）

宗敎と倫理との概念に就て明確なる知識のなかつた當時とはいへ、是れ亦た佛敎を解せるものゝ言にあらざることは言を竢たずして明らかである、陽明の學に對しては彼れ自身陽明と同じく、一元的唯心論を主張しながら尙ほ之を排して「陽明攢眉」の一書を著はしたが、此書今日傳はらず、惺窩との問答に於て「陽明出でゝ后、皇明の學大に亂る」（惺窩答問）の言をなしてゐる所から觀ても之を排斥する意見であつたことが窺はれる、陸象山の學に就ては旣に學風

の所に述べたから今之を言はない、最後に耶蘇敎に對する彼れの意見は如何といふに、其生存中不干(Frois)といふ宣敎師と敎義に關する問答をしたことがある、その結果「排耶蘇三篇」の一書を著はしてゐる、その他友人石川丈山に與へた書簡(文集卷七示石川丈山書)の中にも之を排斥する意見を述べてゐるが、當時宣敎師の執れる態度などを知る材料となるが、耶蘇敎の敎義を研究した結果でないから學問的には他の老佛陸王に對する議論と同樣に價値なきものである、彼れは此くの如く儒敎殊に朱子學以外の他一切の敎義に對して極力之を排斥することに力を用ゐた、縱令、その議論は幼稚であり偏見であつても此くの如き地位と境遇とを利用して、儒敎の宣傳に畢生の努力を惜しまなかつたことが、德川時代儒敎文化出現の動因となつたのであつて、この點に於て其功績沒すべからざるものがある、林家三代以後實力萎微として振はざりしも明治の時代まで、其學を維持せしめたるもの實に彼れが一生斯道に努力せる結果の賜に

外ならない。

（ロ）　神儒一致說と國體論

羅山は師惺窩と違つて盛に佛敎を攻擊してゐるが、神道に對して大に尊崇の意を表し、本朝神社考三卷神道傳授抄二卷、神社考詳說一卷、神書私考一卷、中臣祓抄二卷、神道祕訣二卷等神道に關する述作をなし、從來の神佛習合は佛者の佛敎興隆の方便に過ぎないものとして其無稽の說なることを論じ、神儒二敎の一致すべき理あることを力說してゐる、此の點に於ては彼れは師說を奉じ更に明確に之を論辨してゐる、例へば

本朝の神道は是れ王道、王道は是れ儒道固より差等なし、所謂唯一宗源、理當心地最も當に意を盡すべし。（文集附錄卷三）

王道一變して神道に至り、神道一變して道に至る、道は所謂儒道なり。（文集卷六十六）

といへるが如き神儒契合の自然の理なることを論じてゐる、蓋し彼れは佛者が神道を利用して其教を宣傳せるに鑑みて、之れに依て大に儒道の興隆を企畫せんとしたのである、而して其力説空しからず、遂に佛教文化の時代を變じて儒教文化の時代を現出せしむるに至つた、彼れ以後の儒者は二三の例外を除いて何れも神儒合一の説を繼承してゐることは注意すべきである。

羅山が大に皇室を尊崇し、我が國體の美を謳歌してゐることは、その文集を繙て見れば明らかである、例へば文集卷一の劈頭に「倭賦」一篇がある、その起頭の文に「惟吾邦之靈秀兮、神聖之所二挺生一、環以二太平洋海一兮、輝二暘谷之明明一名レ茲曰二日本一兮」とありて以下大に國粹の美を稱嘆してゐる、恰かも藤田東湖の正氣歌を誦すると同様の感興を起さしむる、その他史上の人物論例へば源頼朝、北條義時などの功罪を論辨する場合にも、その尊王愛國の精神が紙上に躍如として現はれてゐる、殊に彼れの三種神器に關する説を讀むときは其

精神の那邊に在るかは直ちに觀取せらるゝのである、云はく

三種の神器、璽は仁に象るなり劍は勇に象るなり、鏡は智に象るなり、本と此の三德を具ふるものは神明なり、夫れ心は神明の舍なり、既に三德を具ふれば卽ち神豈に遠からんや……若し夫れ器は多く人爲より出づ、故に禹王の九鼎と雖も亦た然り、我が朝の三神器なるものは自然の天成にして人爲を假らず、是れ亦た以ある哉貴むべし、敬すべし。（文集六十九、隨筆）

と、その國體讃美論者なることを以て知るべきである。

○林家一門の事を述ぶる順序となつたが、之を述ぶるときは廣汎に涉りて到底本書の如き制限ある叢書では書き盡し得ないので、之を省略することにした、「日本儒教概說」の中で其盛衰の狀を述べて置いたから、羅山以後の事を知らんとする人は該書を一讀されたい。

【參　考】

慶長元和の頃京師にて林道春初めて程朱の新注にて講說し、明經博士淸原秀賢これを罪せらるべしと申す時、神祖寛大の思召とて何事なく廣く世にも講習する事に成しは世人皆知る所なり、然るに尺素往來といへる消息の事書し册子足利の中頃より上に出來し書にや、其中に近代獨往軒健叟法師以宋朝濂洛書義爲正開講於朝庭已來程朱二公新釋可爲肝要也と見ゆれば道春より遥か前にも禁中にて御取用もありし事なるべし、左らば道春都下にて新注講說此の健叟の事は公卿も武家沙汰に及ばざりし、又嘉吉二年壬戌十二月室町將軍義勝朝孝經誦了て次に大學を授け奉る方外記淸原業忠に大刀馬を賜るなど見ゆれば宋儒新注行はれしも久しき事なるべし。（人見雜記）

〔註〕人見雜記は人見卜幽（林塘と號す）の雜記にして初め惺窩門の菅得菴に就て學び、後ち道春の門に入りし人なり、水戶第一世威公に事ふ、義公の幼時此人に就て學ぶ所多しと謂はる。

【著　書】

羅山文集七十五卷

羅山詩集七十五卷

羅山文集附錄五卷

以上三部は羅山先生文集二卷羅山先生詩集二卷併せて四卷となし大正七年より同十年の間に京都の平安考古學會より發行されたるものあるを以て之を見るに便なり、三德解、西銘講解、惺窩答問、敵戒說の諸篇は皆第一卷に收載されたり、尙ほ春鑑抄、三德抄、敵戒說は續々群書類從卷十、教育部に之を收めあるを以て就て見るべし、要するに羅山の學問は右四卷の書を通讀すれば之を知るに十分なるべし。

梅村載筆三卷（珍書文庫隨筆大觀第三冊に收載さる）

儒門思問錄四卷（寛文二年刊）

童観鈔上下二卷一冊（萬治二年刊）

日本書籍考一冊（寛文七年刊）

經典題說　一册（日本書籍考を乾の卷となし、此書を坤の卷として同時に刊行す）
羅浮筆記　一册　寫本
神道傳授（國書刊行會第二期神道叢說の中に收めらる）
本朝神社考六卷（或は三册本あり）
雨夜物語一卷（大田南畝廣三十輯の内にあり）
（その他一々列記するの煩に堪へず）

第二章　木門派の倫理學說

第一節　木下順菴の學風

元和七年（一六二一）――元祿十一年（一六九八）

窩惺一たび朱子學を稱へてより林羅山、松永尺五の如き碩學その門下より輩出し、所謂京學はますく隆盛を來たすに至つたが、林羅山は幕府の顧問とな

つて江戸に下り、別に林家の學を起し、學風も師惺窩と甚だ異なるものあるに至つたことは、既に述べた通りである、然るに松永尺五は獨り惺窩の衣鉢を傳へ、永く京都に止まつて講學に從事し、師惺窩と同じくその門下多士濟々たりしことも亦た既に之を述べた、尺五の門下幾多の人材を出したが、能くその學風を繼承して、同じく京都の地に於て育英の業に從事し、又た幾多の人材をその門下より養成したことは木下順菴に過ぐるものはない、順菴は加賀侯に仕へたが、天和二年幕府の儒員となつて江戸に下り、こゝに木門の派を生じ、林家の學者に對抗して、その勢之を凌駕するものあるに至つた、故にこゝに章を別つて所謂木門派の人々に就て、その學問思想を概觀して見ようと思ふ。

順菴の遺著として自分の見たものは錦里文集十九卷のみで、而かもその多くは詩文に關することで直接倫理思想に就て、その意見を窺ふに足るものはない、然しながら其門下より近世倫理學の泰斗たる室鳩巣の如き人を出し、歴史

家政治家としての大家新井白石を出し、詩人として古今を絶する祇園南海或は近世折衷學の祖とも謂ふべき榊原篁洲の如きを出してゐる所から観ると、順菴の學問の該博にして決して一派の學に偏せず、能くその師尺五の學風を繼承せるものなることが知られる、物徂徠は順菴を以て近世學問の泰斗として之を激賞し、服部南郭は順菴を以て古學の祖として之を尊崇するに至つたのも亦た所以あるかなと想はれる、實に順菴は近世我國儒學に於ける自由研究の機運を鼓吹せる先驅者とも謂ふべきである、順菴は此の如く決して一派の説に偏する人ではなかつたが、其の朱子を尊崇し其學を以て孔門の正系なりと信じたことは詩文の中に、屢々之を推稱してゐることに依て知られる、例へばその述懷の詩に於て「孔孟程朱は萬世の師なり」と稱し、或は陸象山と朱子とを比較して、

遺經千歲決₂群疑₁。義理精微抽₂繭絲₁。仰止鵞湖論₂舊學₁。確乎鹿洞定₂新規₁。

百王著鑑編ニ綱目一。四子楷梯錄ニ近思一。頓悟金谿何足レ貴。泗源嫡派舍レ君誰。

と詠んでゐるのを見ると、陸王の說よりも朱子學を以て孔門の正系なりと信じたことは疑ひない、然しながら前述の如く、決して宋學の圈套中に跼蹐する人でなく、諸種の學にその研究を進め、大に自由研究の精神を鼓吹した寛大なる學風であつたことも、亦た疑はれない事實である。韓人成翠虛の順菴を稱せる詩に、

博學宏材冠ニ日本一。青眸開處揖ニ高風一。
邦人定服賢師弟。洙泗淵源萬古通。

とあるが、當時我が學界に於ける順菴の勢望以て想見すべしである。

順菴門下第一の先輩は柳川震澤であるが、此人は忠實に順菴に仕へその學を祖述するに努めた人で思想上別に見るべきものはない、木門の十哲として世に傳稱せらるゝは室鳩巣、三宅觀瀾、雨森芳洲、新井白石、南部南山、松浦霞沼、

祇園南海、榊原篁洲、服部紹卿、向井滄洲の人々である、次に鳩巣に就て之を述べよう。

【著書及び參考書】

錦里文集十九卷（その他の著書班荊集二卷等は予未だ寓目を得ず。）

恭靖先生遺稿三卷（續々群書類從第十三卷に收載さる）

木門十四家詩集三册（甘雨亭叢書第五集にあり）

十四家とは室直淸。木下順信。木下寅亮。田伯隣（號鶴樓）西山順泰。榊原玄輔。南景衡。橘伯陽。松浦權。祇園昌（南海）。勝田彝。石原卿。岡嶋達。岡田信盛の十四人なり。

和韓唱酬集七卷（天和三年刊）

以上二部の書以て參考に供すべし。

第二節　室鳩巣

一、學　風

順菴門下第一の倫理學者としては室鳩巣を擧げねばならぬ、然しながら鳩巣の學風は師順菴と異なつて純然たる朱子學を標榜し努めて其他の學派を攻擊し之を排斥するのであるから寧ろ林羅山の學風に近いのである、而して之れにはその原因がある、鳩巣の事蹟を見ると、彼れは順菴の外に今一人の大切なる先生を持つてゐた、卽ち山崎闇齋の門人羽黑養潛その人である、羽黑氏(後ち本姓牧野に改む)は近江の人で名を成實、字を養潛といひ、迂巷と號し、山崎闇齋に就て學び、德行を以て知られ彥根侯に仕へたが、後ち致仕して加賀に徙居した、鳩巣が京都の順菴門(所謂雉塾)に在る時も、加賀侯に仕へた時も、此の養潛先生の敎を受け前後十七年間その嚴勵なる學風と、峻直なる行爲に依て深く感化を蒙つたことは鳩巣自身の言ふ所である、曾て養潛に答ふる所の書を

見るに、

淸自レ好レ學、有下略得二古人遺意一者上、所二聞見一士大夫亦頗多。然於二義理一則必得二高明之許可一以自信、於二文辭一則必經二木翁之品題一以自足。私心自謂、二公天下之知己也、故平生以三今世有二二公一爲レ樂耳。

といつて、文章に於ては順菴の感化なるも、倫理道德の方面に於ては寧ろ羽黑氏の感化一層大なるものあつたことを告白してゐる、今鳩巢の學風を觀るに順菴の如き寬大なる學風でなく、殆んど山崎派の如き偏狹固陋の弊に陷つてゐるのも亦敢て怪しむに足らない、然しながら鳩巢をして斯の如く朱子一點張りの說を固持せしむるに至つたに就ては、時代の影響も與つて大なる原因をなしてゐる、卽ち鳩巢の當時に於ては惺窩、羅山以來の朱子學よりも物徂徠一派の蘐園學派が隆盛を來たし、伊藤仁齋の堀河學派亦た頗る盛んに行はれ、何れも朱子學を排斥してゐた時代であつたから、朱子學は稍々その勢衰へて孤城落日の

感があつた、鳩巣は此の學界の古を厭ひ新に趨る風潮を痛嘆し、何處までも從來の學を維持せんとして孤軍奮鬪の力を盡したのである、其處で此等の反對派を憎惡する感情も手傳つたのであらう、殆んど獨斷論に類するが如き口吻を以て朱子學を力說した、彼れが一生異學混戰の間に立つて毅然として朱子學を鼓吹し、萎微として振はなかつた朱子學を再び盛大ならしめたことは日本朱子學派の偉勳者と謂はねばならぬ、之を要するに彼れは熱心なる朱子の信者であり朱門の忠臣であつた、而して朱子學の神髓骨子たる義理の敎義を以て武士道を鼓吹し、幕府の命に依て六諭演義大意及び五倫五常名義等の書を撰して風敎の振興に畢生の力を盡したことは我が國倫理學史に於て重要なる地位を占むるものである、彼れが如何に忠孝の節義を重んじ之を鼓吹するに力を用ゐたかは世に弘く行はるゝ駿臺雜話一篇に依ても容易に知らるゝのである、又た彼の當時學界論爭の中心となつた赤穗四十七士の擧動に就ても眞先きに「赤穗義人錄」

一篇を艸して、之を世に公刊し、義士としての功績を讃美し、大に世道人心を益したことは世間周知の事實である、所謂義人義士の稱は彼れその先唱を爲したものと謂ふも敢て不可なきことゝ思はれる。

鳩巢が我國風教の振起に功績の著大なりしことは以上述ぶる如きものであつたが、彼れは山鹿素行の如く我が國體を明らかにせず、我が固有の神道に就ても甚だ無理解であつたが爲めに、大義名分の論に暗かつたことは惜しむべきである、幕府に阿諛するの餘り、不正の稱呼を以て將軍を尊崇し、大に名分を紊つたことは大なる缺陷である、勿論中華崇拜思想が學者の頭腦に深く侵染して居つた當時のことであるから、獨り罪を彼れ一人に歸することは出來ないが、朱子學の巨頭として學界に尊崇されたる彼れにして此の誤を爲すに至つたことは後世に及ぼせる影響から觀て甚だ遺憾である、楠公を以て諸葛孔明に劣れるものと論じた文に依て後年志士高山彥九郎より腐儒何をか知らんと罵倒された

のも、全くその學風に斯る大なる缺陷があつたからである、又た水戸の史臣安積澹泊に對して大日本史の論賛に於て安部仲麿のことに關して一言の賛すること なきを難じ、却て大義名分論の上から反駁されて、流石の鳩巣も深く愧服したといふやうな話もある、然しながら縱令ひ此くの如き缺點があつたにせよ、その倫理學說は日本倫理學史の上から觀て注意すべきものであるから、以下その重要なる點に就て述べることゝする。

二、博愛主義

鳩巣の倫理思想を窺ふべき著書としては鳩巣文集四十六卷の外に周易講義八卷、周禮新疏十卷、大學新疏二卷、中庸新疏二卷、四書講義、西銘詳義一卷、大極圖述一卷六諭衍義大意一卷、五常五倫名義一卷士談一卷明君家訓一卷不亡鈔四卷等多くの述作あるも、此等の著書の中には今日容易に見るを得ざるものがあり、且つ彼れは前述の如く、學問の標的は朱子學なりと確信せるものなれ

ば、何れも朱子說を敷演せるものに過ぎないので、特に彼れの學說として其創見を窺ふに足るものはないが、自ら孔孟程朱の忠臣を以て任じたる彼れは、仁義說を以て其學問の根本基調としてゐたことは、一般に流布せる駿臺雜話一篇によつて之を知ることが出來る、卽ち同書卷二に於て「仁は心のいのち」と題せる一條があつて之を以て人倫の根本なりとして詳かにその所見を述べてゐる、云はく、

心の仁あるは人の元氣あるがごとし、人の元氣は脉にあらはれ、心の元氣は愛にあらはる、脉のかよひ絕ゆれば人死する如く、愛の理ほろぶれば心死する程に、仁は心のいのちとも申すべし、……………仁義禮智いづれも心の德にして各其理分るれども其本源は仁に外ならず云々。

仁を以て心の生命となし、心德の全體なりと論ずる所を以て之を觀れば、博愛主義の倫理說を唱ふる意なること知るべし、彼れは此の理論の例證として佐

佐木四郎高綱が宇治川の先陣、那須與市宗高の扇の的を射たる故事を引いて、武勇も亦た仁に根ざし測隱の心より發するものなることを說き、忠孝も禮義も文道も武道も、我が心の內より油然として潤ひわたりて發するにあらずんば眞の道にあらざることを述べてゐる、人を憐れみ物を愛する博愛の德を以て人間第一の道德とする、然しながら博愛卽ち仁の一偏によるときは却て仁を害するものであるとして、孟子の說を取つて仁義說を主張し、義の大切なることを述べて、「若し義の制裁なくば心の生道を損じて仁も亡びぬべし」といひ、義の一字如何に重大なる意義を有するかを敎へ、孟子の所謂浩然の氣も亦た畢竟この義より出づるものなることをいひ、浩然の氣は又更に義を助くるもので兩者の相互的關係あることを力說してゐる、彼れが仁と同時に義を重んじ、大に正義の觀念を鼓吹したことは武士道の奬勵に與つて大なる影響を及ぼしてゐる、武士道發展の歷史から觀る時は鳩巢の學問思想は重要なる地位を占むるものであ

る、然しながら、前既に述ぶる如く大義名分の論に暗く、國體の尊嚴を無視したことは許すべからざる缺點である、次にその點に關して鳩巢の神道觀を述べて見よう。

三、神道論

惺窩一たび神儒一致の說をなしてより羅山更に之を高唱し、以後儒學を奉ずるものは何れもこの思想を以て根本基調とし愈々益々日本儒學の本領を發揮してゐるに拘はらず、鳩巢は朱子尊崇の極遂に崇外主義に陷り我が神道に對しては甚だしき輕侮の念を持するに至つた、仙臺の學者遊佐木齋は山崎闇齋の門に游び、その神道論を奉じて盛んに之を唱道したが、鳩巢は遂に之れに對して反駁論を艸し彼れの神道觀を披瀝してゐる、今それに依て彼れの意見を述べて見よう。

彼れは常に神道家が神道を以て我國之道と爲すことに疑問を有つてゐた、道

は天下の公道で獨り我國の私する所でない、道の大原は天に出づるもので聖人の教これである、然るに我が神州の道とか、我國の神道とかいつて儒教の上に置て之を尊奉するのは宜しくないといふのが彼れの意見である、遊佐木齋に與ふる書に之を論じて、

蓋道之大原出二於天一道一本者也、惟我聖人爲二能繼レ天立レ極以爲三教於二天下後世一、則天下後世由レ之以爲二聖人之道一是道一統者也、故天之所レ覆地之所レ載、日月所レ照、霜露所レ墜人無二異道一道無二二稱一………今觀二來書一曰我神州之道、一曰我國之神道、其尊奉之意殆出二於吾儒上一矣、直淸竊惑焉耳。（寫本神道論）

といつて儒道以外に道のなきことを述べ、更に神道の無用を論じては、

所謂道者果何道也、使三其不レ合二於聖人之道一則是異端也、爲二吾儒一者當レ力辨二其異一而排レ之不レ甲使三人有二佗岐之惑一、不レ當下苟有レ所二阿附一以爲中我國之

道上。使三レ其合二レ於二聖人之道一則神道亦儒也、其稱爲レ道者猶レ曰二堯舜之道、文武之道一云爾。爲二吾儒一者當下引而進レ之以歸二諸儒一而明中道一統之理上、不レ當下與レ儒並稱而左中右上上。（同　上）

と說き、神道を特に唱道する必要なきことを述べてゐる、而して彼れは更に進んで神道の到底儒道に及ぶべからざることを述べて、我が國には禮樂刑政典章文物に至るまで唐虞三代に勝るものはないではないか、立言垂訓に於て四書六經の如きものがあるか、其他天文曆數卜筮醫藥兵術の類、凡そ人類の以て生を資くる所のものにして、之を中國聖人の敎に待たないものはないではないかと言つて儒敎を以て世界第一の敎義なることを力說してゐる、斯る考へからして遂に今日ならば忽ち物議を釀すやうな天壤無窮の說をも否定せんとしてゐるのである、鳩巢の如き大儒にしてこの誤れる神道論卽ち國體に關する論議をなしてゐるのであるから、當時中華崇拜主義が如何に深刻に學者の頭腦を支配して

ゐたかは略々想像が出來る、吾々はこれ以上彼れの神道論に就て述ぶることを避ける、要するに彼れの學風の缺陷は以上の如き思想がその原因をなしてゐることを知れば足りるのである。

四、實踐道德論

鳩巢の學說に就ては、彼れが晩年の作であらうと思はるゝ不亡鈔などを觀ると、餘程從來の說と違つて、公平なる議論をなしてゐるが、今此の事に就て細論すると却て繁雜になるから之を略し、また其士道論に於ても見るべきもの尠くないが凡て之を略し、彼れが平生諸生を戒めて日常の敎訓としたる實踐道德論の二三に就て簡單に述べることにする。

彼れは人間が此の世に處して寸時も忘るべからざる最も大切なることは報恩の道であると信じ、常に自ら之を戒め亦た人をも戒めてゐる、而して報恩の三本に就て敎を垂れてゐる、云はく、

翁常に立居につけて思ひ出でつゝ忘れぬ事三あり、其三は父の恩、君の恩、聖人の恩なり、……夫報レ本不レ忘レ恩は、人道の大端なり、されば父母はわが出來し本なり、我れを生じて我れを育す、一毛一髮までも、父母の遺體にして遺愛のある所にあらざるはなし、いかゞして忘るべき。さて君恩に浴して不レ餓不レ寒、妻子を養ひ、親族を賑はす。すべて養生送レ死の道、世話にいふ箸一本までも、君恩にあらざる事やある、いかゞして忘るべき。されど飽くまで食し暖に衣て、君父につかふまつる道をもしらずば禽獸に近かるべし、幸に聖人の敎によりて義理のあらましをもしり、禽獸に免かるゝは、これ聖人の大恩にあらずや、いかにして忘るべき、およそ人として常に此三を忘れずば天理おのづからほろびずして、本心を失ふに至らざるべし、衆善のあつまる所ともいふべし。（駿臺雜話卷一）

と、彼れは之を以て我が家學の要訣なりと稱し、常にその實踐躬行を期したの

である、道德の實行に當て報恩の大切なること實に彼れが言ふ所の如し、佛敎に於ては四恩を說きて、更にその詳細を極めてゐることは人の知る所である、報恩道德は實に實踐倫理の根本を爲すものである、鳩巢が之を以て我家の要訣とせるは流石に一代の道學者たる彼の面影が窺はれる、次に彼れは中庸の所謂愼獨の工夫に就ても之を重要視してゐる。古今集卷頭の在原元方の歌によつて之を說いて曰はく、

我心に人しらず一念のきざすは、獨居の時、暗處の事なれば、なにのけしきも見えず、いはゞ年の內に春の來るに同じ、一念の萠すところに、旣に善惡のわかれあれば、年の內にこぞとことしのわかるゝに同じ、されば千里の謬も毫釐の差よりおこるといふも、こゝにある事なり、濂溪先生の幾は善惡といへるも此事なり、是非のさかひ善惡の關としるべし、さればは目をはなたず、此關を守りてわれとわが心に善とやいはん、惡とやいはんと尋つゝ、一筋

に惡をさり善に向ふこそ、我儒の修行の本とする事なれ、もし此所に心ゆるして色にいで聲にあらはれて始てさとらば、たゞ手の延たるといふばかりにもあらず、たとへ勉强すとも、力をもちゆるに難かるべし。（同　上）

と說き、善惡の幾、最も愼むべきことを敎へてゐる、是れ亦た吾人日常心を用ゆべき事たるは言ふまでもない、彼れは尙ほ聖人の誠といへる條に於て「君子室に居て言を出して善なれば千里の外應ず、況んやその邇きものをや、室に居て言を出して不善なれば千里の外違ふ、況んやそのちかきものをや」といへる孔子の言を引き、又た「欲㆓人勿㆑聞莫㆑若㆑勿㆑言、欲㆓人勿㆑知莫㆑若㆑勿㆑爲」といへる昔し枚乘が吳王を諫めたる言を用ゐて、內省の必要、誠實の功を述べてゐる、その他學問は讀書に限るべからず、世間日常の善惡一切の行事取て以て我が師とすべきを說き、大に日常實踐の工夫に就て深切なる敎訓を垂れてゐる、駿臺雜話一篇は悉く彼れが實踐の工夫を述べたるものであるが、今たゞ其初卷

の中より、その斷片を抄出したるに過ぎない。

【著　書】

鳩巢文集三十八卷九册（前編十三卷、後編十四卷、補遺十一卷、寶曆十二年刊行）

駿臺雜話五卷（此書今は活字にて最も弘く世に行はるゝが故に鳩巢の思想を知るに最も便なり）

駿臺隨筆　寫本五卷

任筆錄　一卷

文公家禮通考

赤穗義人錄

病中須佐美

天下天下論

大學和歌

書批雜錄

（右六部の書甘雨亭叢書に收載さる）

五常名義一卷

五倫名義一卷

六諭衍義大意一卷

室鳩巢自警條目一卷

（以上四部の書は日本教育文庫第二編訓誡篇上卷に收載さる）

兼山麗澤秘策八卷　寫本

不亡鈔四卷　寫本

獻可錄三卷　寫本

（以上三部の書は日本經濟叢書第三卷に收載さる）

明君家訓一卷

其他尙多くの述作あるも今之を省略す。

第三節　中村蘭林の學風

元祿十年（一六九七）——寶曆十一年（一七六一）

鳩巢門下として世に所謂室門の七子と稱する奥村源右衞門修運（天遊）、奥村彈正忠順（盈進）、青地藏人齋賢（兼山）、青地藤太夫禮幹（俊新齋）、小寺武兵衞遵路（希光齋）、小谷伊兵衞繼成（廉泉）、山根勘右衞門直廉の七人を初め、中根東里、綾部絅齋、伊東澹齋、河口靜齋等多くの俊才を出してゐるが、眞に能くその學統を繼承して、朱子學の宣傳に力を盡した人は中村蘭林その人である。故に今鳩巢に次で此人の學風を述べて見ようと思ふ。

中村蘭林には多くの著書あるも、其中で學山錄六卷、講習餘筆四卷は弘く世に行はれ我が國朱子學の傳播に與つて大なる功績を寄與してゐるのみならず、門人の中には柴野栗山の如き人を出してゐるのを觀ても、朱子學派の重要なる地位を占むるものなることが知らるゝであらう、學山錄は漢文であるが、講習

餘筆は假名書である、今主として講習餘筆によつて其學風如何を概觀することとする。

師鳩巢は朱子學に偏して、其の極僻見固陋の說を吐露してゐるが、蘭林の識見は遙かに師よりも卓絕した所がある。卽ち彼れは程朱を宗として大にその學を鼓吹したが其硏究の方法に於て敢て程朱に偏することを爲さず、朱註を讀むには必ず古註を幷せ見るべきことを力說してゐる、古註を見るに非ずんば朱子の長短を知ることが出來ないといふのが彼れの主張である、その言に曰はく、朱註を讀むには必古註を看るべきことは、其字義訓詁は多く古註にとり、其義理も亦古註に從ふ處每每これありて集註の明潔親切にして辭約に義精しく淺は淺くとき深は深くとける、其功の功ある處彼の舊註より看破せざれば看出し難きことなり、然るに千慮の一失賢者もこれを免れざれば亦往々に疑ふべき處もこれ無とせず、或古言に違て古意を失ふや、或其大義の上に就て其

主意を認れること全くこれなきに非ず、是學者の具眼に存することなり、これ等の義も古註より眼を著れば看得出すべきことにて、又多く漢以上の古書を讀は自然と朱子の功も又疑ふべき處も知得べきなり、只宋儒の書のみ讀で目古書に度らず、朱子の本づく處も取捨の當否も看出すことなくば、恐くは看得ること難からん、又專ら古註を信じて、朱子の新註は大に聖經の旨を誤るとなし、唯古註に非ざれば不レ明として、集註においては一二次も看過せず、たまたま看讀するも精熟に不レ及は何としてか、其是非を辨じ得べきやよくよく思ふべきなり。（講習餘筆卷一）

その學問に對する公平なる態度、以て學者の標的とすべきである、彼れは此くの如き眞理を愛するの士たりしを以て宋學を信ずと雖も、亦た其の弊風の在る所をも能く看破してゐる、卽ち曰はく、

宋儒に至て義理大に開けて聖學に大功あれども、又學問の弊も宋儒よりこれ

あることなり、何となれば義理を考索するに力を用ゆる處より自然とこれを推して高からしめ、これを推て深からしむるに至て、文辭上の正面になき説も生じ、往々に穿鑿に失し附會に出ることとこれなきにあらず、畢竟漢儒の義理において淺陋なる處を補塞することとなるに亦却て枉るを矯て直きに過るの弊あり、それ故に明儒に至ては又宋儒の弊を救んとして反て直きに過ること ある者なり、二つながら皆非なり。(同卷二)

これ實に朱子の功罪を明らかにし、又たよく思想發展の徑路を説き得たる公正の論である。彼れ以後に於て朱子學の發展と共に之れに反する新學説の勃興するに至つたのを見ると、獨り朱子學派の功勞者と謂ふべきでなく近世學問の進歩を促進せしめたる先達として尊敬すべき人である、尚ほ講習餘筆は此くの如き平易なる文を以て書かれてゐるが、獨り學問上のことのみならず、修養上の教訓も亦た見るべきものが甚だ多い、殊にその晩學論などは人を感發せしむ

る好個の教訓である、彼れの事蹟を見ると幕府の儒官として任用されたのが五十一歳のときで、それまでは醫官として仕へたのである、そこで儒學の方から言へば彼自身も晩學の人であつたのであらう。晩學の決して悲しむべきでないこと、學問の成否は年齢の早晩によらないとして、古人晩學を以て成功せし人々の例を擧げ、その結論として、

唯學は其志の憤起するに有て、功深ければ力ら到ることにて早晩にはよらぬなり、たとひ少年より學ぶとも悠然たるこゝろにて困勉苦思せざれば、いつも舊面目にて進まぬことなり、たとひ晩學にて大に進むことを得ずとても、少しき得ることあらば世の碌々たる人の酔生夢死するには勝らざらんや云云。（同卷三）

以て晩學の人を奬勵し、早學の人をして反省憤起せしむる好個の訓誡とすべきである。

【著書】

學山錄六卷二冊（寛延四年刊）

講習餘筆四卷（延享四年刊）

（此書は博文館發行の日本文庫第六編に收載され、又た佐村八郎氏の漢書解題集成第五編には初の二卷のみを收載せり）

其他著書目錄に據れば、尙ほ幾多の著書あるが如きも以上の二書にて、其說を窺ふに足れり。

第四節　雨森芳洲

寛文八年（一六六八）――寶曆五年（一七五五）

一、學風

木門五先生の一人として鳩巢に次で注意すべきは雨森芳洲である、彼れは師順菴の推擧に依て對州侯に仕へたる關係上、能く華音に通じ、且つ國學を初め諸種の學問に造詣する所淺くなかつた、その識見極めて高く、順菴の學風を繼

承して誤る所なかつた。その學問研究の態度は常に調和的態度を以て進み、毫も學派の見に拘泥する所なく、而も能く日本的精神を把持して志操の堅固なるものあり、以て日本儒者の眞面目を發揮してゐる。彼れは凡ての學問に通じたる爲め、遂に儒道佛一貫の理を體得し、自家獨創の見解を發揮してゐる、その三教に對する見解に云はく、

上天の載は聲もなく臭もなしとは形なきなり、臭もなしとは體なきなり、佛家は之を虛空といひ、道家は之を自然といひ儒家は之れを理といふ、曰く然らば三家門を同うするか、曰く教を立つること異あり、自ら修むること一ならず、五官四肢之れを形といふ。湊して之れを名づけて之を體といふ。(橘窓茶話卷上)

又た曰はく、

老聃は虛無の聖なるものなり、釋迦は慈悲の聖なるものなり、孔子は聖の聖

なるものなり、三聖人の形而上を言ふや、謀らずして同じ、蓋し天唯ゞ一道にして理に二致なきが故なり、其形而下を言ふや差へり。（同上）

三教に對する見解は當時の儒者として誠に珍らしき公平の論である、彼れは三教の一理なることを信じたるが故に三聖人を以て衆父の父として尊敬せざるべからざることを論じてゐる。云はく、

余以爲らく、夫子なり、迦なり、聃なり、此三人は衆父の父なり、我れ子弟の列にあるもの、敢て抗せざるなり、抗すべからざるなり、當に之れに抗遇すべからざれば、之れを拱し、之れを揖し、之れを拜し、之れを稱すれば先覺といふ亦宜ならずや。（橘窓文集卷二）

かくて彼れは三家に對する斷案を下して「天惟一道理無ニ二致一立教有レ異、自修不レ一」と述べ、之れを以て自家の信條としてゐる、所謂分け登る麓の道は多けれど同じ高根の月を見んと言ふ意である。而して彼れの眞意は三聖一致であ

一つて未だ以て三教の一致を論ずるに非ざることは左の言に依て知られる。

三聖一致にして未だ敢て三教一法といはざるなり、然れども斯言をなすや、自ら其洛閩の罪人たるを知るなり。(橘窓茶話巻上)

蓋し彼れは三聖人皆宇宙の眞理を體得して後人に敎を垂るゝものなれば等しく人類の敎父として尊敬すべきである、たゞ其の敎の方法に於て三聖各々別途の道を以てしてゐる、故に人は各その好む所に從てその敎を奉ずるがよいといふのであらう、次の言葉は更に彼れの眞意を示してゐる。

形而上のもの之れを道といふ、釋老以て敎となす、所謂第一義佛法なり、形而下のもの之れを器といふ。吾儒以て敎となす、所謂第二義王法なり。(同上)

是を以て之を觀るに宗教若しくは哲學として佛老を第一とし、倫理道德に於ては儒敎を以て第一となすのであつて、三敎の歸一する所、畢竟人類の救濟に在る、何等矛盾する所なしと言ふのである。彼れは此くの如き意味に於て三敎

一致を說き儒者偏見の蒙を啓き、更に進んで我固有の神道に於ては特に之を尊重し、儒教の本源は神道に在り、決して我が國の精神を忘却してはならないことを高調してゐる。これ彼れの學風の異彩を放てる所以で、日本儒教の眞面目を發揮したものである、その神道を論ずる言に曰はく、

神道は三つ、一に曰く神璽は仁なり、二に曰く、寶劍は武なり、三に曰く、鏡は明なり、我東質を尙び未だ以て之れを文にするものあらず、然りと雖も深く信じ篤く行ふて而して得るあり、何ぞ必ずしも言語文章を之れせんや、或は已むことを得ずして其說を求めんと欲せば、之れを孔門六藝の學に求めて可なり。所謂三器は本と經なり、鄒魯の述ぶる所のもの我註脚なり、人或は雜ふるに釋老異端の說を以てするものあり、其神道を去ること遠し。（橘窓茶話卷中）

道德の本源は我れに在り、卽ち仁武明の三德これである。本朝の經典は三種

の神器にして儒書は卽ちその註解に過ぎないといふのである。中華主義の當時に於て我が神道の爲めに萬丈の氣焰を吐露する所誠に痛快の極みである。彼れが惺窩以來の神儒一致說より更に一步を進めて敬神卑儒の思想を鼓吹するところ正に熊澤蕃山の所論と一致してゐる。此くの如き日本主義を懷抱せる彼れは同門の士新井白石が朝鮮の使者に對して幕府を稱するに日本國王の號を以てしたるを傳聞し、憤然として一書を裁して白石を忠諫するに至つたのも、亦た固より怪しむに足らない。橘窓文集にその文を收めてゐるが、一讀彼れが勤王慷慨の士たることを想はしむるものがある。之を要するに彼れの學風は一切の敎義に對して極めて之を公平に批判し、之を貫くに日本主義を以て始終してゐるものと謂ふべきである。

二、學　說

芳洲の學風はすでに述べたる如く頗る寬大なる學風なるを以て一切の學に對

して之を排斥する意なくたゞ其可なる所は之を取て以て自家の修養に資せんとするのである、故に特に或る主義を以て天下に鼓吹するといふやうなことがなかつたので、こゝにその學説を述べんとするに當ても秩序的に之を説明することは困難である。今主として橋窓茶話によつてその意の在る所を窺ふことにする。彼れの博學にして佛老の學に通ずるに拘はらず、嘗て云はく、

洙泗之後、唯閩洛之學、可三以垂二於不朽一、本末巨細、靡レ不二悉備一、諸家紛紛之説、如二陸象山之頓悟、陳同甫之事功、王陽明之良知一、皆在二其範圍中一、彼其務爲二一偏之説一者、卒然見レ之、非レ不二竦動一、究竟去二聖人一也遠矣。（橋窓茶話巻上）

是を以て之を觀るときは、彼れは程朱の學を以て孔門の旨を得たるものとなし、他一切の敎義を排する意見なることが知られる、然しながら彼れの所謂朱子學は山崎一派の朱子學の如き偏狹なるものでなく、吾人が修養上に於ては程

朱を以て標的とすべきであるが、學問研究の上では博學通ぜざるなからんことを期すべきことを主張するのである、乃ち曰はく、

天下字何可ニ盡識一、惟十三經所レ有未ニ之識一者儒家之耻也。(同上)

と、卽ち朱子學を主張すと雖も、決して之れに偏するものでないことが知らるゝ、而已ならず彼れは儒佛の旨、その奥妙の理に至つては決して相背反するものにあらざることを深く信じたるが故に、儒教を說くに屢々佛教を以てし、暗に儒佛一致の說を示してゐる。例へば、

性一箇字、孔孟既沒。經レ漢歷レ唐、千五百年、未レ有ニ識レ之者一、至レ宋濂洛君子相繼輩出、然後披レ霧覩レ日可レ謂レ奇矣、在ニ佛經一則元自明、所謂本如來藏者命也、圓成自性者本然之性也、緣起自性者氣質之性也、妄想自性者人慾之私也以ニ其異レ名儒釋莫ニ之覺一。(同上)

と說けるが如きは宋儒の說卽ち佛教より出でたることを暗に指示せる言であ

る。又云はく、

聖賢千言萬語、無レ非下存二天理一而遏中人欲上。大藏經一部、止是修二菩提一而祛二煩惱一。其他擧皆封皮帶紐耳。(同上)

と、是れ儒釋の一致を唱道し、二教の神髓を摘出せる言にあらざるか、彼れは更に二教に對する斷案を下して曰はく、

天惟一道、理無二二致一、立教有レ異、自修不レ一。(同書中卷)

是れ彼れが得意に屢々發する所の言であつて、一生涯得る所のもの惟此十六字なりとは、彼れ自ら告白する所の言である。以て彼れが儒佛に對する信念を想見すべきである。彼れが佛教に趣味を有したることは左の言之を證して餘ある。

或曰、子喜言二佛說一所謂騃騃然入二于其中一者乎、笑曰非也。(同書下卷)

初學之士、毀レ佛心重、遂至レ慢レ神、可レ謂二懲レ羹吹レ虀者一矣。(同上)

その他彼れは老莊の學に對し、或は中江藤樹、山崎闇齋、伊藤仁齋、物徂徠等

の學者に對しても、亦た極めて公平なる批評を下してゐる、以てその精神の在る所を知るべきである。要は學問の道たゞ人格の完成に在ることを深く信じ、且つ之を實行せんとするのが彼れの主旨である、此の點に於て彼れは論語を以て修養第一の經典とし、之を以て人を敎へてゐる。乃ち云はく、

必欲㆔以成㆓眞人㆒耶、只看㆓論語㆒、便終㆑身有㆑餘、廣求㆓道德君子㆒、專㆑心致㆑志、何必剪剪惟古紙之是鑽乎。（同書上卷）

彼れが當時諸碩儒の間に立つて何人よりも畏敬せられた溫厚の長者であつたのも、亦た此の眞人たることを體得した結果でなくてはならぬ。尙ほ最後に彼れが如何に尊王愛國の士であつたかを一言して、其の學問の特色を明らかにして置かう、彼れが千言萬語も要するに我が國體の美を發揚し國民精神の振興に在つたことは、前節學風の如何を觀て自ら知らるゝ所であるが、

天下人心、唯我國爲㆓淳厚㆒、近古以㆓今日㆒視㆑之、唐之與㆑韓、有㆑所㆑不㆑如、

豈非ニ神聖之遺澤一哉。（同書下卷）

といつて、自己の感想を披瀝してゐる言に依て其の精神の在る所が、明らかに知らるゝ、此等の言は儒敎かぶれの當時に在つては、實に彼れが如き毅然たる愛國の士に非ずんば發し得る言ではない。更に橘窓文集を取つて之を繙くに、其第一卷に載する所の論武一篇は、實に我が日本儒敎の精神を遺憾なく發露してゐる。今その一篇の大意をいふと、一國文武兩道の廢すべからざることは、車の兩輪のごときもので、孔門の敎と雖も決して武を廢すべしと說かない、然るに後世の儒者その眞意を知らずして武を說くことを以て吾が儒の事に非ずと爲すは誤つてゐる、且つ和漢その建國の情を異にす、我國上古神聖既に三種の神器を以て敎を萬世に垂れ給ふ。武を以て國を治め仁明を以て民を愛撫されてゐる、武何ぞ廢すべけんやといふのである、而して最後の結論に至つて儒士の必ず武事を知らざる可らざることを述べて。

凡士之生二於斯世一有レ志二於國家一者、務當下以二忘レ戰則危之說一上獻二於其君一下諭二於此民一預修二措置之方一、誠適二制馭之宜一使丙之家各武二其武一而海內肅、人各親二其親一而天下順、斯文斯武並行而俱得、毫無乙偏廢之弊甲、則庶乎永世無レ愆太平可レ保矣、彼其剪二剪於詞章之末一以二繁縟一爲レ急、迂闊是習者果何益耶云々。

と言つて、我が國、儒士の武道を輕んずべきでないことを痛論してゐる、以て彼れが念頭常に國家の隆盛に注意し、日本儒士の眞面目を發揮せんことに努力せしかを想ふべきである。

【著　書】

橘窓文集二卷（寛政四年刊？）

橘窓茶話三卷（天明六年刊）

日本倫理彙編朱子學之部に此書の語學文學に關する部分を除きて收載す。

芳洲口授一卷（甘雨亭叢書第三集に之を收む）
たはれ草三卷（百家說林第十卷に之を收載す）
（其他之を省略す）

第三章　貝原益軒と中村惕齋

貝原益軒は德川時代の大儒として兒童走卒と雖も其名を知らざるものなく、最も有名の人であるが、其學問は果して何人に就て修めたのであらう。「松永由緒書」に松永尺五の門人の名を列記してゐる所に、貝原益軒の名が記されてゐる所から觀ると、尺五の門人と謂ふべきであらうが、益軒は師說の感化によつて其學を成したといふよりも、寧ろ彼れ自身獨自の感發によつて一家を成すに至つたのである。且つその主張する所も朱子學でないから、此篇に入るべきでないが、其學の淵源は朱子學に在り、朱子を尊崇した人であるから、暫く此篇

に於て章を別にして論ずることにする。中村惕齋は伊藤仁齋と並稱された當時の大儒であり、且つその學、別に師承する所なかつた、即ち獨立して起つた朱子派の學者であるから茲に益軒と併せて說くことにした。

第一節　貝原益軒の學說

寛永七年（一六三〇）――正德四年（一七一四）

一、概　說

益軒の學說は之を三時期に區別し得る。即ち朱陸合一の時代と朱子學主張の時代と、最後に朱子學を脫して別に一家の學を創唱した時代これである。先哲叢談の著者が云つてゐるやうに、初めは其學主とする所なく、陸象山、王陽明の說皆採つて、之を用ゐたが、中頃陳建の學蔀通辨を讀んで專ら朱子學を主張するに至つた、而して晩年に至つて大疑錄二卷を著はして遂に朱子の說を疑ふに至つたのであるが、朱子を尊崇することは終始一貫して渝ることがなかつた。

それで今便宜上之を朱子派の中に入れて論ずるのである、嚴密に言へば別に益軒貝原氏の學として論ずべきである。

益軒の學說を知らんとするには益軒その人の人格を離れて了解することは、出來ない、人格を離れて單に其學說を見るときは徹底せざる所あるを免れない。蓋し益軒は純知的の人にあらずして、宗教的情操に富める熱烈なる信仰家であつた。卽ち吾人の彼れに就て學ぶべきは、哲學的方面よりも、寧ろ彼れの信念より出でたる實踐的敎訓の方面にある。而かも其敎訓も亦た頗る常識的のものであるが、彼れが一生を通じて發揚せる偉大なる人格の力は大に之を崇高なるものとなし、其當時及び後世に非常なる感化を及ぼしたのである。益軒の如き人物に在つては其學說よりも、其人格、その敎訓に注意しなければならないが、今その哲學的立脚地及び人生觀に就ての意見を述べ、其修養の淵源する所を明らかにしよう。

二、哲學說（唯氣論）

益軒は朱子を尊崇し、その遺書を重んじたことは「吾輩不逮之質、雖レ不レ能レ窺ニ其藩籬一、然心竊鄕ニ往之一、故於ニ其遺書一也、尊レ之如ニ神明一信レ之如ニ著龜一云々」（自娯集卷三）の言に依て知らるゝ如く、或は「予自ニ幼年一誦ニ朱子之書一尊ニ其道一師ニ其法一服ニ其敎一」（大疑錄上）といへるに依てもその尊敬異常なるものであつたことが明らかである。然しながら其哲學的立脚地に於ては全く反對の位置に立つてゐる、乃ち朱子の理氣二元論を以て慊らずとなし、大疑錄を著はして自家の創見を發表するに至つた所以である。

今その大意を取つて之を言へば、理氣本と是れ一物にして、其運動變化作用ありて生々不息なる所より觀て之を氣といひ、其生長收藏條貫ありて紊亂せざる所より觀て之を理といふ。然るに理能く氣を生ずといふは不可なり、所謂理は氣の理なり、本末先後あるに非ずとして理氣合一の論をなし、更に進んで朱

子の太極卽理也といふ說を排斥して太極卽氣也の說を述べ、遂に氣一元論を主張するのである。卽ち宇宙は理氣の二元より成るものではない、唯氣の一元に依て生ずるのであるとして「夫天地之間、都是一氣、而以₂其動靜₁稱レ之爲₂陰陽₁」（大疑錄下）と論ずるのである。彼れの哲學的立脚地は此くの如く一元氣の活動に依て一切を解釋せんとするのであるから、宋儒の寂靜主義に對して活動主義を稱へ、厭世的悲觀的の人生觀に對して現實的樂天的の人生觀を主張し、著しく一般の朱子學者と異つた意見を述べてゐる。今先づその人生觀の概要を述べて見よう。

三、人生觀（樂天主義）

益軒一生の行實を觀來れば、その胸中常に和樂の氣に滿てるもの在ることを感ずる、然り實に彼れは人生の眞趣は快樂に在ることを深く信じたのである。此の樂天的人生觀は卽ち以て彼れの人格を陶冶せる所以のものたることを想へ

ば、學說中殊に注意すべき點である、今その要旨を說明しやう。

彼れは實に人生卽樂の敎義を信奉したのである。其言に云はく、

> 孔顏の樂は道を樂しむにあらず、又た天理を樂しむの謂にあらず、且つ別に一物ありて之を樂しむにあらず、若し道を以て樂と爲すと謂はゞ、卽ち道と樂とは二と做し了る、人心は本と天命の在る所なり、天機は常に生々として息まず、故に滿腔常に欣々たる和氣ありて、其生意息まず、處に隨ひて欣合和暢する、是れ之を樂と謂ふ、是れ人生心裏自然に有する所の天性なり、獨り孔顏のみ此の樂を有するにあらず、人皆之を有す、孔顏は能く喪ふなきのみ。（愼思錄卷一）

是れ人生を以て樂の一字に歸し、道卽樂也との意見である、卽ち「蓋し樂の存亡は道の得失に在るのみ」（自娯集卷二、樂是人心所固有說の條參照）といふ所以である。彼れが從來の儒者が勉强の倫理を說いて遊戲娯樂の倫理を述べざ

るは其一方に偏するものなりとして盛んに娯樂の必要を說き、又た儒者の說必ず心性の修養を說くも未だ長生の術を講ずるものなきは誤れるの甚しきものとなし、長生有術論（自娯集卷二）を高唱してゐるのも、亦た此くの如き哲學及び人生觀を有つてゐたからであらう、彼れ更に以上の樂天主義を廣く推論して左の如く論ずるのである。

樂は是れ人心の天機、常人と雖も亦皆之を有す、豈にたゞ人心此の樂あるのみならんや、草木の發生、禽獸の和鳴の如き亦是れ天機の發動以て其の樂を爲すべし、唯人氣稟の爲めに蔽錮し、物欲間隔して此の樂を失ふもの世を擧て皆然り、人情喜樂を欲せざるなし、然るに衆人は人心本と自ら此の樂あるを識ること能はず、惟中得る所なし、則ち外物に藉て以て樂を求めざる能はず、是を以て聲色臭味の欲至らざる所なし、然り道を以て欲を制すること能はず、則ち惑ふて樂まず、故に其初め耽樂すと雖も、然り其終り憂患なきこ

と能はず、衆人の惑ふて樂まざる所なり。（同上）

是れに依て之を觀ると、其の所謂快樂主義は、肉體的の快樂にあらずして、德を以て快樂とせるエピクロスの説と相類似してゐる、人生は實に快樂に滿ちてゐるが、常人は欲望の爲めに眞樂をすてゝ假樂に耽てゐる、實に惑へるの甚しきものである、是に於て彼れは君子の樂と小人の樂とを區別し、君子の樂は道德的永久的のものにして外物に籍らず、小人の樂は不道德的一時的のものにして外物を假りて爲すものであると論じ、樂は人心固有のもので、決して外界に存するにあらず、物質に賴るものでもない、一錢も費さずして樂み得る山水風月の樂を以て、古來君子の樂と爲すのはこの理由に依るのである、人生この淸福を享けて娛樂せざるは愚の至りであるといつて、盛んに吟花弄月優游の益を述べてゐる、愼思錄、自娛集、及び樂訓の三書、此等の意見を知るに十分である。

四、知　行　論

知行の論は古來學者の重んずる所であつて、或は知行合一といひ、或は先知後行といひ、以て吾人の實踐修養の上に大なる訓誡を垂れてゐる。然しながら知行合一說も先知後行說も吾人修養の實際に徵して餘りに迂遠なる說である。故に益軒は先儒の說を研究し、自ら修養體驗の結果こゝに知行並進說を唱道するのである。曰はく、

爲ㇾ學之工夫、古人以ㇾ知爲ㇾ先者、蓋知以開導、非㆓先知ㇾ之、則不ㇾ能㆓力行㆒、先ㇾ知者知㆓當ㇾ行之端緖㆒也……非㆓窮ㇾ知畢而後方行ㇾ之之謂㆒也、既知㆓其端緖㆒則行ㇾ之最爲ㇾ急矣、此乃知行並進之工夫、須ㇾ如ㇾ此。（愼思錄卷一）

蓋し知行の二は車の兩輪の如く、鳥の兩翼の如きもの、その一を闕くこと能はず、學如何に深きも力行之れに伴はずんばその學用ゆる所なし、之を行ふにあらずんば眞に之を知ること能はず、譬へば道路を行くが如し、其の道路の里程山川の形勢を如何に能く之を心に記するも躬親しく之を經過するに非ずんば

則ちその眞境を暗知する能はざるなり、故に行ふて而して後ちに知るものは眞知なりとは彼れの好んで例證する所である、その力行を重んずるの說は陽明のそれと同じである、然しながら彼れは陽明の說を信ずるものでない、乃ち其說を評して曰はく、

知ㇾ之精切、則行亦進、行ㇾ之的實、則知亦進、是知行相助之道也、王陽明說ニ知行合一ニ可ㇾ謂ニ亂雜ㇾ也。（同卷六）

彼れは此くの如く王子の說を以て亂雜と評し、その實際に適合せざるをいひ飽くまでも知行並進卽ち知行相助くべきを論ずるのであつて、其眞意は卽ち陽明よりも寧ろ朱子說を尊べること明らかである、たゞ朱子の說あまりに實際に迂遠なるを觀て先知後行をいはず、並進說を以て之を說明するに至つたのである。

益軒は他の俗儒と異なりて、常に我が國體の尊嚴なることを謳歌し、その美風を宣揚することに努力した、曾て水戸義公の未だ湊川に楠公の碑を建てざるの時、楠公戰死の遺跡を弔ひ、感慨措く能はず、自ら楠公墓記を作つて其忠誠を表章し、又自ら資を投じて碑を建てんことを思立つたが、讓謙なる彼れは、楠公の如き偉大なる人物の碑を建つるは自ら當らずと爲し、他日必ず適當なる人が其擧に出づることあるを思ひ、之を中止するに至つた。その時の文は載せて自娯集巻三に收められてゐる。楠公を推稱せる言に曰はく、

楠公者本朝之忠良而振古之豪傑也。吾邦歷代名士出二乎其右一者蓋罕レ見其比一、其忠義勇智、校二之異域之英俊一恐可レ無レ恥也、若二夫愛レ君憂レ世之心一足下以動二天地一感二鬼神一貫二人心一耀中古今上聞二公之風一者百世之下莫レ不二感激而仰慕一非二公之忠誠一豈能如レ此乎、可レ謂二眞大丈夫一也、彼兄弟子蹉跎戰死而美志不レ遂、良可二痛惜一、可レ謂有レ子有レ弟也、其履歷戰功載在二傳記一、今不レ暇二

枚擧一、惜乎擧レ世唯知三其爲二良將一而未レ知三其爲二賢哲一也。

楠公を稱するに賢哲を以てす、彼れの眞意の存する所、もつて推すべきである。彼れは又た本邦七美說を作つて我が日東帝國の爲めに萬丈の氣を吐き、當時支那崇拜熱にかぶれてゐた儒者の間に在て實に異彩を放つてゐる、所謂七美といふのは（一）時氣正（二）穀食美（三）器服備（四）民俗淳（五）法律嚴（六）無二外侮一（七）通二文字一であつて萬邦無比の君子國に住する吾等は此の七つの幸福を得てゐることを細論してゐる、然しながら彼れは徒らに我が國俗の美を稱讃して滿足するものでない、大にその缺點を論じて國民精神の振興を企圖せんとしたのである、乃ち國俗論一篇はこれを論じてゐるのである、而して同じ意見を假名書の五常訓の中にも論じてゐる、今その一節を引用して見よう。

わが日の本は、天地の内において、南北の中央にある事、中華と同じければ、日月のめぐれる道正しく、四時そなはり、寒暑陰陽の時にたがはざる事、四

夷の諸國にくらぶるに、すぐれたる善國なり、……………此故中土の書にも此國を名づけて、君子國と云ふ事、又むべなるかな、わが國の人は日の本の外國にまさりてよき事をしらず、うらむべし、わが國にたらざる所は只學問の一事のみ、中土に及ばず、今太平の化久しく萬民其德に浴せり、只つとめていにしへのひじりの道を學び、五常の德をおさめ、五倫の道を行ひて、國家の恩德をあふぎ、其化にしたがはざらめやは。（五常訓卷一）

學問の一事外國に劣れりと爲す所、現代人の正に尙ほ服膺せざるべからざる敎訓である、此くて彼れは大に外國の文物制度を輸入せざるべからざることを說くのであるが、我れには我れの歷史がある、この建國の歷史を無視して時勢境遇を異にせる外國の文物制度を以て妄りに我が邦を律すべからざることを痛論してゐる、是れ亦た現代人の當に反省せざるべからざる點であらう。

次に益軒の學說中注意すべきは經濟に關する論議である、彼れは所謂當時の

儒者と異なつて常に學問の活用といふことに注意し、日常生活の實際に適應して道を說くことを努めた、五常訓に於て、儒敎を解して、次の如く言つてゐる、我が儒の道は經濟の道とて世をおさめ人をすくふ大道なり、其學は有用の學とて先づわが身をおさめて人をおさめ、人倫の道を行ひ、天下國家のため天地萬物のため用をなす學問なり、無用の空言にあらず。(五常訓卷一)

これ彼れが當時の儒生が徒らに訓詁文字に通ずることを是れ努め、雕蟲の小技、雜文小說を以て能事終れりと爲すを慨し、孔子敎は濟世救民の術に外ならざることを說かんとするのである、嘗て自らその感慨を披瀝して云はく、

吾が曹書を讀むと雖も、然れども經濟の學に通ぜず、故に世の君相は儒生を以て無用の徒、事宜に通ぜずと爲す、且つ仁義を以て迂濶世用に適せずと爲す、豈啻に君相然るのみならんや、世の學を好まざるの者往々皆此の如し、是れ亦た吾が曹の學術明らかならず、且つ德ならざるに由るなり、然らば則

ち世人の學を好まざるは吾が曹も亦た其罪半すべきなり。（愼思錄卷四）

世人が儒學を以て迂濶世用に適せずと爲すは儒者經濟の學を講せざるに由るものなることを痛感せる彼れは、自ら進んで常に經濟の道を講じ、道德を說くに經濟を併せ說くことを忘れなかつた、而して道德と經濟との調和すべきものなることを論ずる所、近世倫理學者の經濟的倫理學を主張すると其旨趣同じきものがある、後世二宮尊德の如き人が大に經濟道德調和論を唱道せるが、益軒その先唱をなしてゐる、尊德翁の主張せる勤勞、分度、推讓の三大根本主義も亦た益軒の思想に於て見ることが出來る、卽ち分度論の如きはその著自娛集の第一卷目に出でゝゐる、この論は元來禮記の王制篇に因るものであるが、禮記の論ずる所は國家經濟の論である、益軒及び尊德は之を個人經濟の上に應用して論じてゐる、益軒の經濟論は諸種の著書中に散見してゐるが、最も通俗に述べたものは例の「家道訓」である、其他用財記の如きは彼れの經濟書とも謂ふべ

きものであるが、今その内容を略し、且つ倫理説に於ても、他に述ぶべき方面も尠なくないが、益軒のことは一先づこゝに擱筆して、中村惕齋の説に移ることにしよう。

【著　書】

慎思錄六卷

自娯集七卷

大疑錄二卷

益軒の思想を知るには以上の三書は是非とも之を讀まざる可らず、右の内愼思錄、大疑錄の二部は五常訓と共に日本倫理彙編に收載さる。尙ほ益軒の研究に就てはその著述の殆んど全部が明治四十三年より同四十四年に至るまで益軒全集（八冊）として刊行されたるものあれば頗る便なり、故に今其の他の著書を茲に列記することを略す。

第二節　中村惕齋

一、學風

寛永六年（一六二九）――元祿十五年（一七〇二）

伊藤仁齋が生れた寛永四年から二年目の六年に同じく京都の地に一大儒者が生れた、前者は材木屋の家に後者は呉服商の家に生れ、ともに一世の師儒として我が學界に功績著大なる人々で、當時仁齋惕齋の名は學者の欽仰する所であつた、然るに後世に及んで仁齋の名獨り盛んにして惕齋の名知るもの甚だ鮮なきは何故であらうか、想ふに仁齋は從來の朱子學を排し一家の學を唱へ、門生亦た四方より來遊し、且つ子孫能くその學を繼承したが、惕齋に至つては從來の朱子學を固守して新説を述べず、且つその性格も大に仁齋と異なつてゐた、嘗て自己の肖像に題して「利名雙字胡爲者、億萬民生倶策驅、者耋弃材懵二世計一、考二槃林曲一永言娛、」といつてゐるやうに名利に淡泊で、隱君子的の人であ

つたことが知られる、而して門人としても仁齋に於けるが如く、知名の士を出してゐなかつたから、後世その學を紹述するものがなかつた、然しながら人の價値は傳、不傳によつて左右せらるゝものでない、惕齋の遺德を顯彰するは今後の學者の責務に屬する。惕齋の當時學界に於ける勢望と後世の學者に與へたる影響とは、決して我が儒敎史上に於て看過することは出來ない。

當時我が國の思想界を顧るに、正に百花妍を競ふ狀にも比すべきか、諸種の學說互にその優劣を爭ひ、學者は努めて新奇の說を以て人の耳目を聳動せんことに腐心した、殊に仁齋の堀河學派は最も隆盛にして、惺窩以來の朱子學は甚だ不振に陷つてゐた、此の時に當つて獨り彼れは毅然として其操を持し、世擧て新學を競ふ間に立つて、彼れのみ人に敎ふるに小學、近思錄の類を以てし、純粹に朱子を提唱し、儒學の神髓を發揚せんことを志した、室鳩巣は彼れの學を論じて「惕齋一生崇二信程朱一、始終不レ變、可レ謂二近世之醇儒者一」と嘆稱し、

雨森芳洲亦た之を稱するに「篤行ノ鄕先生」となし、愓齋の孫弟子たる阿州の學者露木高篤は之を評して、

於二本邦一亦名師宿儒不レ爲レ不レ衆、然知二文公之學粹然不一レ雜、實得二其襟懷一者惕齋先生也。（講學筆記跋文）

と、何れも當時に於けたる純然たる朱子派の巨頭を以て之を目し、朱子學に於ける功績を讃美してゐる、彼れの學風が、此くの如く純粹に朱子學を鼓吹したるのみならず、尙ほ吾人の彼れに向つて感謝せざるべからざるは學問普及の爲めに假名書を以て多くの經書を解したることゝ、女子敎育の爲めに、女子修身の敎科書を編纂したことである、此の二點は貝原益軒と同樣の見識であり、又た同樣の功績である。

當時漢學者の弊として自家の研究調査の結果を、成るべく難解の漢文を以て艸し、俗人の容易に理解し難きを以て得意とした、斯る弊害は尙ほ明治維新前

後の學者間に在つたことは種々の逸話によつて知られる、是れ學者自身の快事ならんも、世を益し民を利する上に於て寸毫の得る所なく、儒學が閑人の業と輕視さるゝのも所以なしと爲さない、斯かる學者の間に立つて假名書の著を爲すことは餘程の大識見を持する人でなければ出來ない、益軒が他の俗儒と異なつて、後世に輝くのもこれに依るのであるが、此の點に於て愓齋の功亦た偉大なることを忘れてはならぬ、試みに早稻田大學出版部の漢籍國字解全書を取て、その著者の名を見よ、全書十二卷の中に於て愓齋の所謂示蒙句解の書が大學、中庸、論語、孟子、詩經、小學、近思錄等七部の書が收載されてゐる、以て彼れが如何に儒學の普及に、意を用ゐることの熱心であつたかが知られるであらう、儒者が男尊女卑の思想に捉はれて、女子の敎育を輕視してゐることは德川時代を通じて儒學の一大缺點である、然るに益軒といひ愓齋といひ、女子の敎育を決して輕視することを爲さず、自ら進んで女子の爲めに敎訓書を撰むに至

つてゐる、惕齋の著姫鏡三十一卷は我國女訓中の白眉として永く我が女子教育に裨益を與へてゐる、この書は朱子の小學に倣ふて、門を分ち、和漢古今の賢媛を纂錄したもので、女大學と相並んで、我が國近世に至るまで女子教育上に多大の感化を及ぼしたものである、尙は彼れの學風に於て深く禮節を重んじたことは愼終疏節、追遠疏節等禮に關する著書あるに依て知らるゝであらう。

二、學說

惕齋一生著はす所の書五十七部の多きに及んでゐる、而して何れも程張朱三子の說を根據として、人倫五常の道を明らかにし、本邦固有の道德を闡明せんとするものである、然しながら朱子學の大意を最も簡明に敍述せるものは入學紀綱一卷と講學筆記三卷とである、今講學筆記を主として仁愛說及び死生論の二に就てその大意を紹介することゝする。

彼れの學風に於て禮節を重ずることは既に述べたが、此の點に於て彼れは深

く張子の說に私淑してゐたものと想はれる、その仁愛の說を述ぶるに當つても劈頭張子の語を引て之を說かんとしてゐる、云はく

凡そ事に學に從つて道を求め、德を修めんと欲するものは須らく先づ張子の所謂天地の爲めに心を立つといふを以て、學ぶ所の頭腦本領となすべし、然らざれば則ち其心の注ぐ所皆吾が軀殼の上より發し來たり、私欲の由りて生ずる所も亦た其源を同うす、乃ち此心を以て之れに克たんと欲するは、猶ほ家人相爭ふて之れを管するものなきが如し、云々。（講學筆記第一册）

これ西鄕南洲の人を相手にせず天を相手にせよといふ敎訓と其旨趣を同じふするもの、道に志し、仁愛を行はんとするもの〻第一に志すべき點である、彼れ尙ほ進んで、その功果を說いて曰はく、

今廓然として其軀殼を私するの心を忘れて、一に天地の爲めに箇の心を立て、己れを以て天地間の一人となして、其是非利害に於ける、己れが自ら知るの

實なるを以て人を處し、人己れを視るの公なるを以て自ら處して愛惡僻む所なきときは、其心の發用、殆んど彼の造物者と上下流を同うす、凡そ事に應じ、物に接するの際、我が仁愛の被る所にあらずといふことなし、乃ち人情の欲すべき所のものと雖も、皆公共の心を以て之を視るときは、則ち眞情自ら發見して、之れに處して各その宜しき所を失はず、私情自ら縮退して之れに克つこと亦た其力を容れ易し。（同上）

人を相手にせず天を相手にし、天地の心を以て心とするときは、卽ち天地間の公人として萬事に臨み私情自ら消滅し、萬事に處して各その宜しき所を得て仁愛の德自ら實行せらるゝに至るべしとは彼れの力說する所である、是に於て彼れは更に程子の所謂「仁之道要レ之只消レ道二一公字一」との意を取てその意を敷演していふ、

蓋し人、天地生物の理を得て以て生ず、而して生理乃ち心に具はる、此れ便

ち是心の德所謂仁なり、故に人心物を愛するの情、便ち是れ仁の發用、人の生脈にして亦た其心を用ふること、由りて公なる所の主なり、若し此理を明かにせずして、徒に直を秉り、平を持して、以て物我を一にせば則ち公に似て公にあらず、只是れ絞直のみ、其弊或は父の罪を訐いて以て直とする者あり、竟に莽莽蕩蕩として、以て都て仁と交渉なきに至る、此れ惟私なきを以て公とすることを知りて、而して人心本然の生意を以て主とすることを知らざるが故なり。（同上）

是れ亦た仁を説くもの丶注意せざる可らざる點にして、徒らに天地萬物一體の仁を言ふときは、墨子の兼愛に陷らざるを得ず、故に彼れは公平無私の心を以て之を説くと雖も必ず人情を主とすべきこと卽ち天地の生意を主にして仁を説かんとするのである、之を要するに彼れは儒敎道德の根本義を以て仁愛の德となし、之を以て一切の道德を包括せんとするのである、而して之を説くに既に

述ぶる如く主として張程朱三子の言を以て其の根據としてゐる。

朱子學を信奉せる彼れは常に存養省察の工夫に意を用ゐ、苟も事を處する輕輕にすべからず、何事に向つても正心誠意を以て爲さゞるべからざることを敎へてゐる、講學筆記は實に彼れが修養論の全體を包括するものにして全篇の文字悉く取て以て吾人の箴言たらざるものはない、其小事輕んずべからざるの論の如き殊に味ふべき訓言であるが今凡て之を略し、死生論に對する一節を譯してこの節を終へることにする。

既に其當に死すべきを見て、自ら許すに死を以てし、再び深く之を察するときは又其未だ死すべからざるの義あると疑ふ、然れども苟難過高の人、是に於て未だ其是否を決せずして遽に死に就くときは、恐くは義未だ正しからずして反りて其勇を害するものあらん、若し理既に定まりて而して後死に就くときは死に果せるにあらずや、嗚呼死生は大事なり、遺體を奉行して之れを

敬せざるときは毀傷すら且つ不孝なり、況んや性を滅ずるをや、其死果して是なるときは、則ち義正しく勇全うして遺體を辱めず、勇未だ全からずして遺體を愼まず、乃ち不孝たり、二つのもの疑似の間にありて之を辨ずること審ならざれば相違ふこと霄壤たり、死して過ぎたるは復た改むべからず、事既に迫まりては決せずんばあるべからず、明哲の君子にあらざるよりは孰れか能く眩惑せざらん。……若し一時の見る所、是非相半ばするときは、則ち苟も生を貪らんよりは寧ろ安んじて死に就かん、是れ又理の疑はしきもの、厚きに從ふの義なり、然れども其志趣常に此にあるときは未だ時の宜しきに稱はずして死を輕んずるの失あり、故に事に臨んで義を擇ぶには心を虛うするを以て至要となす。

【著　書】

講學筆記三冊　（寛保三年刊）

（日本倫理彙編に之を收載す）

比賣鑑　三十一巻（寛文元年の自序あり、貞享四年刊？）

愼終疏節　二巻　寫本

追遠疏節　一巻　寫本

大學示蒙句解

中庸示蒙句解

論語示蒙句解

詩經示蒙句解

小學示蒙句解

近思錄示蒙句解

（右六部の書は早稻田大學出版部刊行の漢籍國字解全書中に收めらる）

筆記詩集傳　十四巻

筆記讀易要領　四卷
筆記禮記集説　十五卷
○其他尚ほ多數の遺者ありと謂ふも容易に見るを得ざるを以て之を略す。

第四章　崎門派の倫理學說

第一節　山崎闇齋

元和四年（一六一八）——天和二年（一六八三）

一、南學の系統

惺羅二先生より起れる京學の一派に就て略ぼ之を述べたが、此より更に轉じて京學に對する南學卽ち海南土佐に起れる朱子學の一派に就て語らなければならぬ、同じく朱子學といふも氣候風土の異なる土佐の地に於て發達せる朱子學は、自らその土地特色の異彩を放つに至つてゐる、海南學の祖たる南村梅軒は

薩州の地に朱子學を傳へたる桂菴禪師と同じく周防大内氏の臣下である、彼れは天文年間土佐に來つて吾川郡弘岡城主吉良宣經の客となり儒教を講說してゐるが、その所說の大要は存心、謹言、篤行の三事を以て修養の根本義とした、所謂南學派の道德主義はすでに梅軒の敎義中に形成せられてゐると謂つてよい、大高坂芝山が彼れを賛して「南村有レ梅、幽芳絕妍、孤ニ立萬花之上一、獨ニ步天下之春先一」と言つて其功を稱してゐる、梅園の敎育空しからず、遂に後世梅門の三叟を以て稱せらるゝ忍性、如淵、天室の三高弟その門下に輩出し、何れも朱子學を熱心に唱道し、その結果天室の門下より谷時中を出すに至つた、時中に至つて、始めて土佐人の氣質を代表せる一派の朱子學を稱ふるに至り、人呼んで之を海南學と稱した、故に嚴密なる意味に於ては南學の開祖は之を谷時中に歸しなければならぬ、時中の門下より有名なる野中兼山及び小倉三省の如き政治家を出し、此等の人々は何れも其地位と境遇とを利用して文運の振興を

圖り、朱子學ます〳〵隆盛にして其勢侮るべからざるものとなつた、而して同じく時中の門下に山崎闇齋が出で丶愈々南學の眞精神を鼓吹するに至つた、所謂南學と京學との相異なる點は、京學の官學なるに反し之は私學派として發展したることゝ、京學の敬幕思想に偏せるに反し、之れは尊王思想を標榜するのである、此の如き主義精神を、最も著しく發揚してゐるのは山崎闇齋の一派である、故に今闇齋の學說から述べることにする。

二、山崎闇齋の學風

その學風は師時中の嚴格なる敎育の影響と、彼れ自身の性格嚴肅を極めたるとに依て自ら嚴格主義の敎育となり、實踐躬行を以て根本主義となし、學理の攻究は寧ろ第二義であつた、唯々朱子の倫理思想を根據として道德の實踐を期せんとするのである、蓋し闇齋に在つては、眞理はすでに朱子の學說にあるを以て、吾人はたゞ朱說を尊信して之を實行すれば可なりと考へたのである、そ

の朱子に對する信仰の堅固なること實に一種の宗教とも謂ふべきものであつた、那波魯堂の學問源流を見ると、其學風を左の如く批評してゐるが、よくその眞相を描いた言であるから左に掲げて見よう。

萬治寛文の比に及び、山崎敬義嘉右衛門出で新説を立て、世間の朱子學といふは泛然雜駁にして歸一ならずとし、朱子撰述の書に就て取る所を抄拔し、是は定説なりと、專ら講究し、其餘は未定の説なりとして、不取用こと多く、凡そ讀む所の書數種に止まり、歴史子類の類は一切に讀に益なしとて禁レ之、玩レ物喪レ志の義なりとて、文章に力を用ゐず、已む事を得ざるに至りては平生所ニ讀習一の書中の字を集め、所謂布穀の文を作り、詩賦の類は、一向之を作る事を禁ず、唯四書朱註、近思錄の類を專らとし、譬へば論孟の中にても、一貫の章、克己復禮の章、志學の章、養浩の章、性善の章と云類を格別に力を用ゐて講究し、互に之を論じ、其少にても敬義の説に不レ合ものは邪説とし

て退レ之、又葬祭の事を論じ、文公家禮に就て其義を求め、三禮と雖も强て考案に及ばず、故に開元禮、政和禮、溫公書儀、齊家寶要の類、其外歷代の史中に散見する諸儒の論は考合する事なし、其師說に至りては、講義講錄とて、其辭を一々國字を以て記レ之、互に寫し取りて秘本の如く藏レ之、其說を不レ信者には猥に之を示さず、是故に他の學者は同じく程朱を學ぶと稱すれども、少しの異同なき能はず、其中詩文を好むあり、不レ好あり、博覽を示すあり、發明を專らとするあり、敬義の說に從ふ人は、十人は十人、百人は百人、幾誰に聞ても印し出せる書畫の如く一樣なり、平生學談を以つて他門の人と交はらず、唯其同朋と交はるのみなり、其徒淺見絅齋、三宅尙齋の輩有て是を敎とし導く、敬義の號を闇齋といふに因りて、是を闇齋派の學問と云、闇齋派の學問、朱子の書に於て取捨する所はあれど、朱子の說を非とする事なし。

魯堂の言は少しく誇張の嫌なきにあらざるも、能く闇齋派の學風を敍べ盡くしてゐる、右文中に朱子撰述の書に就て取る所を拔抄しとあるのは、朱子の白鹿洞掲示、及び敬齋箴の如き類をいふのである、之を要するにその學風如何にも偏狹に失し、嚴肅に過ぎて濶達の所なく、頗る窮屈なる道學者風のものであつた、然しながら當時京學は林家及び木門の徒に依て盛んに唱道せられ、又一方に於て中江藤樹、熊澤蕃山の如き陽明を提唱するものあり、其他山鹿、伊藤、貝原等の諸大家が前後して一方に崛起し、各その主義を鼓吹し、學界未曾有の混亂に際し、奮然として南學の眞面目を發揮し、併せて神道を說て、國家主義を唱道し、風敎の振起に努めたる彼れの功績は此等の諸家に劣るものでない、卽ちその學偏狹に失すと雖も、徒らに空疎なる學理の末に奔りて毫も實踐躬行に意を用ゐざる學界の通弊を矯正し、實着眞摯なる學風を提起して、眞に有爲の人材を養成するに力あつたことは其門下より幾多の俊傑を出し、其の學風の

影響は近く維新鴻業の際まで及んでゐる、國家的精神を以て學問の基調としてゐることは、此派の如き強盛のものはない、之を要するに闇齋の學風は極めて固陋なる朱子學を標榜するものであるが、而かも強烈なる國家的精神を以て一貫してゐることが其著しい特色であると謂つてよい。

三、闇齋の學說

彼れは前述の如く、朱子の信者にして、研究者にあらざるを以て其一生の編著もたゞ朱子の學を敍述するに止まつて別に大なる創見があるのでない、然しながら其主義特色を最もよく表示してゐるのは敬內義外の說と、所謂垂加神道とであるから、此の二點に就て述べることゝする。

（イ）敬內義外說

此の說は程子の「敬以直ㇾ內、義以方ㇾ外、合二內外一之道也」といへる語と「敬義夾持直上、達二天德一自ㇾ此」といふ語に本づいて立てた說である、彼れが敬義

の二字を如何に尊んだかは自ら敬義と稱するに因ても知らるゝが、朱書抄略の後ちに自ら其意を述べて、次の如く論じてゐる。

敬以直ㇾ内、義以方ㇾ外の八箇の字一生之れを用ひて窮まらず、朱子豈に我れを欺かんや、論語の君子己れを修むるに敬を以てすといふもの、敬以て內を直うするなり、己れを修めて人を安んじ、以て百姓を安んずるもの、義以て外を方にするなり、孟子の身を守るは守るの本といふもの敬以て內を直うするなり、君子の守る、其身を修めて、而して天下平なりといふもの、義以て外を方にするなり、大學の修身以上は內を直うするの節目、齊家以下は外を方にするの規模、明命赫然として內外あることとなし、故に明德を天下に明かにせんと欲するなり、中庸九經は身を修むるなり、賢を尊ぶなり、此れ內を直うするの事、其餘は外を方にするの事なり……夫れ己れを成すは內なり、物を成すは外なり、是故に程子の曰く、敬以て內を直うし、義以て外を

方にするは內外を合するの道なりと、又曰く敬義夾持して直に上り、天德に達すること此れよりすと、夫れ八字の用窮まらざること此の如し、朱子我れを欺かず。（垂加草第十一）

こゝに所謂內外の意味は右の文に依て明らかなる如く身を以て內となし、家國天下を以て外となすのである、敬義の二を以て道德の二大原理となし、一身を修むるに敬を以てし、家國天下を正すに義を以てするときは衆德備はらざるなしと言ふのである、此くの如く內外ともに敬義の道を以て之を方正にせんとするのであるから、其學風自ら嚴肅の一方に傾き、變通の道に缺くる所ある、かくて道義の崇高なる所を示し得るも、其弊頑僻固陋に陷らざるを得ない、人間を一定の模型に入れて之を陶鑄せんとする風が見える、斯る學風の下に於ては眞に人物の長所を發揮せしむることが出來ないのであるが、闇齋學派は當時諸學派の間に立て巍然たる一大學派を形成し、人物英材を多く輩出するに至つて

ゐるのは、一見不思議に思はるゝ位である、然しながらこれには大なる理由がある、勿論闇齋の偉大なる人格が與つて力あつたものであらうが、それよりも此の學說の根柢には至誠以て萬事に處すといふ朱子派の道德主義が含まれてゐることが最大の原因と思はれる、卽ち此學派に於て朱子學の短所が大に表示されてゐる代りに、一方に於て朱子學の長所たる至誠以て事に當るといふ信念が最も深く浸染してゐるからである、彼れは敬義の二原理を以て道を說くも、遂に之を約して敬の一字に歸してゐる所から觀て、其根本精神の在る所を推すことが出來る、乃ち曰はく

敬者、一心之主宰、而萬事之本根也……蓋此心既立、由ㇾ是格ㇾ物致ㇾ知、以盡二事物之理一、則所ㇾ謂尊二德性一而道二問學一、由ㇾ是誠ㇾ意正ㇾ心、以修二其身一、卽所謂先立二其大者一、則小者不ㇾ能ㇾ奪、由ㇾ是齊ㇾ家治ㇾ國、以及二乎天下一、則所謂修ㇾ己以安二百姓一、篤恭而天下平、是皆未三始一日而離二乎敬一也、然則敬

之一字、豈非₌聖學始終之要₋也哉。（闢異）

大學の所謂修身齊家の道より、治國平天下の事に至るまで敬の一字を以て說明せんとするのである、敬卽ち至誠以て事に當るの考はこの學派の生命とも謂ふべきもので、此の心を以て我が邦家を思ふ、彼れの敎說が國家的精神を以て充溢するに至つたのは實に當然の結論である、淺見絅齋の如き勤王家の率先者が其門下より出づるに至つたのも亦た怪しむに足らずと謂ふべしである、尙ほ彼れの學說に於て四書の中特に大學を以て根本とすべきを論じてゐるが、固より卓說にあらずと雖も、獨り時風に諂びざる耿々たる氣慨ある士たること以て推すべしである。

（ロ）神　道　論

彼れは會津侯保科正之に仕へた當時、出口延佳、吉川惟足の二人から神道の傳授を受け、忽ち神道の崇信者となり、その晚年は全く神道の鼓吹に努め、所

謂垂加神道の開祖となり、自ら垂加翁と號するに至つた、垂加とは神道五部書中の鎮座傳記、寶基本紀、倭姬世紀等に出でたる「神垂以二祈禱一爲レ先、冥加以二正直一爲レ本」の語から出でたもので、彼れは此語を非常に愛し、遂に之を以て自ら號となすに至つたのである、彼れの神道論は要するに其尊信せる宋學に依て神代の卷を說明したるに過ぎない、朱子に對する信仰は終始一貫してゐる、今その大意を取て言へば、彼れは宋學者の所謂太極といふものは國常立尊又は天御中主の神に相當するといふのである、卽ち古昔天地未だ剖判せず、陰陽未だ分れず、混沌鷄子の如き際に當りて已に本體の理あり、本體の神あり、天御中主神これである、その天御は敬語にして、中は宙に通じ、主は主宰の義である、天地萬有を化生する天地萬有の主宰といふ意味である、而して此の元神中に道德的本體の包含せらるゝことは、宋儒が太極中に理の存在を認めて之を以て道德的本體となすに同じである、且又た御中主とは中庸の義にして人道の至

極を示す名である、斯くして諾冊二神に至りては陰陽の理に順ひて彝倫の始を立て、之れに嗣いで天照大神三種の神器を以て海内を治めらるゝに至つたといふのであるから、宋儒の理氣二元を以て道德を說くに似てゐる、彼は此くの如く論じ來つて最後に「神聖の世に出づる東西處を異にすと雖も、其旨自ら妙契す」と結論してゐる、闇齋の神道論は風水草八卷及び門人玉木葦齋の撰に係る玉籤集八卷を見ればその詳細を知ることが出來る、土金の敎を述べる所など、如何にも荒唐不稽の說で、今日の吾々には首肯しがたいものであるから、今凡て之を省略する、闇齋の唱道せる神道論の內容は兎に角、惺窩以來本邦儒者立敎の精神たる神儒一致說は彼れに至りて愈々益々その色彩を濃厚にし、日本儒者の立脚地を明瞭に意識せしむるに至つた功績は、我が國儒學史上特筆すべき價値あるものである、彼れ嘗て門人遊佐好生に告げて曰はく、

世之儒者以二我國一爲二夷狄無レ道之邦一而卑二下之一、異邦爲二中國有レ道之國一而尊二崇之一、自爲二異人一謂レ變レ夷而快然者或有レ之、吁嗟寇二神國一者獨非下不レ學二神道一之儒者上而何耶。（遊佐好生著人倫箴下卷）

と、內外尊卑の分を紊りて崇外主義に陷れる當時の腐儒者を罵倒し、日本精神を高調せる所、誠に痛快である、儒敎の日本化は彼れの神道主義によつて一層の發展を觀るに至つたことを忘れてはならぬ、此點に於て崎門三傑の中で淺見絅齋が最もよく其精神を繼承してゐる、次に之を述べよう。

【著書】

垂加草全集三十卷

同附錄二卷

（闇齋の遺編を蒐輯せるものにして文會筆錄二十卷も此中に收められたれば全集として最も完備せるものなり、天明三年の刊行に係る。）

垂加文集七卷（正德四年刊）
（續々群書類從第十三冊詩文部に收載さる）
同　續　　五卷（正德五年刊）
同　拾遺　三卷（享保九年刊）
大家商量集二卷二冊（闇齋が朱子の言論を抄錄して學問の道を示したるものなり）
闢異一卷
經名考一卷
仁說問答一卷
　右三部の書は日本倫理彙編に收めらる。
風水草八卷　寫本
風水草管窺一卷　寫本
玉籤集八卷　寫本
（上記二部の書は門人玉木葦齋が師の說を敷衍せるものなり、玉籤集は國書刊行會神道叢說の中に收めらる。）

右三部の書は闇齋の神道を研究するに必讀の書なり。

櫻之辨一卷（甘雨亭叢書第六集に收載す）

本朝改元考一卷（百家叢說第一編にあり）

大和小學一卷（日本經濟叢書第一卷に收載さる）

盍徹問答（日本教育文庫第九編教科書篇にあり）

其他の著書一々列記せず。

第二節　淺見絅齋

承應元年（一六五二）――正德元年（一七一一）

一、學　風

絅齋、經書を講ずるに當ては、師闇齋と同じく朱子を尊崇し、徹頭徹尾朱晦菴の言を以て眞理の標的とした、「聖學圖講義」の開卷第一に云はく、

大凡聖賢相傳に學術の正脉、いづれも二色はない、大學は別して餘事をい

はず、其學術ばかりを首尾始終そなへたるものぞ、論孟も中庸もそれ、周子も程子もそれ、張子もそれ、朱子は其巨細本末全備明盡の至極ぞ、是固より平生朝夕衣服飲食の如く、毎々說くこと故、今更別に云ふことはなけれども云々。

と、以てその朱子中心主義なることが知らるゝであらう。然しながら、朱子を尊崇して經學の歸趣となし、學問の標的とすることは、闇齋派に於ける共通の特色であつて、獨り以て彼れの特色とすることは出來ない、然らば彼れの學風に於ける特色は何であるかといふに、その大義を論じ名分を明らかにすること、是れその唯一の特色であつて、彼れ自身も亦た深く之を以て任じてゐたのである。嘗て曰はく、

予於二此學一非レ有二菑畬耕穫之功一、只拾二得垂加遺穗一、凡百無レ足レ道、唯出處一事、生涯無二毫末愧一。（先達遺事）

と、以てその志の在る所を推すことが出來る、後世に非常なる感化を及ぼした名著「靖獻遺言」は、卽ちこの精神の表現である、節義節操を重んずること、是れ實に彼れの學問に於ける根本主義であつたのである。

今日此書を編みて義に志し、學を勉むるの士と共にせんと欲するものは道衰へ學廢れ、人倫の道明ならざればなり、是を以て俗日に濶く、所謂聖賢の敎なるものは固より嘗て不滅と雖も、能く之を究め知りて實を蹈む者鮮し、忠孝の大節に至りては、最も知りて信ずる者難し、親に事ふるものは猶は天性の恩愛を以て賊害の罪に至る者、或は少し、君に事ふるに至りては其上下相離れ、貴賤相待の禮、平生は不レ失者ありと雖も、亂離反覆の際、君を棄て敵に降り、恩を忘れ義に背きて拜跪奔趨して、但だ後にならむを恐るゝ者往往相踵ぎて、其間忠義を奮ひ、命を殞し節に趣く者ありと雖も、君臣の義に於きて鍊達講磨する所、或は精しからざれば、必私しなしと雖も、義に戻り

忠を失ふ者皆是也。

これ「靖獻遺言講義」の劈頭に於ける彼れ自らの述懷である、君臣の大義を講明することを以て目下の最大急務と信じたる彼れの眞意もつて察すべきである。是れ實に「靖獻遺言」の書は彼れが一代の心血を灑いで盡忠報恩の大義を述べ、是れに依て天下勤王の士を鼓舞せんとしたのである。篇中引用せる事蹟を殊に支那人に取つたのは其時勢境遇萬止むを得ざるに出でたので在つて、再三熟思の結果である。その跋文に「自ら靖んじ自ら先王に獻ずる者、萬古一心にして彼此間無きこと此の如し。然らば則ち後の遺言を讀む者、其心を驗する所以、亦た豈に遠く求めんや」といつてゐる。亦た以て彼れの深意察すべきである。當時學者すべて崇外敬慕の思想に捉はれ、進んで王室の尊嚴を論じ、勤王思想を鼓舞することを躊躇せる際、彼れ獨り敢然として君臣の大義を說く、眞に偉丈夫と謂ふべし、大義これに依て明かに、名分是れに依て正しく、遂に王政復古の

大業を實際に見るを得たのである。この大義名分論こそ彼れをして萬世の下に光輝を放たしめた、唯一の特色ある學風である、彼れは又た常に「立志は正大なるを要す、力行は確實なるを要す、書籍灰すべく記誦恃むに足らず、唯々眞に實踐の工夫を知るありて而して後ち初めて與に聖門の學を語るべきのみ」と言つて子弟を訓誡したといふ。是れ實に闇齋の實踐的學風を繼承したものである、而して闇齋派の國家主義も亦た彼れに依てます〳〵その光輝を發揚するに至つた。

二、學説

彼れが倫理學説の根柢は大義名分論に在ることは以上述ぶる通りである。所謂仁義禮智の道德論に至つては全く朱説を祖述するに過ぎないが、此の名分論の上に立てる點から觀れば、又た自ら別途の趣がある。蓋し彼れに在つては孔孟の倫理を唱ふる所以のものは、單に異邦の敎を說かんとするに非ずして、實

は我が惟神の道を說かんが爲めに、彼れの言辭を借れるに過ぎないのである。

その名分論に云はく、

何よりの思ひ入は大義の立つ不ㇾ立を以て、道統を立つこと、尤も疊山（宋末の忠臣謝枋得の事）大眼力大見識可ㇾ申樣もなき所也、易い事揚雄を見よ、あれ程の學問あれども王莽に仕へた故終に大義より見限られて役に不ㇾ立、惣じてすつかり大なる身の守りの大根が立ねば何を云ふても末の論ぞ……兎角大義が大事の物ぞ……大小遠近凡て天下の事、一人萬事に就き皆此大義の二字を見拔く樣にすること最も學者の大工夫といふべし。（靖獻遺言講義）

此くの如く大義を明かにすることを以つて、學者修養の根本義と爲す、靖獻遺言に一代の心血を濺いだのも是れが爲めである。此の大義の論よりする時は、彼の國に於て聖人と稱せらるゝ湯武も、彼れの眼底にはたゞ「主殺しの逆賊」と映じた。實に大義の前には聖人もなく、英雄もなく、學者も豪傑もないといふので

ある。是に於て彼れは儒者が中國夷狄の語に拘泥して、徒らに中國を崇拜して我れ自ら夷狄を以て甘んずるの愚を嘲笑し、大に內外尊卑の別を明らかにせんことを期し、屢々夷狄の辨をなして國民の反省を促してゐる。而して學者が我が國體を知らざる所からして、湯武放伐をも之を可とするのであるとして、朱子の學も畢竟君臣の大義を明らかにするのが、唯一の目的であると論じてゐる。

格物と云も窮理と云も只一の目的は君臣父子の大倫より外無之候、其君臣の吟味が右の通りにて候へば其余は云こともなく候、其余は云ふこともなく候云々。（雜話筆記）

これは同僚佐藤直方が湯武放伐を可とすることを聞いて、或人に自らの感想を述べた書簡の一節であるが、又以て彼れが朱子學に對する根本の精神を窺ふことが出來る、彼れは更に「稱呼辨」を著はし、學者が漢字を濫用して名分を誤り、大に名敎の害をなせることを痛論してゐる。彼れの儒學に於ける立脚地は

徹頭徹尾日本中心主義なること、以て察すべきである。

【著　書】

靖獻遺言八卷

靖獻遺言講義二卷（元祿二年の自跋あり）

聖學圖講義一卷（寶永六年門人の奥書あり）

六經編考一卷

右二卷は日本倫理彙編に收載さる。

雜話筆記幷續錄五册　寫本

門人山口安固の筆記する所に係る。

西銘參考一卷

忠士筆記一卷

右二卷の書は甘雨亭叢書に收載さる。

識箚錄（日本經濟叢書第三卷にあり）

忠孝類說一卷

此書の卷末に「稱呼辨」を附す。

辨大學非孔氏之遺書辨一卷（仁齋の說を駁する論なり）

父母存說考一卷

大學物說一卷

絅齋先生文集二冊　寫本

其他之を省略す。

第三節　佐藤直方

慶安三年（一六五〇）――享保四年（一七一九）

一、學風

直方も亦た闇齋の高弟にして崎門三傑の一人であるが、絅齋とはその學風に

於て大に異なるものがある、勿論朱子を尊崇し、之を以て學問の歸結となす點に於ては同一である。講學鞭策錄を著はして大に朱子の學問を鼓吹してゐる。而して其跋文に「爲レ學之方朱子明レ之至矣盡矣、今究ニ其要ニ而擧レ之不レ過ニ敬義兩言こ」といつてゐる所から觀ても、闇齋の如く敬義內外說を唱道したことが知れる、詞章の學に至つては極端に之を排斥するのである。嘗て云はく、

博覽强記、能文善書は宋の蘇東坡に若くはなし、然れども道を得たるものより之を視れば東坡は固より論ずるに足らざるなり、故に學者は、其識見東坡を以て俗儒となすにあらざるよりは、則ち聖賢の地に至る事を得ず、今多識及び詩賦文章皆之を善くせむと欲するものは、世を沒するまで眞儒たる事能はず。（學談雜錄）

彼れは此くの如く記誦の學を斥けて、たゞ〳〵經學を以て經國濟民の上に應用することを以て程朱の宗を得たる眞儒と爲すのである。然しながら其の程朱を

崇拜するの極、甚しき崇拜主義に陷つてゐる、闇齋が晩年に至りて神道を鼓吹するや、彼れは第一に反對の聲を放つてゐる、絅齋も闇齋の神道論には不同意であつたが、これは神道を尊崇する餘り、容易に師説に同じなかつたのであるが、直方のは何處までも崇外主義の立場から甚しく神道を輕蔑し、神道を唱ふるのは聖賢の道に反するもので、決して純儒の爲すべき所業でないとして反對したのである、卽ち聖賢の道は廣大にして神道の如きは自らその中に包含さるべきもので、特に之を唱道する必要がないと言ふのである。その他絅齋が國家的精神から湯武の革命を非とせるに反し、直方は之を正道として是認し、或は赤穗四十六士を評して「此賊耳」と排斥し去るが如き、絅齋の説とは氷炭相容れざるものが多い。彼れは又た佛敎に對し、陽明に對し、甚しき偏見を以て之を攻擊してゐる。之を要するに彼れの學風は闇齋の尊朱思想を極端に敷衍し、偏狹なる道德主義を唱ふるに在る。隨つて學説として別に之を紹介する程のものは

ないが、巧妙なる譬喩を以て儒教の敎旨を說いてゐるので、今日尙ほ吾々に取つて裨益する所尠くない、次にその二三の例を示さう。

二、學　說

彼れはその倫理說に於ては、闇齋と同じく敬義說を唱道したことは、前旣に述べた通りであるが、その解釋に於て師と意見を異にしてゐる。卽ち闇齋の說に於て敬以直ㇾ內、義以方ㇾ外といふ內外の意義を內といふのは一身を指し、外といふのは國家天下を意味すと爲すのであるが、直方は之れに反して心を內とし身を外とするのである。その著韞藏錄に之を辨じて左の如く言つてゐる。

夫經傳內外之二字有㆘以㆓己與ㇾ人言者㆖。有㆘以㆓本與ㇾ末言者㆖。有㆘以㆓志與ㇾ氣言者㆖。有㆘以㆓心與ㇾ身言者㆖。有㆘以㆓家與ㇾ國言者㆖。有㆘以㆔中國與㆓夷狄㆒言者㆖。其餘猶多不ㇾ遑㆓悉擧㆒焉。讀者就㆓其所ㇾ言而考ㇾ之則各有ㇾ當、而不ㇾ可ㇾ亂也、易文言、敬義內外、此乃以㆓心與ㇾ身言者、而程朱明說、不ㇾ可㆓移易㆒矣。・・・

…今讀二孔孟程朱之書一其文義曉者一觀レ之、則不レ待二辨詰一而可三以自識二其旨一何疑之有乎。

この文を一讀せば、何人も彼れの說を以て正當と認むるであらう、然しながら元來闇齋は國家至上主義であり、直方は非國家的の思想を有するのであるから闇齋の說も、亦た決して輕視することは出來ない、その他直方の經說に於て理氣の辨、致知格物の論等見るべきもの少くないが、今一々之を述ぶることを省き、其著書中より二三の敎訓を引用して、彼れの說話の巧妙なりしことを示さう。

示二學者一

紺屋白袴、箕賣笠䉐、髮結括髮、魚商食餧、陰陽忘レ身、僧徒不レ信、醫者不レ療、儒者不レ行。

右八者之業、所レ爲不レ同、而其歸皆知レ爲レ人、而不レ識二自爲一、爲二專務レ於レ身、

而忘ニ其身一者也、然紺屋、箕賣、髮結、魚商、陰陽五者、本以レ從レ於レ人、而爲ニ其務一則固莫ニ可レ咎者一、僧徒又不レ在ニ咎責之限一也、若レ醫者、雖レ不レ知レ養ニ其軀一而猶有ニ濟レ人之功一焉、至ニ儒者之不レ行則失レ己欺レ人侮ニ聖言一誤ニ後學一此其罪之大、全無レ所レ逃矣云々。（韞藏錄）

俗人は戰場で拾ひ首をした樣なるもの也、自分の手柄はなく幸ばかり也、富貴にして妻子病氣なし、仕官首尾がよい、火事に逢ぬ、終身氣の毒な事に逢ぬ、御目出度あやかりたい、子孫繁昌、子供衆皆有付かれた、逆な憂に逢れぬなどゝ云類、皆仕合幸也、自分に克己して人欲を去り道理を明にしたと云こそ、高名手柄とは云べし、凡人のは人欲のはじを爲るを結構な事にする淺間し、老子が功成名遂身退くと云は、人欲のはゞを云たものなり、學者も爰の窟を免れねば、孔孟程朱の徒ではなし。（學談雜錄）

言は卑近に似たりと雖も、その實踐躬行を敎示せる、彼れの誠意を諒とすべ

きである、尙ほ彼れの著書中「講學鞭策錄」の一書は朱子の著書より學術の綱要に關するものを拔錄し、立志のことより好學の論に至るまで、朱子學の神髓を發揮せるものであつて、最も廣く世に行はれ朱子學發展の歷史より觀て極めて重要なるものたることを忘れてはならぬ。

【著　書】

韞藏錄十卷　寫本

此書の一部分は甘雨亭叢書に收載され、又た第三卷學談雜錄は日本倫理彙編に收めらる。

講學鞭策錄一卷

排釋錄一卷

鬼神集說一卷

道學標的一卷

其他鶴の毛衣等の著書あれども之を略す。

第四節　三宅尚齋

寛文二年(一六六二)——元文六年(一七四一)

一、哲學說

尚齋は崎門三傑中最も年少者にして、且つ長生したるが故に、闇齋の經學を大成することを得た、而して三人中最も思想家としての資質を有し、主として理論的方面を研究した、板倉勝明嘗てその學を評して曰はく、

闇齋之學、實至二先生一而全備、故其著書皆爲二後學之模範一所謂三傑、先生雖二晩出一豈居二第二一哉。(尚齋三宅先生傳)

實に彼れは學問の點に於ては、三傑中第一位を占むる人である、然しながら彼れ亦た先輩佐藤直方と同じく闇齋の神道論に反對し、その國體論に至つては甚しく崇外思想を發揮し、尊儒卑神の說をなし、大に内外尊卑の名分を紊してゐ

る、土佐の谷秦山と神道に就ての問答をなし、大に秦山の怒を買つたことは有名な話である、この國體論に就ては後ちに述べることゝして、今先づ彼れの最も得意とせる哲學說に就て概觀して見よう。

彼れの哲學は要するに理一元論である、朱子の理氣二元論を推究して遂に之を理の一元に歸せんとするのである。乃ち曰はく、

天地之間雖二萬殊一、然要レ之不レ過二理氣之二一、人之有レ生、自二父子君臣之品一以至二手足百骸一雖レ不レ一、亦要レ之不レ外二理與レ氣之二一。性者生之謂、亦理氣之合者也耳、然程子以二理也一說レ性、何故遺レ氣而不レ言、蓋天地萬物雖レ不レ過二理氣之二一、然亦要レ之不レ過レ曰二理也一、氣本レ於レ理而生、亦理之形而已、理固善而氣亦善。（默識錄卷一）

これ程子の性善說に依て、理一元を主張するのであるが、更に理は氣の本なることを說いて曰はく、

氣則理之爲レ體、理則氣之骨子、故根レ於レ理而生、循レ於レ理聚者氣也、氣有ニ聚散ニ而理則無ニ消散一。（狼疐録巻一）

或はまたこれを例證して「色を見れば則ち之を好むの氣生じ、食を見れば則ち之を食するの心動く、氣の理に循つて生ずるは此くの如し」（同上）ともいつてゐる、之を要するに理には形體はない、氣を以て形體とする。氣には模範はない、理を以て模範とする、理は無體の氣、氣は有體の理とも謂ふべきもので、宇宙間の萬象は皆理氣二元の發現である、然しながら其本末を論ずるときは理は本體であつて氣はその用に過ぎない。故に畢竟するところ理の一元に歸せざるを得ないといふのである、更に進んで宇宙間森羅萬象の間には豫定されたる一定の秩序調和あることを論じ、之を本原一定の規矩と稱してゐる。ライブニッツ（Leibnitz）の豫定調和説と比較して甚だ興趣多き説である。曰はく、

天地如レ此大、而日月星辰、行度盈縮、亙ニ千萬世一、無ニ一毫之差繆一、非レ有ニ本原

一定之規矩者ニ何爲能如レ此。所謂誠、所謂太極、卽指下本原一定之規矩者上而言、其無ニ一毫之差繆一者、其誰尸レ之、亦造化之妙、知者能知レ之而已。（默識錄卷一）

所謂造化之妙卽ちライブニッツの所謂神を指すものとすれば、兩者の說全く旨趣相同じと謂ふべきであらう、そは兎に角彼れがこゝにいふ本原一定の規矩は卽ち宇宙を一貫せる秩序ともいふべきもので、これが天地の初めより豫定せられてゐると信ずるのである、而して此等の考より遂に天地間には一定不易の天命あることを信じ、これによつて自家の倫理說を立てんとするのである、次に之を述べよう。

二、倫理說

彼れの倫理說として第一に注意すべきは天命說である、こはその哲學的立脚地より自然に來るべき、當然の結論である。卽ち天地の間たゞ理と氣との二元

に過ぎざるも、更に之を約すれば、所謂氣なるもの畢竟理に循つて生ずるものである。而して其理なるもの亦た一定不易のものにして、以て宇宙を一貫せる秩序を爲す所以なりと論じ、深く天命の存在を信じたるを以て、人間はその境遇に安んじ、各その力を盡すを以て、その本務と考へねばならないと謂ふのである。然しながら彼れの眞意は所謂人事を盡して後ち天命を待つべしといふのであつて楊子の皆命論とは違ふのである。卽ち貴賤貧富は固定的のものでなく其德を成就し、その氣質の偏を移し去らば、貧賤も富貴となり禍夭も福壽となると論ずるので一面努力主義を唱ふるのである、この天命說に就ては狼疐錄卷三にその意見を詳述してゐる。

次に孝の德に就ても甚だ注意すべき說をなしてゐる、彼れは孝論に於ても其哲學的立脚地よりして父子一體の理を論じ、祖先に對する祭祀の忽にすべからざることを論じ、又たその祭祀の誠は必ず祖先の靈に通ずべきものなることを

論證してゐる。その父子の關係に就ては左の如く言つてゐる。

父子一體、子之身體、卽父之身體、子之精神、卽父之精神、便是理一也、父之身與二子身一分、父之心與二子之心一別、便是分殊也、祭祀時、我精神依二木主一、木主與レ我一、然我精神而依二木主一、所レ依之神與レ我對立、亦是理一分殊。（狼疐錄）

程子の所謂理一分殊說を持ち來つて、父子一體の理を述ぶる所實に彼れ得意の壇場である、斯くて彼れは天地、祖考、自家の精神も亦た畢竟唯一理の發現なることを說き、頗る神祕的幽遠の說を述べてゐる。その著狼疐錄第一卷の祭祀篇詳說最も參照すべきである。想ふに彼れは支那學者の中に於て深く邵康節に私淑してゐたやうである、殺生食肉說の如きは全く邵子の說を敷演したものである。尙ほ最後に、その國體論に關し如何に奇怪なる說をなしてゐるかを示さう。

彼れは中華の國を以て天下の中に位する最上の國であつて、日本の如きは偏國にして到底中華の大なるに及ばない、然るに神道家などが孔孟の敎を以て外國の敎であつて、我國に適應しないなどゝ言ふのは、自ら偏國に居て中和の道を知らないのであると言つて、甚しく崇外自卑の念に捉はれてゐる、乃ち曰はく、

道之在二天下一東西南北、無二適而不一レ有、但土地廣狹厚薄之不レ同、而其人之爲レ風亦不レ一、人々所レ見亦不レ覺レ陷二一偏一矣、伏羲以來、所レ開之邦、中レ於二天下一、而其廣濶厚潤、亦非二外國之比一也、而聖人尙恐三其失二中和之氣一也、於レ是樂以通二八風之氣一、而令三天下無二偏風一矣、近世談二神道一者不レ知二此義一、動必曰、是我邦之道、甚則曰、孔孟所レ言亦漢土之敎也耳。不レ合二我邦之風一、居レ偏而守レ偏、終不レ知レ求二中和之道一、嗚呼可レ歎哉。（默識錄卷一）

と、更に我が國體の美を評して云はく、

我邦君臣之義、其明過レ於二萬國一、蝦夷夫婦之別、其正亦非二他國所一レ及、此皆偏國之所レ致、狐能使二己神一、螢能自照、人反不レ可レ及、蓋失二中和一者反一路明、有二偏長者一。（同卷二）

是れ實に何たる奇癖の論であらう、吾々を以て之を觀れば、彼れ自身が旣に中華の偏に居て我が國體の正を知らざるもの、所謂書に淫するものであつて、誠に學者の通弊として慨嘆せざるを得ない、此の國體に關する偏見は實に彼れの學風上一大缺點となつて、凡ての論議に見はれてゐる。日本儒敎として取るに足らざるものなることは言ふまでもない。然しながら彼れの門下に加々美櫻塢の如き國體尊嚴論者のあるを以て之を觀れば、流石に此點は門人と雖も心服するものはなかつたのである。崎門派の巨擘にして此の人あるは吾人をして眞に奇異の感に堪へざらしむ。古來稱する三傑とか四天王とか或は十哲などの名目は、今日の吾々に取つては餘り信用することは出來ないと思ふ。

【著書】

狼疐錄三卷（甘雨亭叢書第三集にあり）

默識錄四卷（日本倫理彙編にあり）

白雀錄一卷

小學筆記二卷　寫本

祭祀來格說一卷

太極圖說解筆記一卷

其他之を略す

第五章　懷德堂の學風

第一節　概說

惺羅二先生以後の朱子學は江戸及び京都に於て、如上の發達を爲すに至つた、

殊に林家及び木門の學は江戸を中心として發展をしてゐるので、之を江戸思想と稱しても宜い、然るに土佐の一隅に起れる朱子學、卽ち南學は山崎闇齋に至りて所謂崎門の一派をなし、京都を中心として强大なる力を成すに至つた、之を前者に對して暫く京都思想と稱して置かう。今この江戸思想と京都思想とを比較すると前者は敬幕思想が甚だ强く、隨て大義名分の論に暗い學者を生じてゐる、然るに後者卽ち崎門の一派は尊王思想强く、その結果過激なる討幕論を鼓吹するものあるに至つた、獨り此間に立ちて敬幕と尊王との兩思想を巧に調和せんとするもの、是れ卽ち大阪に起れる朱子學である、今懷德堂を中心にして此等の學者の思想を槪觀して見よう。

大阪朱子學の祖とも稱すべき人は五井持軒である、持軒の學は純然たる朱子學であつて、浪華の地に於て倫理道德を講ぜらるゝに至つたのは、全く此人の感化與つて大なるものがある、文敎かくの如く勃興の結果は遂に江戸の昌平黌

に對立する大阪學問所と稱せられたる、懷德堂の設立を見るに至つたのである。懷德堂書院は享保年間中井甃菴の盡力に依て幕府の免許を得て建立せられたので、謂はば半官半私の學校である、その創立の際同志の間に約定せられた箇條は、懷德堂定約幷にその附記に依て知られる。卽ちこの書院には學主（校長）なるものがあつて、敎務を司り、預人といふのがあつて校務を掌るのである、而して最初の學主に推戴されたのが例の三宅石菴である、この石菴といふ人は弟の觀瀾のやうに純然たる朱子學者ではなく其晩年には陽明學を唱道してゐる。畢竟陽朱陰王の人であつた。隨つて懷德堂の學風はこの石菴の影響によつて陽朱陰王の傾向が著しい、第二代の學主中井甃菴を初め、それに次で學主となつた三宅春樓及び中井竹山、履軒の兄弟或は五井蘭洲の如き、何れも石菴の遺風を傳へてゐる、之を要するに懷德堂に於ては朱子學を中心とするけれども、廣く他の學派の說をも硏究することを怠らない。餘程自由硏究の精神が强かつ

た。三輪執齋の如き陽明學者を招聘し、或は伊藤東涯の如き古學派の人を招いて、其講義を聽き、熊澤蕃山の著書集義和書をも攻究したのである。此の自由研究の精神が著しい所は、先づ第一に注意すべき大阪朱子學の特色である。次に大阪の地は京都に近い所から自然、尊王の思想が强く、崎門派と此點に於て相似てゐるが、崎門の如く過激なる主義でなく、頗る穩健なる尊王論を主張するのである。幕末尊王論の盛にして終に之れが實現を見るに至つたのも、此くの如き穩健なる大阪朱子學者の勤王論が亦た與つて力あつたことを忘れてはならない、更に其特色として考ふべきは實業敎育の奬勵に力を致したことである、元來大阪は商業地であるから、其土地に適應せんが爲めに自然商工の敎育を主とするに至つたのであらう。懷德堂の壁書に「學問は忠孝を盡し、職業を勵む等の上に有之事にて候、講釋も唯右の趣を說すゝむる義に候へば、書物不ㇾ持人も聽聞くるしかるまじく候事」とあるのが、能くその主旨を表はしてゐる。此く

の如き特色を有する懷德堂一派の學說を敍べんとするのが本章の目的である、而して吾々は今その敍述を簡明にする爲め、他の學者は暫く之を措き、代表的學者中井竹山及び履軒の學說に就てのみ簡單に說明しやう、蓋し懷德堂の學卽ち中井家の學といつても宜いからである。

第二節　中井竹山

享保十七年（一七三〇）——文化元年（一八〇四）

一、學　風

竹山の學風に就ては、彼自らこれを說明した言がある、卽ち肥後の敎官辛島鹽井が曾て竹山に向つて、その學の淵源を問ふたことがある、その時彼れ對へて「吾が學は林に非ず、山崎に非ず、一家の宋學なり」と答へてゐる、蓋し當時世間の宋學を爲すもの林家の門人に非れば則ち闇齋の餘流を汲むものが多かつたからである。竹山が程朱の學を宗として白鹿洞學規を講堂に揭げたので、其

標榜する所は朱子學であつたのは勿論である。然しながら決して偏狹固陋なる崎門のそれとは大に異なつてゐる、「經術心之準繩、文章道之羽翼」とは講堂に揭げた聯であつて能くその主義を表はしてゐる、卽ち彼れは博く群言を折衷して其理のある所に從ひ。苟も理に於て合せざる所あれば、先輩の言と雖も敢て假借することなく、之を論難せんとするのである。之を要するに頗る寬大なる朱子學であつて、彼の崎門の徒が道義の一方に偏して文學を輕んじ、或は徂徠の徒が文學に偏して道德を顧みざるが如きは、共に彼れの排斥する所である。尙ほこの點に就ては其著「建學私議」の中に詳かに述べてゐる。今これに就て少しく述べて見よう。

高辻黃門（胤長卿）が　光格天皇の叡旨を奉じ、京師の大學廢滅してより、江戶及び諸國には學校の設けあるも、畏くも輦轂の下たる京都の地に於て絃誦の聲を絕ち、皇威隨つて地に墜ちたるを慨き、古代の規を摹して菅家の學を興

さうといふ考から、學校の規模設計を竹山に命せられたことがある。其時それに對して自家の意見を述べて上つたのが、卽ち建學私議の一書である。その書に於て學派を論じてゐる所が、依て以て彼れの學風を知るに足るものがあるから之を示さう。

學術は中上候迄もなく、朱學の外はこれなきことにて候、陸王を始め後世さまざま一見所を立たる儒家も候へども往々禪學に落、或は管商刑名に流れて大に聖學の本意を失ひ候やうに相なり候、但し宋季元明より、吾邦先輩に至り、經說文集などに於て、各見所ありて舊說を守らざるも多く、互に得失長短もあり、實に前賢未發の旨をうるもあるべければ參考に備へ、疑ふべきを闕て、その從ふべきに從つて可なり、あながちいづくまでも舊說を回護執拗するには及ぶまじ、これはみな同中の異にて。この從違を以にわかに朱門に畔くとはすべからず、全體の所、程朱をはなれたるは、みな邪逕曲蹊と思し

召さるべく候。

是れに由て之を觀れば、彼れは必ずしも、朱子の説を固守せんとするのではないが、其根本の旨に於ては朱子に歸せんとする態度を取つたことが知られる。

次に日本に於ける諸學を評して左の如く言つてゐる。

我邦近世に至り程朱を罵り、思孟を訕り、別に新奇の説を立て實行を廢し、虛文には大に人心を壞り、士風を害するやうになり來りたるは荻生太宰を魁とす、これらの學は一日も敎導の任には決してさしをくべからず候、……尤忌避玉ふべき學術は山崎の一派にござ候、山崎氏は篤く程朱を信じ、浮文を削り、實學實行を主とするゆへ、大に朱子の功ありとも申すべければ、このたびの敎導には宜しかるべきことに候へども、苦々しきことは、一種の僻見これあり、敬義、直方の訓をあながちに拘泥して、本旨をとり失ひ諸事いかめしくのみなりゆき、風なきに波を起すことになり、念戾の矜に陷り候、

往歳竹内何某關東の御咎を受たるも、その人さして不正の人物ともきこへ中さず候へども、かの學術の流弊に靖獻遺言を主張し、臂を攘げて横議するやうになりゆき、目前の大害を引害し候云々。

彼れが蘐園派の學術を惡むこと此くの如く甚しいのは、固より其學說に於て相容れざる所あるからである、山崎の學問は同じく朱子學であるが、その過激なる尊王思想が却て風なきに波を起すことになつて、結局、皇室に累を及ぼすものたることを深く信じたのである、そこで彼れは最後に斷案を下して、

總じて學者分上の大害になり候は荻生にしくはなく候へども、搢紳尊貴の御身に限りては山崎の害はるかに甚しく候。

と言つて、公卿の學校であるから、山崎の學を避けねばならぬと論ずるのである。決して敬幕思想の上から云ふのではなく、却て、皇室を尊崇する彼れが細心の注意を拂つた結果である。更に陽明學及び仁齋の古學に對する意見はどう

であるかといふに、之れに就ては左の如く述べてゐる。

中江熊澤の一派に於てはちと議論長く候へども、只今王學の徒すきと承はり申さず候へば、姑らくこれを置候伊藤氏の學は程朱を排すること甚しく、拘滯執拗のこと多く、覇術功利に歸し候病ござ候へども、一體に平實なる風ありて陳熟緩漫に落るも、山荻二家の如き大害はなく候へば、人品才學さへ揃ひ候はゞ、時により乏きを受候ほどのことは苦しかるまじく候。

彼れは此くの如く、仁齋の學に就ては山荻二氏の如き害はなきも、尚ほ之を喜ばざるの風を示してゐるが、中江能澤の學即ち陽明學に就ては之を評價することを巧に避けてゐる。卽ち石菴以來の遺風たる陽朱陰王主義であつて深く心に信ずる所あつたことは疑ふべからざる事實である、以上の言論中特に山崎氏を排すること甚しきは最も注意すべき點である。蓋し竹山に在りては經學と文章とは相並びて吾人學徒の目標とすべきであり、而かも經學に於ては博く衆説を

參考せんとするものであるが、山崎氏の學に於ては文章を排斥し、經學に於ても偏狹に失してゐるので、全くその根本主義に於て兩者相容れざる所があるのと、今一はその尊王論に於ても二者の見解が大に違つてゐたからである。卽ち山崎派の尊王論は過激に失して時宜を得ないといふのが彼れの意見である、然らば竹山の尊王論は如何、次に之れに就て少しく述べて見よう。

二、尊王論

竹山の著書は懷德堂遺編目錄に依れば四十七種の多きに上れるも、最も得意の著は非徵八卷にして徂徠の學說を攻擊せるものである。その他に於て注意すべきは逸史十三卷にして彼れの著述中これほど精力を注いだ著書はない、その自序には「天明年間書成りて巾笥に秘す」といひ、幕府に獻上した進牋には「細繹旣に三紀を逾ゆ」とあり、並河寒泉の語る所に據ればその着手は十八歲の時であるといふ。年十八歲は延享四年であるから細繹三紀を逾ゆるものとすれば

其間三十餘年間を經たる、五十五六の天明四年比に脱稿したものである、而かも其間「作輟年を積み凡そ五たび稿を易ふ」といふのであるから、其用意周到を極めたものである。此の逸史は徳川家康一代の偉績を述べたもので、其述作の動機は大阪人が豐臣贔屓で徳川を惡口することに發憤し、今日の天下泰平は徳川氏の恩澤であることを思はないのは甚だ憎むべきであるとて、此の編著を思ひ立つたといふのである。彼れは徳川將軍保護の下に立てる懷德堂に生れたのであるから、徳川氏の爲めに辨ずることは自己の本務と考へたのである、而して此書は寛政十年十一月幕府から獻上を命ぜられ、翌十一年七月首尾よく獻上を終へて葵紋の時服二領を賜はり、諸儒皆以て儒林の榮となして之を賀してゐる。然るに一方に於て竹山の誹言を誹るものがあつた。甚しいのは上州安中の儒者山田三川である、「中井善太逸史を作りしに弟德二その誹說を見て、仕官の種と爲すと見えたりとて義絶せり」など無實の事をいつて之を非難してゐる。是れ

未だ竹山の眞意を知らざるに因るのである。今竹山の尊王論者たりし事を證する爲めに其著草茅危言に據つて之を述べよう。この草茅危言は普通の著述と違つて、當時の執政白河樂翁の諮詢に答へた意見書である、卽ち政治上の建白書である。幕府執政の力を借りて實地に施行せんとしたものであるから、若し竹山にしてたゞ〳〵幕府に諛ふ心あらしめば、此書に於て先づ幕府の權力を擴張すべきことを說く筈である。然るに開卷第一に王室の事を論じてゐる。乃ち竹山の大義名分の論に明らかであつたことが知られる。先づ王室の式微を嘆きて幕府に勸むるに卽位大典の修擧を以てし、天子の大内にのみ閉ぢ籠らせ給ふを悲しみて、玉體の御保養の爲めに春秋の行幸あらせらるべきを說きたるなど、其皇室を欽仰せる尋常一樣でないことが察せられる。其他皇子皇女の爲めに繼統の御備を以て天下第一の急務なることを論じ、その主旨殆んど今日の皇室典範と同意である。彼れが忠誠の志以て察すべしである。且つ又た公卿百官の貧

苦を知り、功田の制を復興し、其才學詞藝行誼を風動奬勵すべしと說いて京都の大權を重からしめんと苦心してゐる。將軍に勸むるに朝覲の禮を以てし、德川氏をして王室を尊敬せしめ、因て以て海內士庶をして王室を尊崇せしめんとする所、後世志士の尊王論と其意相同じきものであるが、幕府猶ほ熾んなりし寬政の比に於て此の如き論を發することは到底嘉永安政以降の尊王論と同一の論でない。竹山の先見卓識深く　皇室の復興に志あつたことは此書中到る處にその意を漏らせることに依て知られる。決して幕府に阿諛するのみが彼れの本意でないことが明らかである。

竹山が前述の如く京都に學校建設の議を奏せることは建學私議に明らかである。今その主旨を見るに、文武の二は陰陽水火の互に相資けて、相無るべからざるが如きもので、關東に於て武の道を講じ、京都にては專ら文業を起して太平の花を咲かすべきであるといふのである。蓋し竹山の眞意は文學は古より公

卿朝士の專業に屬し、朝庭に文事を振興すべしと論ずるも、何等關東の嫌疑を招くべき理由がないから、文學の興隆を圖りて關東に對抗し、以て王室の衰微を回復せんとするのであらう。前には竹内式部の失敗があり、朝庭興學の事と雖も容易に論議さるべき時節でなかつたが、東照公京師學校の建立、或は享保年間江戸の會輔堂（菅野兼山）大阪の懷德堂など創立せられた先代の盛事を引用して、京師の地に學校のない事は邦家の一大缺陷であると極めて婉曲に之を論じてゐる。而して學校の名は觀光院と名づけ、御築地内に然るべき地面をトし聖堂を建立すべきを說いてゐる。玆に注意すべきは彼れの聖堂に對する意見である。卽ち從來の如く孔子の聖像に配する十哲などいふ俗習を廢して吾が日本にての配享の法を定むべしと論じてゐることである。竹山はその人名を言つてないが日本ならば菅公とか或は惺窩先生とかいふ本邦の先哲を祭るべしといふのであつて、如何に彼れが日本意識に目覺めて居たかといふことが分るであ

らう、竹山の此の意見が着々行はれんとしてゐたが、天明八年の京都大火によつて遂にその計畫も灰燼に歸した。そこで草茅危言に於て再び之を建議してゐる。それは前の建學私議の意見と大同小異であるから再び之を茲に繰返すことを避ける、畢竟竹山の理想は終に實現することが出來なかつたのであるが、維新後學習院の設立は實に竹山のこの建白書に淵源してゐるといふことである。
竹山は常に京都に往來して好學の朝士と交はり、眼前王室の衰微を目撃したのであるから、其議論のすべてが忠愛の誠に發してゐること勿論である。但だ彼れは世務に明らかに人情に通じたるが故に敢て詭激の論をなさず、何事に於ても努めて婉曲の言を以てするといふ人であつたから偶々逸史などの著述によつて其眞意を疑はるゝに至つたのであるが、一たび草茅危言を見ればその尊王の至誠人に勝れたるものあることが知られるであらう。尤も此の書物に就ては備前岡山の神惟孝といふ人が「草茅危言摘議」を著はして竹山が妄りに皇室の事

を論議してゐるのを非難してゐるが、それは其立脚地を異にするからで、今日から觀れば兩者とも忠誠の士たることは言ふまでもない、草茅危言の一書は制度政令より上下風俗、諸侯民間の經濟に至るまで極めて時務に切なる議論があるけれども、今はたゞその尊王に關する彼れの意見を示したのである。

竹山は此くの如き尊王主義より名分論に於ても、當時の儒者が支那を崇拜すること甚しきより、遂に我が國體の尊嚴を忘るゝものあることを痛嘆してゐる、藤江貞藏に與へたる書中に於て天に兩日なし、將軍と雖も又人臣なり、君臣通用の文字は絕對に稱すべからざることを論じてゐる。例へば大君とは天子のことで決して之を將軍の場合に用ゆべきでない、將軍家のことは世間一般に云ふ如く將軍樣、若くは公方樣で澤山である。然るに學者は臺宗とか嚴宗とかいふ風に宗を以て呼ぶのは大に名分を紊るものであるといふのである。竹山の意見では此點に於ては却て世間の文字なき普通一般の人が正しい。卽ち世俗の人は

文字を知らないから、從來の通り固有の名稱を使用してゐるが、學者は文字あることが却て災をなし、一知半解の文字を弄し、遂に名分を亂るに至るものが多い、抑ゝ學者は世俗を導き世俗の誤謬を正して行くのが當然であるのに、今日はそれが反對となりて學者の方が謬見に陷つてゐると言つて笑つてゐる。而して將軍家に對する尊稱の濫用を一々指摘して之を辨駁してゐる。これは主として徂徠派の弊害を攻擊するのであるが、吾々から觀ると竹山自身も亦た大に支那かぶれの所がある。江戸を燕都と稱し、支那を華夏と呼び、應神天皇を應廟といふが如き、彼れの論を以てすれば正しからざる稱呼である。竹山の如き卓識にして尙ほこの誤を免れなかつたのを以て觀ても、當時一般儒者の崇尙する所、以て察すべしである。而して竹山が一部の人から誤解されたのも亦たこの稱呼の正しからざることが一因となつたのであらう。然しながら彼れの眞意はすでに說明するが如く、決して敬幕の一方に傾きて尊王の心なかつた人では

ないのである。

三、非徂徠說

竹山の經學に於て徂徠學を斥くることは前既に述べたが、これは其師五井蘭洲（非物篇の著者）の遺風を繼承したものである。竹山の筆端に觸れては徂徠もたゞ一個の野心家となり一文の價値なきものとなつてゐる。然しながら餘りに感情に走つた論で固より一々肯綮に當るものでない。今參考の爲めに「非徵」の一節を譯して示さう。

吁嗟徂徠氏の學術の病その症自ら大に名を好むに在り。その因仁齋伊藤氏を壓倒せんと欲するに在り。而して其禍程朱諸公往聖を繼ぎ來學を開くの功を廢絕し、政事を害し、風俗を敗り、天下青衿の士に深く妖妄邪誕の痼を結ばしむるに至りて後已む、哀むべき哉。蓋し偃武已降諸儒輩出し矻々として經業を治め、向背淺深或は同じからずと雖も、而も其人と爲りや懿にして實、

その風たるや渾乎として以て厚し、但文章の道榛塞未だ闢けず、故に立言滅裂観るに至る者なし、仁齋京師に起るに及び、首て異説を倡へ、門戸を創立し、稱して復古の學と爲す、又始て文章を知り、頗る侏離を夏音に化す、廼ち童子問語孟字義語孟古義、大學定本、中庸發揮等の書を撰し、鷙論勁說、以て一世を恐喝す、夫れ故を厭ひ、新を喜ぶは人の通情なり、是を以て古學の名竟に海內を動す、而して徂徠興る。（非徴卷一）

徂徠は仁齋の說に刺戟せられて、起りたりと云ふは何人も異論なかるべし、然れども彼れ尙ほ次で徂徠の學問に就てその徑路を敍べて曰はく、

その幼なるや父に謫居に從ひ書を總海に讀むこと十有餘年、赦に遇ひ江都に還り、壯歲武學を以て權要川越侯を干し收錄せらるゝを得、尋で職を博士に改む、學則ち洛閩を崇奉し、以て半白に至る。然るに頗る翰墨に長じ、既に明儒王李の毒に醉ひ、鷙然夸張し、世儒を睥睨し、與に言ふに足らずと爲す

獨心を仁齋の業に折し、韻艶の深き、書を千里に馳せ、其許可を得て、已れが名を成んと欲す。但その自ら大にするの衷、遮掩し盡さず、書辭恭遜を失ふ、仁齋先づ已に鞭を着け齒も亦尤も高ければ、則ち其倨傲を惡み答へずして歿す、徂徠忿懥に勝へず、蓋し自ら謂ふ、我れの名を成す、何ぞ彼れの容接を假らんと、乃ち數年の功を積み、蘐園隨筆一書を著はし、宋儒を護り、以て古學を攻む。附するに文戒を以てし、力を極めて仁齋の文を瑕疵す、其說往々肯綮に中り、仁齋固より解免を得ざるなり、是の時徂徠已に五十、其學も亦熟す、然るに、彼れ殊見を聘せる、人之を喜ぶ所、己れ陳說を守る世の厭ふ所、之に加ふるに彼れ卽ち潤色するに東涯出藍の才を以てす。故に隨筆の枠四方に布くと雖も、士風回し難き如何ともするなし、乃ち益々忿懥に勝へず、蓋又自ら謂へらく平實穩雅の譚は勝を取る所以に非ずと、遂に舊學を棄つること敝躧を脫ぐが如く、悠ち一機軸を出し、以て仁齋の上に陵駕す。

時に徂徠五十有一、隨筆の墨未だ乾かざるに、既にして辨道を作り以て、童子問を壓し、辨名を作り、以て語孟字義を壓し、論語徵を作りて以て古義を壓し、學庸解を作り、以て定本發揮を壓す、彼れ宋儒を抑へ、獨り思孟を尊ぶ、己れは則ち思孟を倂せて之を詆る、彼れ大學を以て孔門の舊に非ずと爲せば、己れは則ち斷じて養老の禮と爲す、是益々殊絕して說ます〳〵新奇なり、飾るに禮樂の空言を以てし、鼓するに詞章の末技を以てし、而して盡く進修の實を廢し、人に溺れ易く悔ひ難からしむ。是に於て輕佻浮薄の徒、奔走喘汗、徹を改めて之れに歸し、聲號哄然始て起る、自ら以て計を得たりと爲す、異幟を東關に竪る者十有三年、一時の貴介公子、列藩學士大夫、以て處士緇流曲藝の徒に至り、樞攝後るゝを恐れ、片語隻字もその褒貶を仰ぎ、以て欣戚榮辱を爲す、盛ならずと爲さず、實に王李文盟を主り、聲華意氣海內を籠蓋するの術にして經に叛き道を賊ふの罪隻然之に軼く、當然儒敎殼實

渾厚の態一たび仁齋に壞るゝ者、此に於て淪胥以て鋪ねく其餘毒遺臭今に到りて未だ殄へず、君子世道の憂を懷く者豈深く慨嘆せざるべけんや、是れ徂徠生平學術の梗概なり云々。（同上）

徂徠學術の徑路を敍ぶること、詳を極めたりと謂ふべし、然れども其論議動もすれば感情に趨り、始めより惡意を以て筆を執れるものにして其眞相を得たるものでないことは、少しく徂徠の事蹟を繹ぬる時は直ちに判明するであらう。彼れは此〻の如く徂徠を解して此より其著論語徵の攻擊に移らんとするのである。然しこの論は餘りに經學專門の事に涉るから、今その內容に就ては之を說明することを省き、たゞ彼れの學說中、徂徠攻擊の著「非徵」も亦た甚だ重要なることを一言するに止めて置く。

第三節　中井履軒

享保十九年（一七三四）——文化十四年（一八一七）

一、學風

履軒は兄竹山とその性格に於て非常に相異つてゐたことは種々の逸話に依て傳へられてゐる、隨つてその學風も大に異なつてゐる。履軒の著書は實に等身の書にして一々列擧する遑がない程であるが、經學の上から觀て永く學界を照耀してゐるものは七經逢原三十二卷、七經雕題五十六卷、幷に七經雕題略十九卷である、履軒は自ら幽人を以て稱せしが如く、痛く名聞を厭ひ、百十餘種の著書も皆その姓氏を署せず、又た叨りに人に示さず、後世の知己を待つといつたが、七經雕題のみは津國中井積德處叔父纂と署してゐる所から觀ると、此の書は彼れ自身も亦た大に得意の著であつたことが察せられる。今此等の專門的學說に就ては一々之を紹介するの煩を避けるが、たゞ彼れが如何に獨創の見に富んでゐたかを示すと、易十翼、春秋を以て孔子の筆に非ずと爲し、その他古文尙書、孝經、周禮等を取らなかつたのである、如何にその世儒と相容れなか

つたかゞ想像さるゝであらう、固より十翼、古文尙書、孝經、周禮の如きは先儒既に往々之を取らざりしも、孔子の春秋を疑ふに至つては則ち履軒の獨創と謂はなければならぬ、兄の竹山も朱子の說に就て往々之を疑つたが、而かも其本領に至つては敢て背馳なからんことを期したのである。然るに履軒に至つては理氣、體用、復初、居敬等の朱說を以て皆孔孟の旨にあらずとして之を斥けた。その言に曰はく、宋代禪法大に行はれ學士大夫多く其檻阱に墜ち、程門の諸賢と雖も亦た免れず、故に其性命を談じ、心法を論ずるに、往々禪語を用ゐて自ら悟らず、且つ其の經を解くに多く對句を用ゐしより、其說く所疵累多しと又曰はく四書五經性理の三大全は儒者の三大厄なりと、其論鋒の甚だ鋭きこと、兄竹山と非常に異なつてゐる、考證學の大家猪飼敬所が、彼れの名著七經雕題略を見て大にその見識に推服し、彼れに就て學を問はざりしことを以て終生の恨事であると言はしめたのも亦たその學問に對する態度が從來と甚だ相異

なるものがあつたからであらう。尙ほ彼れが兄竹山と異なつてゐる點は陸王の學を排することである、謂へらく、陸象山は禪學にして異端である、又た陽明は象山を學ばんと欲するも、人の糟粕を嘗むることを惡みて、專ら孟子の良知良能說に據つて知行合一の說を立てた、然し知行合一といふことは猶ほ一手に文マワシを持ち、一手にサシ金を持つて、丸い物と四角い物とを一所にこしらへようと云ふ樣なもので其眞意を得たものでないと言ふのである。今吾々はその經學に關する意見を省略して、彼れが竹山と同じく尊王斥覇の論をなし、愛國慷慨の士たるを言はんが爲めに、次にその大義名分論を示すことにしよう。

二、大義名分論

履軒は平生、禮樂刑政天子より出づる世ならでは仕へずと言つて、諸侯の招聘に應ぜず、所謂幽人を以て自ら任じ、隱居放言以て世を弄ぶが如き人であつたが、その實慷慨氣節の士で、深く世敎の衰微を憂ひ、楠公の忠節を欽慕し、

赤穗義士を稱讃し、常に大義名分の論明かならんことを期したのである。其著「通語」一篇は全くこの本旨を闡明せんとしたものである。今これに依て少しく彼れの名分論を概觀しよう。

通語は履軒歿後十五年なる天保二年に門人早野反求（橘隧）に因て世に公にせられたが、其後ち同じく天保十三年門人淸水中洲(名原、字士進)に因て再刊された、中洲の序文に據れば此書は履軒早年の作であつて明和の初年卽ち三十二三歲の頃に成つたものである。寬平以下國史闕如し、水戶の大日本史、林家の本朝通鑑などあつたけれど未だ秘して世に行はれず、栗山潛鋒の保建大記、長井定宗の本朝通記の如きも未だ人心を滿足せしむるに足らないと云ふので本書の撰述を思立つたのであるといふ。その記事は保元に起りて南北朝に訖はり凡そ二百六十年間の事を記述し、揷むに「野史氏曰」を以てし、治亂興廢の跡忠姦邪正の事を論じてゐる。要するに此書は彼れが勤王心の發露とも謂ふべき

ものて、大に王室の陵夷を慨いて書いた所の歷史であつて、彼れの用意は敍事よりも史論に在つたのである、筆を保元に起したのは天位授受の正を得ずして保元の亂となり、遂に大權の武門に落つるを致し、王室衰へて覇業興りたるを痛嘆する心からであらう。その平語の開卷に於て之を論じていふ。

神武闢ㇾ宇、立二斯人極一、光參二日月一、緒等二天壤一、聖聖相承、無二姓可ㇾ紀、但謂二之天孫一耳、叔世紀綱陵遲、野戰之血、重明之戾、不二一而足一、降歷二保元治承一而極矣、眇視跛履、一治一亂、寰宇永爲二武人之有一、當三其恣二呑噬一、天地爲震動、離宮之餓、絕島之狩、王道如ㇾ線、綰二於其手一、然皆不三敢流二涎乎彝鼎一、而大統至二于今一、穆如下在二天上一者上、何也、豈畏ㇾ天與、將民彝之不ㇾ可二以廢一也、嗟是我邦禮文、卓然度二越於外國一者、余於ㇾ是乎、未三嘗弗二蹶然嘆一焉。

是れ武人の天下と爲れるを憤り、幕府政治の變態を、諷したものであることが

一讀して知られる、而して彼れは我が邦君臣の大義嚴として犯すべからざるものあることを示し、以て國體の萬邦に卓越せるを嘆稱してゐる。本書編述の目的以て察すべしである、彼れは又た大權の下に移りしを以て平氏の專權に始ると爲し、覇者は淸盛に昉まりて賴朝に就ると論じてゐる。

覇者昉二於淸盛一、而就二於賴朝氏一、就者就三於置二守護一、守護立而王澤熄矣、流爲二封建一、永弗レ復二厥初一、可レ勝二歎一哉。（通語第五）

覇業の完成をもつて賴朝に歸し、大に賴朝を非難してゐる、世人動もすれば賴朝の功を稱するも、その理なきことを一々事實に依て之を說き、王室陵夷の源を賴朝に歸し、大に慷慨悲憤の涙を濺いでゐる所など、履軒その人の面目紙上に躍如として表はれてゐる。彼れは更に北條氏の國柄を竊みたるを筆誅し、元弘、延元の二語には中興の業終を令せざりしを痛嘆せるなど、皆大義を辨じ名分を明かにして王政の中興を希圖するの志に出でたものである。卷尾南語の條

に於て中興の業を論じて曰はく、

嗚呼南風不レ競、漸以歸ニ于盡一、要レ之有レ命焉、雖レ然君臣一心、持レ正秉レ義、則何患ニ乎命之不一レ回、惜乎南山諸臣、莫ニ能與一レ之也、（通語第十）

と、卽ちその業の成らざるは南朝の諸臣、その策宜しきを得ざりしが爲めとなす、尚ほ進んで之を述べて曰はく、

獨不レ有ニ名分足一レ動ニ天下一邪、故有三能持レ正秉レ義以鼓ニ天下之氣一、則夫足利氏者、既被ニ權臣制一而不レ能ニ自存一、殪レ之猶レ摧レ枯也、夫時氏義長之屬、咸彼之亂臣矣、來輒受レ之、又隨而助ニ其亂一可乎、然率土之濱、莫レ非ニ王臣一、猶是可也、直義請レ伐ニ其兄一、而許レ之、直冬請レ弑ニ其父一而命レ之、然而南山之名分掃レ地、南風之不レ競、有レ以夫。（通語第十）

名分の地を掃へるを以て南風の競はざる所以となす。彼れが大義名分の論を重ずること此の如し、一部十卷の通語、是れ全く尊王斥霸の大史論と謂ふべきで

ある。

【參　考】

懷德堂遺書十五冊

（中井竹山の奠陰集、同履軒の論語逢原、五井蘭洲の勢語通、及び蘭洲茗話、中井竹山の竹山國字牘、懷德堂五種を收む）

懷德堂五種一冊

（三宅萬年の論孟首章講義、中井甃菴の五孝子傳、富貴村良農事狀、中井竹山の蒙養篇、貞婦記錄を收む）

尙ほ此外竹山、履軒二先生の著書を左に揭ぐ。

【竹山の著書】

非徵八卷（天明四年刊）

建學私議一卷

草茅危言五卷
社倉私議一卷
經濟要語

上記三書は日本經濟叢書第十六卷にあり、草茅危言は經濟雜誌社發行の單行本もあり。

逸史十三卷
詩律兆三卷
閑距餘筆一卷
其他尙ほ多くの著書ありと謂ふ。

【履軒の著書】

七經逢原三十二卷（一部分刊行さるゝも全書は未刊なり）
（周易逢原三卷、尙書逢原一卷、古詩逢原七卷、古詩得所編一卷、古詩古色一卷、左傳逢原六卷、大學雜議一卷、中庸逢原一卷、論語逢原四卷、孟子逢原七卷）

七經雕題五十六卷未刊

（周易三卷、尙書六卷、詩七卷、左氏十五卷、禮二十卷、學庸一卷、論語二卷、孟子二卷）

七經雕題略十九卷　未刊

（易三卷、尙書二卷、詩三卷、左氏三卷（既刊）禮三卷（已刊）、中庸一卷、論語二卷、孟子二卷、）

通語　三卷

履軒斂帚　三卷

年成錄　一卷

浚河茅議　三卷

均田茅議　一卷

華胥國物語一卷

上記四種の書は日本經濟叢書第十六卷に收載されたれば見るに便なり。年成錄は日本文庫第一編にもあり。

水哉館集　三卷
百首贅々　一卷
履軒の著は此外殆んど枚擧に遑あらず、今吾人の研究に差當つて必要なければ之を略す。

第六章　輓近の朱子學

この章に就ては特に「日本儒教概説」第五章第五節林家の盛衰と幕末に於ける朱子學の條を參照されんことを望む、今たゞ寛政三博士外二三の學者の說を敍ぶるに止めて置く。

第一節　寛政三博士

一、柴　野　栗　山　（附西山拙齋）

元文元年（一七三六）——文化四年（一八〇七）

栗山は初め藩儒後藤芝山に就て句讀を受け、後ち江戸に出でゝ鳩巢門下の中村蘭林の門に入り、又次で贊を林榴岡に執つた、彼れの學問は徹頭徹尾朱子學を以て一貫してゐる、寬政異學の禁令が出るに至つたのも、全く彼れの信念から決行さるゝに至つたのである、彼れは我が國の先儒の中で最も鳩巢を尊崇した、而して物徂徠伊藤仁齋の學を最も惡んでゐたことは文集の中にその議論が諸處に散見してゐる、「室鳩巢尤精粹、其制行文章經世之才、信稱二通儒全材一也。」(文集卷三答大江尹)とは諸儒を評せる言論中に於て鳩巢を讃美せる言である、昔し鳩巢が異學隆盛の際朱子學の爲めに盡力した行動と、彼れが寬政時代に於ける行動とは全く同一の動機に據つて出でたもので、兩者とも大に朱子學の爲めに氣焰を吐いたのである、然しながら勿論時代の進步もあり、同じく朱子學の爲めに力を盡したとは云へ、彼れには鳩巢の如き偏狹固陋なる學風を見出すことは出來ない、徒に他の學派を攻擊して能事終れりとするの極端な議

論はない、他學派の長所をも認め、又た朱子學派の缺點をも見逃さないといふ公平なる態度を執つてゐる、而して鳩巣の如き名分論に於て誤れる考などは毫頭もなかつたことは、神武山陵の詩を作つて將軍に上つた時、自ら「陪臣無位柴野彥輔」と署名して時の將軍家齊公を驚かした有名なる逸話に依ても之を推知することが出來る、之を要するに彼れは近世有數の大儒たる名に最も相應はしき學者であつたが、その學問的方面よりも、寧ろ當時の敎育行政の方面に於ての業績が一層偉大であつた、故に今その學說の詳細は之を略し、彼れが學者修養の爲めに靜坐を鼓吹し、且つ佛敎のそれと相違せることを力說せる講義の一節を左に引用することにする。

靜坐のしやうと云は、靜坐の字は坐を靜にすとかく也、坐禪は結伽趺坐とて眼眉端を目に見て、心を臍下に收て、念慮を滅する也、わざと坐禪はするとなり、ひま〳〵にすると云ふことなり、線香一本ぎり、二本ぎり、定め、或

は一時二時と定めてする故に窮屈になつて流行せず、身心死物となる也、靜坐は其の如くに、きりを立す、時を定めず、朝にても晝にても、夜にても曉にても事物に接して後、其用をしまへ、ひまの時か、讀書し筆記して後ひまの時か、とかく何もせぬ時にすること也、畏りても、あぐらかいてなり共、其時の居よきやうにして、身をすらりともち、手も一所へよせて、身をゆつたりと持て、布袋のすはつたやうにして、にこ〳〵と笑ふ心にして、心のきつと凝ぬやうにゆつたりと持て坐する也、そこで心を沈ると色々のことが思出る也、それを無理に拂へのけん、押付んとするはあしゝ、そちへよれ〳〵と云意で、そろ〳〵とのけ心をちつと靜むると、自閑雜が息む也、押付てむりに除くればひたとあたから出る也、始はねむくなることあり、心氣が靜まる故なり、ねむくなれば、やれと呼醒す也云々。（栗山先生靜座說、靜坐法の條）

その他文集を見ると種々當時の學弊を論じてゐる所なども、彼れの面目を窺ふ

に足る說であるが、文集第一卷の劈頭に收められてゐる「進學三喩」の一文の如きは處世上の敎訓として最も味ふべき語である、然しこの文は餘りに有名であり、且つ長文であるから、茲にはそれと同じく人口に膾炙してゐる左の短かき一文を掲げて置く、是れ亦た少年子弟に取つての好個の敎訓である。

籠二養小鳥一者、捕二獲鶯雛一患二其聲澁濁一、就二老鶯善鳴者一使レ學二其聲一、俗謂二之附子一、雛初在レ籠還二躍上下一、蹤然無二少頃靜一、忽聞二老鶯一哢一、便戢レ翼凝立、如二諦聽者一、越レ時始能動レ身、既而低弄如二學レ之者一、又如下羞レ澁、怕二人聞一者上、如レ此一兩日、乃能放レ喉縱レ囀、音響劉亮可レ愛云、嗚呼微彼小禽、尚思レ好二其聲一而知レ希レ賢、可二以レ人而不レ如一レ鳥乎、癸卯二月十三日聞二之神川生一書以示二塾生一。（栗山文集卷一、示二塾生一）

栗山と關聯して忘るべからざる人は西山拙齋である、拙齋は、備中鴨方の人で、初め岡白駒に就て學び、白駒の死後那波魯堂に就て學問したのである、魯

堂は初め徂徠學を修めたが後ち程朱の說を尊崇して舊學を廢棄した、從つて拙齋も亦た熱心なる朱子學者となり、大に朱子學の爲めに力を盡した、柴野栗山が異學禁令を斷行するに至つたのも其背後に拙齋の如き有力なる後援者があつたからである、拙齋については、今こゝで詳細に述べる餘白がないから、最後に其の參考書の一を揭げて置く。

【著書及び參考書】

栗山堂文集　三冊（寫本）

栗山文集　六卷五冊（天保十三年刊）

栗山堂詩集　四卷寫本

國鑑　二十卷寫本

栗山上封　三卷寫本（日本經濟叢書第十七卷に收むる所の栗山上書と同一なるべし）

栗山先生靜座說　一冊（寫本）

尙ほ參考として「栗山先生の面影」（三上博士谷本博士講演集）「白河樂翁公と德川時代」（三上參次著）などを一讀すべきである、又た西山拙齋に就ては花田一重氏編の「西山拙齋傳」など好個の參考書である。

二、尾藤二洲

延享二年（一七四五）——文化十年（一八一三）

二洲はその初め大阪の混沌社に入つて片山北海（宇士新の弟子）に就て學問した人であるから、徂徠の學及び仁齋の學は一通り研究することが出來た、殊に徂徠學は一時大に之を研究したやうである、その知識を以て二氏の古學を攻擊してゐるのであるから、所論往々肯綮に當る所少なくないが、正學指掌の著は專ら二氏の學を排して朱子學を主張せんとしたので、動もすれば感情に趨つて、正當を缺く所がないでもない、例へば彼れは仁齋の學を評して、

仁齋も初は程朱の書を讀みたれども、得る所なくしてありしが、一朝偶然と

天地は一元氣のみと心付き、さては此氣の外に物なく道といふも此氣なり、天地と云も此氣なりと自覺たる心地して手の舞ひ足の蹈むをも忘れ、我れこそ道を知りたれ、鄒魯の血脉を得たれとて高く自ら標榜し、新に一流を造爲せる者なり、譬へば暗室の中にありて天地日月を見ざりし者が、偶〻戸外に出て之を見て大に驚きよろこびて、我こそ天地を見たれ月日を知りたれとて聲高に叫喚が如し、他人より見れば甚だ笑しきことならずや、彼が所謂天地は活物なり、萬物は一元氣などいへるとは理氣の說に達せる者の皆知りたることなるを唯己のみ知れりと思ひしは其舊見の死見なりしを知らねばなり、且偶〻心づきしまゝにて深く思ひを致さず氣のみにて理なしなどゝ敢言し、遂に一門戸を立しは誠に疎淺なる氣象と云べし。かゝる心より四子六經に妄に新說をなして俗士を誑き其敎をもて天下を易んと思ふ、それを珍らしきことに思ひ輕俊の徒多く附和せり、舊きを厭ひ、新を喜ぶ習ひとは云ひながら

人の識見なきこと歎ずるに餘あらずや。（正學指掌附錄）

と云つてゐるのは、餘りに仁齋を輕んじ過ぎた批難である、次に徂徠の學に關する批評を見るに、左の如く詳細に之を論じてゐる。

古文辭學は物徂徠より起る、余初年學びたる故に能その意を知れり、其學の主とする所は功利にありて聖人の言を假は緣飾までなり、道は先王の作り玉へる者にて自然の理にあらず、安天下の具にて當行の路に非ずといふこと其綱要の處にて皆功利に本付たり、畢竟は道と云も聖人の天下を理め玉へる法を今に傳くたるにて今時の掟の如き者なり、六經といふも御成敗式目の如き者なりと云るなり。此起りはかの老平生功利をのみ心懸しより何を見ても其姿に思ひなし居たる處に、仁齋が說を聞き略ゝ其意にあたるある所を悅びて、又面を換へ頭を改めて卽ち建立し出せるなり、荀卿奇を好んで思孟諸賢を謗り、其門人李斯遂に聖人の書を焚けるが如し、異を好

の弊懼るべきことに非ずや、その禮樂を專ら說るも亦かの式目の意なり、今又彼が大意を取りていはん。先王と申すも開國の君をいへるにて實は漢祖唐宗も同じことなり、ただ其智勝りたるゆへ式目を立られし處が後の帝王に越へ好きなり、其式目に禮樂といふ者を作り、それにて政をせしゆへ、其世の風俗秦漢以後の及ばぬことあるなり、今政を爲る者かの古き蹤を追はゞ是聖人の道を行ふといふ者也、政に與らぬ者はたゞ先王の道を明かにするのみ也．先王の道を明かにするとはかの禮樂の說に通ずるをいふ、もし禮樂無れば先王の道もなしと大意是程の事なり、左れば其學たゞ理民の術のみにて自己の身心は置て問はざるなり、故に身に非法の事を爲れども恥とせず、其徒みな先王の禮、先王の義などいふことを口實にすれども、其志は蘇張に過ぎず、或は嵆院が放蕩にならひて一世を傲睨せんとす、もしそれに向ひて義理を說く者あれば耳を掩ひて腐儒の陋見と嘲り笑

ふ、かゝる輩世に多なりし淫縦奇怪の行をする者往々に蔓れり、それを餘りの事と思ひしにや、彼が門人太宰某は修身の事をも説きて其身をも堅く持てり、されども偏執あること愈甚く、徂徠が敢て言はざることをも説き出せり孟子論、小學論の類固より擧げ論ずるに足らず、さて禮樂の事は今已に亡びて且此方に行ひ難きことなれば、姑くこの説をなして緣飾せるまでにて、實は唯功利の事のみを心懸ることを吠聲の徒辨へ知らずして禮樂々々といひて一生を送り過すことと返す々々も怪むべきことなり、是は彼が徒たる者たゞ詩文のみを一生の事業として年月を暮すゆゑ、心つかずと見ゆ、もし道といふ者に心つきなば、道は禮樂のみ、禮樂は今亡びぬ、こはいかに先王は何をか道とせられんと始て驚き思ふべきか、誠に淺き丈夫といふべし。（同　上）

徂徠に對する彼れの評言は、此くの如くその詳細を盡してゐるが、初めより徂徠を排せんとした議論であつて、決してその眞を穿つたものとは言へない、彼

れは徂徠の説を稱して功利說といふ、固より徂徠の説は功利主義なることは否定することは出來ない、然しながら功利說なるを以て之を取るに足らずと爲すは、餘りに極端の評である、徂徠の學に於ける特色も缺點も一にこの功利主義を唱ふる所に由るのであるが、彼れはその缺點のみを見て、その長所を見ないのである、又た徂徠を以て毫も修身のことを言はず、放蕩無賴の徒と同一視せるは、徂徠の事蹟を詳知せず、たゞ自己臆斷の見を以て爲せるもの、眞に徂徠の人格を傷けるものと謂ふべく、後世に於ける徂徠誤解の言は恐らく此等の言に因ること尠くないであらう、然しながら春臺が徂徠の敢て言はざることをも說き出せりといふ彼れの言は眞に適評である、之を要するに以上の徂徠評は徂徠の缺點を指摘せる點はやゝ肯緊に當つてゐるが、その長所を認めざるの言は公平なる態度といふことは出來ぬ。彼れは徂徠の學を以て最も學者に害毒あるものと認めてゐたことは、恰度大阪の中井竹山或は五井蘭洲の意見と同様であ

る、

今之學者往々自以爲ㇾ成二一家一者、醉二物氏餘毒一者也、東土最甚、其弊學者皆喜二放縱一而厭二合檢一、俗士視以爲ㇾ達而倣ㇾ之、嗚呼是害二風俗一傷二敎化一之大者、不ㇾ可ㇾ與同二中國一。（冬讀書餘卷二）

蓋し彼れは當時江戸に於ける所謂五鬼の徒を以て、皆物氏の餘毒に醉へるものと考へたのであらう、彼れは此くの如く伊物二氏を排して、たゞ〳〵朱子の學を興隆せんことを希ふたのである、その朱子尊崇の甚しきことは、「聖人あつてより以來、未だ孔子あらず、儒者あつて以來未だ朱子あらず」（文集卷五）の言に依て知られる、左に彼れの孔子讃美の言と、座右八戒とを掲げて其學風の一端を示さう。

自ㇾ有二儒書一以來、未ㇾ有二斯書一。自ㇾ有二儒者一以來未ㇾ有二斯人一。百世之下誰不二欽仰一。（文集卷五）

座右八戒

一、心主二一事一不レ可レ二三一。
一、行取二衆善一不レ可二偏執一。
一、座作常要二畏謹一不レ可二躁妄一。
一、言語必辨二其是非一。
一、接レ物必擇二其邪正一。
一、群居之時須レ禁二雷同一。
一、獨知之地、最加二謹愼一。

彼れの學說は要するに程朱の見解を敷演せるものに過ぎないが、その著「發蒙十二說」の如きは自得體驗に基いた說であつて一讀の價値がある、その他素餐錄一卷も亦た彼れの學說を知り得る重寶の書である、今此等經學に關する方面は凡て之を略し、名分論のことを一言して置く。彼れは稱謂私言なる一書を

著はし、君臣の關係を論じ、名稱の誤を正さんとした、例へば天子の行を幸と
いひ、將軍の（彼れは大君と言つてゐる）行は宜しく臨と言ふべしとか、或は
叡、聖、等の字は輕々しく用ゐてはならぬといふのである、朝廷と幕府との區
別を明かにすべきことを論じては左の如く言つてゐる、

皇家の朝を天朝、皇朝と稱す、大府の朝は宜しく大朝、府朝と稱すべし、齊
しく朝を稱すと雖も尊卑の分自ら明かなり、府朝郡朝、漢唐皆此稱あり、又
朱子の文に大都督府廷中の稱あり、此類諸書に多し、殫く記すること能は
ず。（稱謂私言）

その尊王の精神以て見るべきである、二洲の長子、水竹（弦菴）も亦た大に名
分論を唱道し、大に尊王主義を鼓吹してゐる、（日本儒教概說三〇八頁參照）而
して二洲よりも大膽に、公々然として幕府の措置を批難するに至つてゐる、例
へば、

幕府は天子にかはりて天下の政をせらるゝ事なるに、深宮にのみ御座あらん事勿體なし、昔は餘り事簡にて諸大小名内外の別もなく、皆奥向迄も出入せし故、きつとしたる政の堂の定もなかりしと見えたり、後々幼君あり、遊惰の君あり、奸臣是に乘じて今の如き上下隔絶したる事となり終るは、其職分をもしろしめさず、何を以て天子に答玉ふべきや、にが〳〵しき事なり。（尾藤先生雜錄）

又以て彼れの熱心なる尊王主義者なることを知るべきである、水竹の學問は勿論、父には及ばなかつたであらうが、此の雜錄にある言論を見ると、その卓識洪量は寧ろ父よりも勝れてゐたやうに思はれる。

【著　書】

素餐錄　一卷（天保七年門人長野豐山の序、同九年門人近藤崧の序、及び自序あり）

正學指掌　一卷（附錄あり）（天明七年刊）

（右二部の書は日本倫理彙編にあり。正學指掌は日本文庫第一編にも收めらる）

中庸首章發蒙圖解　一卷（天明五年刊）

易繫辭廣義　一卷

靜寄餘筆　二卷

○以上五部の書は彼れが大阪に在る時の著作なりと謂ふ。

冬讀書餘　三卷

擇言　一卷

稱謂私言　二卷（寬政十二年の自序あり）

靜寄軒文集　十二卷七册

三、古賀精里

寬延三年（一七五〇）――文化十四年（一八一七）

精里は初め福井小車に從ひ、後ち崎門派の西依成齋の門に入り、更に尾藤二

洲、賴春水或は中井竹山等當時の名儒と交はり、程朱の學を奉じ、佐賀藩に仕へ、又た幕府の儒官として大にその政治的才能を發揮したことは人の能く知る所である、彼れは常に世の所謂文人儒生を以て目せらるゝことを耻ぢ、毎に人に語つて「學なるものは將に己を修めて人を治めんとす、何ぞ終身矻々文字を攻むるに暇あらんや」といつたといふことであるが、以て其人と爲りを想見することが出來る、彼れは又た程朱の學を尊崇したが決して之れに偏する人でなかつた、闇齋派の朱子學は最も彼れの惡む所であつた、門人本多忠介の撰べる精里古賀先生墓銘の中に「尊二信程朱一如二神明一、然深惡二崎門固陋之弊一、故其學該博、發爲二文辭一雄偉贍富、滔々如二江河一」と云つてゐるやうに、其學問は博洽であつて當時比肩するものがなかつたと謂はれてゐる、而して朱子學者は往々にして文章を輕んずる傾向があり、隨つて經義を解するに誤を生ずることを痛く憂へたのである、本莊生に贈る序に「譯は賤役なり、然れども漢人に對せん

と欲せば、則ち之を先にせざるを得ず、文章は小技なり、然れども、聖賢の書を讀まんと欲せば、卽ち之を攻めざるを得ず、此理見難からず、而るに世人肯て心を留めざるは何ぞや、煩を憚ればなり、功を妨ぐるを恐るゝなり、然り今の穿鑿傅會の煩、字義を審にするに倍し、空談無根の功を妨ぐるは文章を攻むるより甚し、況んや吾が文章それ必ずしも相如、楊雄、班馬、韓柳たるを求むるに非ればなり、文理を解して繆ならざるを要するのみ、何ぞ爲し難しとせんや」と言つてゐる、又以てその學風如何を知るべきである、之を要するに彼れの學問は、前既に述ぶる如く、修己治人を以て目的となす實學實行を期するに在つたのである、今文集中一二の文を左に摘錄してその思想の一端を窺ふ便としよう。

古人之學、倫理而已矣、何謂レ倫、父子君臣夫婦兄弟朋友是已、何謂レ理、親義別序信是已。是人之命二於天一而具二於心一者、未三嘗有二古今彼此之異一、學レ焉而求レ得二諸己一、謂二之正學一、學而不レ正何補二於倫理一哉云々。（精里初集卷二、川

涯學舍記）

爲レ學之要、莫レ先ニ於爲レ己爲レ人之辨一、苟於レ此焉不レ用レ心、則雖下日講ニ誦聖賢之言一、日歩中趨聖賢之行上、徒足三以長ニ虛誕矯僞之私一、與ニ己之身心一、毫無ニ干涉一、卽使ニ窮レ年卒レ歲、矻矻用レ力、亦何益之有、蓋試觀ニ正史之儒林一乎、自レ漢以來所レ謂儒者、其業止ニ於言語文辭一、不レ過レ授ニ典故一、議ニ器服一論ニ明堂一考ニ樂律一而已矣、夷下考ニ得於心一發ニ於行一者上、或無レ異ニ庸衆人一、而時有ニ甚者レ焉、其偶有ニ嘉言懿行之可レ紀、亦出レ於ニ性質之美一、謂ニ之學問之效一則不可也、一部十七史儒林之傳、類爲ニ迂腐之淵藪一、哀夫、是無レ他、非ニ爲レ己之學一故也、至ニ於洛閩眞儒出一、然後用ニ力於レ此、亦以レ此敎レ人、於レ是乎有下蘊爲ニ德行一、發爲ニ事業一者上。云々。（精里三集卷四贈言爲古賀寬明）

【著　書】

精里初集　三卷（文政元年新刊）

精里二集　二卷（文化十四年山村良由の序、文政元年男煜の跋）
精里三集　五卷（文政元年増島固の序男燾の跋）
精里全書　二十卷寫本
大學章句纂釋　一卷
大學諸說辨誤　一卷
右二書は日本名家四書註釋全書の中に收載さる。
中庸章句纂釋　二卷（寫本）
中庸諸說誤　一卷（寫本）
十事解　一卷　寫本
（十事とは師傳、六官、經界、鄕黨、貢士、兵役、民食、四民、山澤、分數の十を指す、施政治民の要を論じたるものなり、日本經濟叢書第十七卷には此書と共に極論時事封事、經濟文錄附軟莎偶語の二書を收載せり）

近思錄集說　五卷（寫本）
中庸辨誤　一冊（寫本）

第二節　安積艮齋

天明五年（一七八五）――萬延元年（一八六〇）

安積艮齋はその初め佐藤一齋の學僕となつて困學勉勵、遂に師の一齋と共に昌平黌の敎官となつた幕末の碩儒である、勿論その主張する所は朱子學であるが、從前のそれと違つて非常に公平なる態度を以て之を稱へてゐる、彼れの敎學は「艮齋閒話」に依てその大體を知ることが出來る、而して輓近に於ける朱子學者の態度を自ら物語つてゐる、卽ち排他的の考は毫頭もない、極めて穩健なる意見を示してゐる、例へば、

道は天下の公道なり、學は天下の公學なり、孔子孟子の得て私する所に非ず、博く天下の善を取るべし、書經に德無$_{二}$常師$_{一}$主$_{レ}$善爲$_{レ}$師とあれば、善の

有る所は皆吾師なり、舜は大聖なり、猶ほ邇言を察せり、孔子は大聖なり、三人行、必有二吾師一と云ふ、然れば學は一家を墨守するに及ばず、道の存するは皆學と思ふべし、程朱の諸賢は勿論なり、陸象山、王陽明諸公の言も其善なるは皆從ふべし、漢唐諸儒の說も取るべし、老莊申韓佛氏の言も善なるは皆取るべし、愚夫愚婦の言も亦取るべし、かくの如く胸襟豁大古今を包括する勢にして志の高大とも云ふべし、朱舜水云はく、學問之道、如レ治レ裘、遴二其粹然者一而取レ之、若曰二吾某氏學吾某氏學一則非二所謂博學審問之道一也、此語通會の論と謂ふべし、今の學者は門を別ち、戶を分ち、各其識見を守り、朱子學と云へば、陸王の學は異端邪說と號し、其善なる所を概棄す、漢學と云へば、程朱の學を老佛の如くに排斥するは、各其學を主張せんと思ふより起り、天下に幾許もなき儒者の中にて門戶の見を爭ひ、仇讐の如く思ふは、公平の道に非ざるに似たり、朱子は嚴毅大正の人にて、陸象山と太極の辯、

鵞湖の論は合はざれども、象山を白鹿洞に招き、門人を集め、講義を聽き、又象山に請うて講義を文に綴りしは、人の善を取る公平の道なり、象山も其門人朱子を議する者ある時、大に辯責せしこと文集に見えたり、されば學問の道は博く善を取るべし、然り實學に志篤き人の爲めに云ふなり、志篤き人は人の善を取りて我善と成し活用するなり、故に申韓老佛の言にても、愚夫愚婦の言も其善なる處皆我修省の資となるなり、上手の冶工は銅中より金を取るが如し、聖賢の言にても活用なき者は下手の冶工精金を用ひ損し、鉛も同様にするなり。（艮齋間話卷一）

彼れは此の如く朱陸二子の德を擧げて、徒らに異見を以て相爭ふの愚を戒め、たゞ實學實行を根本の主義となしたのである、更に孔門の教義も畢竟するに忠信の二字に歸するものなることを說いて曰はく、

古の聖人孔子より盛なるはなし、孔子の書論語より貴きはなし、論語中忠信

の二字尤も多く見えたり、されば學者の力を用ひ、身を修むるの樞要と知るべし、集註に盡レ己爲レ忠、以レ實爲レ信とあり、人は天品の性質、智愚、賢不肖種々の異なるあり、譬へば金の內に黃金もあり、白銀もあり、銅鐵もあり、鉛錫もあり、是れは自然の生質なり、鉛は鐵になるべからず、銅は黃金になるべからず、聖賢の人を敎ふる、君父の臣子を責むる、鉛を鐵にせよといはず、銅を黃金にせよと云はず、只鉛は鉛の用あり、銅は銅の用あり、其天質の分を盡し、其用を達するを忠信と云ふなり、人臣の君に事へ人子の父に事ふるも、心力を盡し、毫髮怠惰の心なく、吾十分を盡すなり、吾心力已に盡すならば、聖賢も分外の事は、責めざるなり、但々銅鐵は其良なる所あり、又あしき所あり、其あしき所を鍛錬して除き去り、其良なる所を存する如く、吾心身を鍊磨して其分量を盡すより外なし、もし鉛の質にて鐵の用をなさんとし、銅の質にて黃金の用をなさんとすれば、鉛と鐵と雜はり、銅と黃金と

雜はり、贋物となる、表裏の違ひありて忠信に非ざるなり、忠信は白きは白く、赤きは赤く、黑きは黑く、內より外に至り、本より末に至るまで洞然として毛髮の雜はり無きを忠信と云ふなり、若し鉛の身にて鉛の用を盡さず、銅の身にて銅の用を盡さず、怠慢するは忠信の道に非ず、唯々吾心力を盡すべし、此工夫純熟すれば誠の德に至るべし。（艮齋閒話續上）

と、玆に至りてます〳〵其實學主義の神髓を發揮したものと謂つてよい、而して金銀銅鐵の譬喩を以て人各その特色を發揮すべきことを說き、聖人の人を敎ゆる決して不可能事を以てせずと論ずる所殆んど物徂徠の說と同一主旨であつて、朱子學的臭味の甚だ尠少なるに驚かざるを得ない、蓋し幕末に於ては艮齋に限らず、凡ての學者は從前の如き學派の見に拘泥するものは極めて少くなつた、隨つて或學者を何派と決定して終ふことは餘程考慮を要する問題である、只研究の便宜上區別することは必要であるが、必ずしもそれに拘泥する必要は

ない、自分は艮齋の學風は、總じて晩近儒者の學風を代表してゐるものと思ふ、尙ほ艮齋閒話には處世上の敎訓尠くないが、こゝではそれを略して置く、室鳩巢の駿臺雜話と同じく隨筆であるが、又たそれと同じく讀んで面白き有益の書である。

【著　書】

艮齋閒話二卷（天保十一年刊）

同　續編二卷（嘉永四年刊）

此外尙ほ詩文集を初め、多くの述作ありと謂ふも未だ寓目を得ず、故に今茲に他の書名を列記することを略す。

第三節　元田東野と中村敬宇

一、元　田　東　野

文政元年（一八一八）——明治廿四年（一八九一）

明治大帝の侍講として、又た最近の朱子學者として有名の人である、明治四年五月侍講となつて以來、同廿四年一月歿するに至るまで廿年間その職を勤めた人で、世に行はるゝ經筵進講錄は卽ち　大帝の侍講として進講したものゝ一つであつて頗る名敎に關係ある書物である、その他幼學綱要の一書は勅を奉じて編纂した修身敎科書で弘く世に行はれたものである、此等二書に依て大體氏の考を知ることが出來る、當時儒敎衰へ、西洋の學術勃興して、東洋道德將に廢棄せられんとした時に、敢然として儒敎の道德を鼓吹し、道德の大體を論じて（日本儒敎概說三六七頁參照）斯道の特色を發揮せんことに盡力した其偉大なる功績は永く忘るべからざるものがある、彼れは眞に我が皇道に醇化せる儒敎を唱道したのである、その一例として、論語開卷第一の「學而時習レ之不二亦說一乎」に就ての意見を示して置かう。

凡そ人、天地の間に生れ自二天子一至二庶人一、畢生の事業、只此の學の始めを爲

し、終りを爲す者なり、故に此の學あれば其天職を全うす、此學なければ其の天職を失ふ、此の學達すれば聖人となり、此學達せざれば庸愚となる、此の學明かなれば、天下平かに、此學明かならざれば、天下亂る、人間天下萬事の成敗、只此學の明暗にあるのみ、故に孔子の人に教ふる、只此の學の一字にて論語開卷學而時習之と云ふ、一言一行、學の事に非ざるはなし、然るに學に正あり、偏あり、大小本末あり、孔子の所謂學は至中至正の大本達道にして、修身平天下の道德學なり、當世の所謂學は、一科々々の學、異端末技の謂ひにして、大本達道の學に非ず、是れ此章學の字を講ずるに於て、始めに辨ぜざるを得ざるなり、古來より之を辨ずれば、彼の管晏の覇術を始め種々の異端俗儒訓詁文詞の學、佛法、耶蘇教、西洋百科の學皆一偏一派の學にして、孔子の所謂學に非ず、且つ當世にて、支那の文學を學ぶを概して漢學と稱して、孔子の學を爲す者も同一視すと雖も、是れ亦大に分析せざるを

得ず、漢學と云ふは、支那の歴史、古今の制度文物を知り、漢文漢語に通ずるの文學なり、孔子の學は我が德性を盡し、眞理に達し、天下に大道を行ふの學なる故に、支那にて云へば堯舜の道、孔孟の學と云ふと雖も、本邦にて云へば、我神聖の道、我道德學と云ふべきなり。又國學神道と云ふも、古典故事を考證し、敬神尊王を主とすと雖も、多くは一偏に局して先皇の至德大道を實踐するに足らざれば、我神聖の道、孔子の學と同じからず、抑々孔子の學は我本然天良の心性を發覺し、人倫日用の道を盡して、天理の極に達し、身を修め以て天下を平かにするの道學なり、其人と爲り、周靈王の末、魯襄公二十二年に生れ、生知の資を以て、篤く聖人の學を好み、人道を盡して、天理に達し、剛健中正、純粹明快の德を備へ、天の四時あるが如く、一毫の偏倚なく、堯舜以來、大道を祖述し、易を演べ、詩書を刪り、禮學を修め、春秋を作り、其學問德行、人を敎へ、國を治むるの道は、此「論語」と「大

學」「中庸」「易傳」等の書に具載して漏るゝ處なく、輓近西洋の理學、修身學、法律、政治、經濟の學等、其精細を說くと雖も、皆其全體大用を備へ、一本を以て萬殊を貫くに至つては實に宇內古今の一人、萬世の師と云ふ可し、故に孔子の學を學びて根本已に定まりたる後は、法律經濟等西洋の科學をも學び識見を博するは可なりと雖も、孔子の學を後にする時は根本立たず、遂に道德を損じ、人倫に悖り身修まらず、家齊はずして國治まらざるなり、其他前に辨ずる處の異端俗學に於ては、外、仁義を假りて、內詐力を專らにし、或は智術權謀互に相軋し、或は高妙の理を說て、人倫日用の道に背き、或は口に法律を說いて、內行修まらず、或は文辭技藝の末に馳せて、實用に乏しく、是れ皆古來の學弊、現今西洋自ら文明國と誇るも其實は心術正しからず、風俗善良ならず、利を貪り力を爭ひ、其害一にして足らず、學藝は益々開明して人心は益々狡黠なる者皆學路中正ならざるの致す處、其大害を見るべきな

り、今日苟も學を爲す始めに先づ其取捨先後を審にせざるべからず、況や人君の學、其學ぶ處卽ち天下の法則となる故に、人君の學は孔子の學を學ぶより外なし。（經筵進講錄）

今その意を考ふるに、彼れは儒學卽ち孔子の學を以て、日本倫理學を建設せんとしたのである、道德の學は之を外にして他に求むることは出來ない、之を堯舜の道、孔孟の學といふは支那にての名稱にて本邦にては之を我が神道、我が道德學といふべしといふのであるから、一面から觀れば從前の神儒一致說を唱ふるものである、而して當時洋學心醉の徒が、古來我が國民の道義を養成し來りたる儒敎を輕んじ之を棄てゝ顧みざる態度を取つたことは、彼をして大に痛憤せしめ、學の本末を說いて、時弊を匡正せんとしたのである、「蓋し歐洲の文明を耳聞目擊する者、其の事業の末にのみ瞑眩して本に反ることを知らざるなり」とは君子務ㇾ本の章を講ずる一節である、儒敎衰頽の時運に際會して能く儒

學の精神を維持せしめたる功績は大なるものである、最後に儒教の根本義たる仁に關する講義の一節を示して、如何にその説明の巧妙にして俚耳に入り易き論であつたかを知るの便としよう。

蓋し仁の理は生々不レ息、只だ是れ一個の愛、充滿して滲漏なく六合四海を包含して猶ほ盡くることなし、……先づ近く譬を取て、諸れを身に驗するに若かず、今一縷の髮も之を拔かんとすれば總身股栗す、一針の微なるも膚を刺せば忽ち痛楚を覺ゆ、是れ愛心の惻怛する所なり、其蹪いて倒れんとすれば、忽ち手を以て面膚の土石に觸るゝを扞ぐ、纖塵も眼に入らんとすれば睫を塞いで之を拒ぐ、是れ皆愛心の身を保つ、其働き到らざる所なし、此滿腔の愛心、己れに發して人に及ぶや、其親近なるより先づ父母を愛し、妻子を愛し、兄弟に至り、其尊敬するより君上を愛し、國家を愛し、天下衆民に及び、鳥獸器物に及び、其大小親疎、本末前後の等差ありと雖も、只一個

の仁愛貫穿し、漏らさゞるなり、故に匹夫匹婦も此仁あらざれば身修らず、一家を保つこと能はず、人君大人も此仁を離れて天下を保ち民を治むること能はず、其始めは只一滴の愛心、惻然藹然と發して其極點を云へば、宇内古今内外上下、悉く此愛心を以て旺弱覆幬するに至りて猶足らずとす。（同上）

二、中村敬宇

天保三年（一八三二）――明治廿四年（一八九一）

西國立志編、西洋品行論等の譯書を以て其名を知られてゐる、（日本儒教概說三七一――三七二參照）夙に洋學を修め、その新知識を以て儒教の教義を闡明してゐる、此人の信仰に就ては故老の談に據れば、耶蘇教を信じ、或は佛教を信じ、種々に變遷してゐるが、結局は儒教の教義を信奉したのである、幕末より明治年間に至る輓近の儒者として最も注意すべき人である、其思想を窺ふべき遺

著は敬宇文集と敬宇中村先生演説集との二書である、今その文集の中から敬天愛人説を摘譯して其一斑を示さうと思ふ。

仲虺の語に曰はく欽んで天道を崇び永く天命を保つ、説命に曰はく、明王は天道に奉若す、詩に曰はく天の怒を敬しみ敢て戯豫する罔し、孟子曰はく、其心を存し其性を養ふは天に事ふる所以也、張子曰はく乾を父と稱し坤を母と稱す、朱子曰はく古の聖賢を見、朝夕只那の天が眼前に在るを見る云々。

（敬宇文集卷三敬天愛人說上）

と、以下同じく先賢の言を引て敬天愛人説の由來を述べてゐる、而して下篇に於ては自家の見解を次の如く述べてゐる。

天は我を生するもの、乃ち吾が父なり、人は吾と同じく天の生ずる所たり、乃ち吾が兄弟也、天是れ敬せざるべけんや、人それ愛せざるべけんや、何をか天を敬すと謂ふ、曰はく天は形なくして知あり、質なくして在らざる所な

し、其大外なく其小内なく、人の言動其昭鑑を遁れざるを論ずること勿れ、乃ち一念の善惡方寸に動くもの亦其視察に漏れず、王法の賞罰時に及ばざる所あり、天道の禍福遲速異なりと雖も、而も愆る所なし、蓋し天は理の活なるもの、故に質なくして心あり、卽ち生を好むの仁なり、人此れを得て以て心と爲す、卽ち人を愛するの仁なり、故に仁を行へば則ち吾心安くして天心喜ぶ、不仁を行へば則ち吾心安からずして天心怒る、夫れ天は肉眼を以て見るべからず、道理の眼を以て之を觀る、則ち得て見るべし、天得て見るべし、則ち敬せざらんと欲すも何ぞ得べけんや、古より善人君子誠敬を以て己れを行ひ仁愛を以て人に接す、境地の遇ふ所に隨つて職分の當然を盡くす、良心の是非を原ねて天心の默許に合するを求む、故に富貴を極めて驕らず、勳績を立てゝ矜らず、窮苦を受けて憂へず、功名を跌して沮まず、禍害を被り阨災を受くと雖も、而も快樂の心爲めに少く損せず、此れ豈に常に天眼前

に在るを見るに由るにあらずや、天道の信賞必罰を信ずるに由るにあらずや、若し、夫れ天を知らざる者は人と爭ふを知るのみ、世と競ふを知るのみ、智識廣ければ則ち一世を睥睨し、功名成れば則ち眼中人なく、願欲違へば則ち咄々空を書し、禍患へば則ち天を怨み人を尤む、自私自利の念心胸に塡塞して人を愛し他を利するの心、毫髮存せず、此れ豈に天を知らざるの故にあらずや是に由て之を觀れば、天を敬するは德行の根基なり、…何をか人を愛すと謂ふ、曰はく天を敬す、故に人を愛す、吾が同胞を愛するは吾が父を敬するに由る、誠に思へ我一人の身、人を離れて獨立する者に非ず、衆人と相依るに由つて吾生を安んずるを得るなり。今夫れ書籍の心靈を修養する所以の者は、衣食居室、百爾器用の身體を保安する所以のものは皆古今來衆人の心手に成る、而して我必用の者と爲るは則ち我れ他人に由つて得る所の利勝げて言ふべからず、我れ既に利を他人に受くれば、則ち我れ亦た利を他人

に施し、彼此相資けて以て福祉を造らざるべからず、是れ人の天職に奉ずるの道なり、人を愛せざらんと欲す、何ぞ得べけんや、……或は曰はん、天豈に愛すべからずや、人豈に敬せざるべからずや、曰はく敬愛離るべからず、天は人より尊きなり、故に敬を主となす、而して愛其中に在り、人は我れと同等なり、故に愛を主と爲す、而して敬其中に在り。（敬天愛人說下）

是れ實に彼れの根本主義であつて、敬天愛人を以て儒敎の主旨となし、自ら之を主張し、且つ之を實行したのである、尙ほ彼れの演說集を見ると、福德合一の說を述べてゐる、西洋の學問を修めてゐた人であるから、同じく儒敎の敎義を說くにしても他の儒者と異なつて理論整然たるものあつて、大に吾等の注意を惹くものがあるが、今之を詳細に敍ぶる閑がないから、以上代表的の一文を揭ぐるに止めて置く。

第二篇　陽明學派

第一章　江西學派

第一節　中江藤樹

慶長十三年（一六〇八）――慶安元年（一六四八）

一、學風

藤樹は陽明の學を唱道するの前、既に朱子學を考究すること年久しかりしを以て、全然之を棄てゝ顧みざることを爲さなかつた、即ち陽明を尊崇しても決して之れに偏する所なかつた人である、嘗て或人が陽明の說是にして朱子の說非なるかと問ふた時に、

それは世俗黨同伐異の私言にして至當の公議にあらず、蓋し程朱陽明同じく

吾が道の先覺者なれば、その結論異なるが如しと雖も、その道はこれ同じ。（大學考）

と對へてゐる、是を以て之を觀れば決して偏狹なる見解を有した人でないことが明かである、その取るべきは朱說も之を取り、其捨つべきは王子の說と雖も尙ほ之を排して憚らなかつたのである、彼れが朱王二子を評せる言に「朱子は文に廣過ぎたるついえあり、學者理學に近くして心法に遠し、王子は仁に過ぎ約に過ぎて異學悟道の流に似たることあり」とある、その公平なる態度以て知るべし、又曰はく、

今吾れ古本を是とする所は陽明に從ひ、經傳の差別は朱子に從ふを見て黨同の私なきことを知るべし、吾れは唯其至當に與せんと希ふのみ。

此くの如く彼れに在つては黨同伐異の念は少しもなく、學說の異同に拘泥するを以て愚の極なりと爲し、たゞ〳〵實踐躬行聖人の旨を體得することを努めた

のである、乃ち書生に示して曰はく、

竊に惟ふに今の人學を爲すは唯々記誦詞章のみ、これを以て吾が道の寄る所言語文字の間を越えず、愚嘗てこれを憂ふること深し、故に聖人立敎の宗旨を推本し、參ふるに白鹿洞規を以てし、條別かくの如くにして、これを楣間に揭ぐ、庶幾はくは一二同志とこれを固守力行せん。（藤樹規の跋文）

此の文は種々實行すべき、規約を設けてある後の跋である、藤樹の學は要するに實踐倫理が主である、その宇宙を論じ、又た神靈を論じて哲學的論議をなしてゐるのも、亦たその根柢を固くせんが爲めである、故に吾々は今彼れの學說を敍べるに當て、宇宙論の如き純哲學上の問題は暫く之を避けて、直ちに彼れが以て道德上の根本義とせる孝道に就て述べることにする。

二、學說

藤樹の學問はその事蹟に依て知らるゝ如く自ら二期に分る、卽ち朱子學に據

れる時代と陽明學に據れる時代とである、時期の長短から言へば勿論前期の方が長い、(三十七歳陽明學を唱へ、四十一歳歿す) 然しながら彼れ自身の本領を發揮してゐるのは後期に於てゞある、晩年に至つて朱學に據れる時代の學說を自ら訂正してゐる所を觀ても其眞意那邊に在るか知らるゝ、例へば「余嘗信二朱學一命二汝輩一專以二小學一爲二準則一今始知二其拘泥之甚一矣」といひ、或は「問答中、儒佛を論ずる所の如き、今之を讀むに其理正當を得ざることを覺ゆ」といへるが如き、何れも其朱學に據れる說の誤を自ら表白せる言である、實に彼れの學說は前半期に於ては破邪の方面が不十分であつた、後半期に於ける主張こそ、眞に彼れが顯正の意見として注意すべきである、今先づその孝道に就て述べよう。

(イ)　孝道論

孝に關する彼れの見解は、前後二期を通じて、終始一貫變ずる所なき大切なる思想である、即ち彼れは孝を以て世界の根本原理なり考へ、諸德の依て出づ

る根源こゝに在りと爲すのである、その著孝經啓蒙に孝無ニ終始一の條を解して

孝在ニ混沌之中一、而其生無レ始、推ニ之后生一而無ニ朝夕一、無ニ時非レ孝也、無レ所レ不レ在、無レ所レ不レ通、生生無終、須臾不レ可レ離者也。

といひ、或は莫レ大レ於レ孝の條を解して

孝德全體充三塞于二大虛一、大虛廖廓而無、莫大之義、不レ言而照照矣。

といへるが如き皆孝を以て先天的に世界に實在する根本原理となし、倫理道德の根源となす意見である、これに就て尙ほ翁問答の一節を讀まば、一層その意が明瞭となるであらう。

元來孝は太虛をもつて全體として、萬劫をへてもおはりなく始なし、孝のなき時なく、孝のなきものなし、全孝圖には孝の體段となして、てんちばんぶつをそのうちの萠芽となせり。かくのごとく廣大無邊なる至德なれば、萬事萬物のうちに孝の道理そなはらざるはなし。就中、人は天地の德、萬物の靈

なるゆへに、人の心と身に孝の實體みなそなはりたるにより、身をたて道をおこなふをもつて工夫の要領とす。身をはなれて孝なく、孝をはなれて身なきゆへに、身をたてみちをおこなふが孝行の總領なり。（翁問答卷之一）

實に藤樹に在つては、孝は廣大無邊の世界的實在にして、萬物之れに依て生じ人倫之れに依て立つものと考へるのである、而して孝は吾人の身に先天的に伏藏するものにして、其生長するに至つては、卽ち我が德性となり我が良知となつて顯現するのである、此の德性といひ良知といふも、實に我が父母遺體の天眞に外ならないのであるから、之を尊重してその發達養成に努むることが、卽ち我が父母を敬愛する所以であると論ずるのである、彼れ曾て或人に向つて大孝と小孝との區別を論じて小體を以て親に事ふるを小孝といひ、大體を以て親に事ふるを大孝といつてゐる、所謂小體とは身體髮膚のことで、大體とは仁義禮智卽ち德性をいふのである、乃ち曰はく、

身體德性、皆受二之父母一、而非三己所二私有一本皆父母也、故以二情愛一謹レ身、則順レ親亦以二情愛一、所謂順二情識之父母一者也、尊二德性一修レ身、則順レ親亦以二德性一所謂順二靈明之父母一者也、是以孝經以二嚴父配天一爲二大孝一、中庸以二明善誠身一爲二順レ親之道一。（藤樹先生遺稿卷二）

彼れは此くの如く我が德性を養ふを以て眞の孝道卽ち大孝となすのであるが、吾々の父母は又たその祖先の遺體を受けたるなれば、その本源は卽ち之を天地神明に歸せざるを得ない、故に我が父母を敬愛する狹義の孝が擴大されたる時は、卽ち天地神明を敬愛する所以であつて、所謂物我一體の境地に達するものとなした。

身之本父母也、父母之本、推レ之至二始祖一、始祖之本天地也、天地之本大虛也、擧二一祖一而包二父母先祖天地大虛一。（孝經啓蒙）

の說は、孝經の無レ念二爾祖一聿二修厥德一といふ條下の言である、或は翁問答には

更に之を詳細に述べて、

さて元來をよくおしきはめてみれば、わが身は父母にうけ、父母の身は天地にうけ、てんちは大虚にうけたるものなれば、本來わが身は大虚神明の分身變化なるゆへに、大虚神明の本體をあきらかにしてうしなはざるを身をたつると云なり。(翁問答卷之一)

といひ或は

わが心の孝德あきらかなれば、神明に通じ、四海にあきらかなるゆへに、てんちばんぶつみなわが本心孝德のうちにあるもの也。まよへる人は心は身のうちにばかりあると思へども、根本は心の内に生れ出たる身なり、しかるゆへにさとりたる眼には内外幽明有無の差別なし。(同　上)

と論じてゐる、孝を觀ること此くの如き、廣大無邊の意味に於てするもの我が儒學者中獨り藤樹あるのみ、藤樹は實に孝經を重んじ孝を說くこと亦た他に例

なき熱心を以てしてゐるが、我が國民道德の誇たる忠に就ては甚だ簡に過ぐる傾があるのは何故であらうか、蓋し彼れは孝を以て百行の基と觀るのであるから廣大無邊なる孝德は固より忠を含有するものと考へたのである、孝經啓蒙には、

忠本孝中之一端、故所㆔以事㆓家人嚴君㆒之敬、所㆓以敎㆑臣也、經曰以㆑孝事㆑君則忠、此意也、

といひ、更に翁問答を見るに、

君の恩は親の恩にひとしく、廣大なる恩德なり、忠臣は必ず孝子の門より出づるものなれば、孝德の明かなるものは必ず戰陳に於て武篇を勵み武功を立つるものなり。（翁問答卷之三）

と說いてゐる、これ即ち忠孝一本の旨意なること明かである、然かも彼れは孝を以てその根源と觀るが故に專ら孝を說くに意を用ゐたのである。之を要する

に彼れは孝を以て天地人三才の至德要道となし、學者の業たゞ孝を學ぶに在りとなすのである、而かもその孝なるものは本と我が身に伏藏するもの、卽ち身を離れては孝なしと說き、孝をはなれて身なしと說き、その極致は天地神明に事ふる所以の道となることを力說するのである。

(ロ) 良知說

彼れが陽明學を信奉して後ち天下に鼓吹したるは陽明の良知說である、今道德上の良知說を敍べんとするに當て、先づ哲學上及び人性論上に於ける良知の見解を示すことゝする。

(1) 哲學上の良知說

藤樹は宇宙論に於て一元的世界觀を有つてゐた、卽ち宇宙の本質は無極にして太極、至誠にして至神なるもので、今日の語を以て言はゞ世界精神とも稱すべきもので之を上帝と名付けてゐる、而して此の上帝を差別的方面より觀れば理

氣の二元である、理は心にして氣は其形である、其心卽ち萬物の性を成し、其形卽ち萬物の形を生ず、形は分れて種々異なるも、心は分るゝとも異なる所がない、換言すれば世界の差別相は其形を享けたるものなるが、其心を享けたる所より觀れば平等の相を示すものであると言ふのである、此の點は要するに朱子學の理氣論と同じで、世界は理の方面から觀れば平等であるが、氣に由て種々の差別相を呈するといふのである、然しながら藤樹は更にこの理氣二元を推究して遂に之を上帝の一元に歸せんとしてゐる、彼れが理と氣とを上帝の屬性の如きものと見做してゐる所はスピノザが實體（Substance）の下に物質（body）と精神（mind）とを置いてゐる考へと似てゐるが、藤樹はスピノザの如く精神と物質以上に別に實體を立てるのではない、寧ろ理と氣とが合して上帝といふ本體が成るものと爲すのであつて、理氣以外に上帝が在るといふのでない、卽ち同一の世界も差別として觀れば理氣となり、平等として觀れば上帝なりと言ふ

のである、

太虚天地人物一貫にして分殊す譬へば一樹の根幹花實枝葉の分あるが如し。(明德圖說)

心は統體の總號にして太極の異名なり、理氣を合し、性情を統ぶ、一身に主たりと雖も、其實は天地有形の外に通じ、其大外なく、其小内なし、卽ち造化の天我れに在るを得るものなり。(同 上)

以上の語に依て彼れの一元的世界觀は唯心論の立脚地に立つてゐることが知らるゝであらう、此の唯心論的見解が彼れの學說全體に通じて其所說を高尙幽遠ならしめてゐる。

彼れは此くの如くして上帝を以て世界の實在なりと認め、遂には此上帝を人格化して神と觀るに至り、一種の宗教的道德を唱へてゐる、卽ち上帝なる神は世界に遍在して、常に人類の善惡行爲を監視してゐるのであるから、吾々は上

帝に奉持するに持敬の念を以てしなければならぬ、而して彼れは此の上帝を通我といひ、吾人の心内に來り宿れる所のものを別我と稱し、此の別我は則ち吾が良知であると論ずるのである、即ち吾々の有する良知は上帝の有限的部分的顯現であるから、自反愼獨の工夫によりて、存養省察をなし、此の良知を擴充して行けば、遂には上帝と合體して内外の別を徹し、即ち聖人の境域に達し得るものと爲すのである。

(2) 人性論上の良知說

次に人性論の上から如何に良知を觀るかといふに、前述の如く宇宙本質の差別的方面は理氣二元であつて、其理は性となりその氣は形となる、然るに理に完全なるものと然らざるものとあり、氣にも亦た正眞のものと然らざるものとある、而して人類は此の完全なる理と正眞なる氣とに依て成るものである、即ち人間を以て萬物の靈長といふのは是れが爲めである、人類以外の生物も亦た

理氣二元より成るものたることは勿論であるが、不完全なる理氣より成つてゐる、卽ち人類の如き靈覺を有しない所以である、而して同じく人類中に在つても聖人とか凡人とかの區別があるのは、其の顯現の程度卽ち天より享けたる良知の發揮如何に依て生ずるのである、聖人は人の神明なるもの、凡人は聖人の未だ開けざるものである、然しながら人類は等しく同根より出づるものであるから其價値は同樣でなければならぬ、然らば君子小人の別あるは如何といふに持敬愼獨以て天賦の良知を十分發揮すると然らざるとに由るのである、所謂良知とは其本質は世界の實在であつて先天的に存在するものであるが、其經驗的方面から觀れば我が方寸中に在つて吾が行爲の規定を爲すものである、藤樹は此の我心の良知を佛敎の如來に例へてゐる、中川氏の母に與へた書簡中に「心の中の如來を拜したまはん事」といつてゐるのは卽ち良知の發見を勸めてゐるのである。

之を要するに彼れは良知の道德性を三方面から觀るのである、卽ち世界の本體としての良知は善惡を超越せるもの、經驗界に於ける良知は善なるもの、然るに良知が意慾の爲めに蔽はるゝ所あるから惡なるもの生ずと爲すのである、尙ほ藤樹の著書を讀むと種々の方面から良知を觀察して種々の異名を付けてゐる、例へば天理、本心、機、道心、眞言、誠、獨、明德、中、孝、天君、道、說樂光明等の如き、何れも良知を說明するに異なる立場から用ゐた名目である

(3) 道德上の良知說

以上述ぶるが如く、所謂良知は各人の先天的に具有するものであつて、其本質は神靈的のもので宇宙の實在である、故に良知は如何なる隱微のものと雖も常に知得して洩すことがない、之を欺かんとするも欺き得ざるものである、故に吾人行爲の善惡の標準は之を玆に求めねばならぬ、卽ち良知に率ふを以て善となし、良知に違ふを以て惡とすべきである、良知は實に善惡の標準であると

いふのが、彼れの意見である、一尾氏に答ふる書に左の如く之を言つてゐる、

善に難レ遷惡に墮落なされやすき旨、是れ意念の自欺故にて候。良知寂然不動の眞を御體認なされ存養被遊候はゞ、其病痛自ら除可申候。いかんとなれば良知卽善にて、良知に至れば善常に心の主たり、意念は時々往來の客慮なる故にて候、事の上にて善惡を御定被レ成、その適莫のすゝみより御體認なされ候故、善には難レ遷惡には牽れやすきと思召かと令察候、良知を善の本體として良知そむくを惡の本色とする精義を、よく御辨可被成候。（藤樹先生書簡）

蓋し彼れに在つては、善惡の標準は我が良知より外にない、事上の跡より善惡を判じてはいけない、卽ち動機を主として事跡卽ち結果を重視しないのである。田邊某氏に答へた書簡中にも「善惡の實體は心上にありて事跡にあらず、一念良知に至るを善とし、一念道に離るゝを惡とす」と論じてゐる、其倫理說に於て動機論者なることを以て知るべしである。

彼れは此くの如く良知を以て道德の根本となすが故に、人は常に此の良知を明にせざる可らざることを主張する、卽ち何人も此の良知を有するが故に、其良知を明かにすれば卽ち人皆以て聖人たるべし、然るに君子小人の別あるは、此の良知を發揮すると否とに由るのであると言ふのである、而して所謂惡の淵源に就ては意念を以て之を說明してゐる。

意者百惡の淵源也。(大學考)

と、卽ち意念を以て惡の起源と爲すのである、而して玆に意といつてゐるのは卽ち人心又は人欲のことで之を凡心ともいふ、此の意念には習心、好惡の執滯、是非の素定、名利の欲、形氣の便といふ五病がある、此の五病を除却するの工夫が最も大切である、五病にして除却されんか、卽ち滿腔子皆良知となり、眞樂惺々たるものがあるといふのである、彼れは此の良知及び意念の存在に就ては次の如き譬喩を以て說明してゐる。

一念良知にいたるときは、滿腔子皆善なれば、敵對すべき惡なし、一念道をはなるゝ時は、腔子裏皆鬼窟となつて、退治の主人權を失つて、征伐のいきほひなし、これにて善惡の合戰の覺あやまりなることを御辨可ㇾ有候、學術をしらず主人公の守なき方寸を辻堂にたとへ申候、辻堂は主人なき故に、あるときは貴人高位も腰を掛たまひ、或時は乞食非人もねおきの宿とし、又或時は狐狸蛇蝎の栖ともなる、その如く主人なき方寸には、往來寓居の者は、貴賤所を爭ふを善惡の合戰と御覺候かと推量申候、この寓居の者は、貴賤ともに羇旅のあだものにて候間、盡く御退出し候て、辻堂にたとへたる方寸の內に光明赫奕たる本尊ましまし候間、それを御さがし候て、此堂の主と御定候はゞ、何れのものも近付申間敷候、此本尊無上の威力ましますゆゑにて候。(藤樹先生書簡)

我が方寸元と虛なるが故に、良知にして此の虛を守らずんば意念忽ち來りて、之を占有すること、恰も守人なき辻堂が來往の途人が休憩に一任するに同じ、

故に吾々は意念の五病を除却すれば、心自ら虚明中正となり、虚明中正となれば卽ち良知の實體自ら呈露して、常に安樂坦蕩の人となることが出來るといふのである。

（八）　修養論

善惡の標準既に良知に在りといふのであるから、吾々修養の工夫は其良知を發揮することにあること自ら明かである、然るに前述の如く、意念の五病は吾人の良知を蔽ふものであるから、吾々は此の意念を絶滅しなければならぬ、然しながら藤樹に在つては彼のショーペンハウエルの如く意志消滅を唱ふるのではない、意志は之を消滅せんとしても不可能である、故に彼はかういつてゐる、俄かに此意を絶つべからず、徒に無くせんとしては無くならず。誠にするによりて無くなるなり。（大學抄）

實に人間生命のある以上は此の意志を絶滅することは出來ない、故に彼れは敢

て意志を絶つべしと言はず、意を誠にすべきを說くのである、彼れの修養論の根本義は實に此の誠意の工夫に在る、誠意の工夫には致知格物を要す故に曰はく、

格致は誠意の眼目、入德の門戶、聖となるの途轍、學者力を用ゐ、手を下すの實地、聖學の始をなし、終を成す所以なり。（大學考）

又た曰はく、

致知格物の外更に工夫なし、所謂天下第一等人間第一義の事別路の走るべきなく、別事の做すべきなくして易簡直截なること分曉なり。（大學解）

彼れは此くの如く、大學の致知格物を重視してゐる、致知格物の四字に就ては古來異說あるも藤樹の說く所は左の如し、

格とは正、物とは視聽言動思の五事、致は至るといふ義にして、知とは良知を指していふなり、天下の事萬端なりと雖も、五事を不ㇾ離、五事なき時は萬事息む、五事は萬事の根本、善惡の樞機也、故に五事皆良知に率つて、天下の

事善ならざるなし。（大學考）

之を要するに視聽言動思の五事を愼み正して、念々良知を離れず、意を誠にして、物欲の爲めに動かされずんば、則ち我が良知をして固有の光を發揮せしむることが出來るといふのである。

（二）　神道論

日本陽明學の特色は、何れの學者も皆神道を主として之を尊崇し、儒道はただその說明に過ぎないとする所に在る、藤樹は固より、後世に及んでは益々此の特色を發揮してゐる、今藤樹が唱道する神儒一致の思想に就て、その概要を述べて見よう。

彼れ以爲らく神道と儒敎とは其旨に於て自ら一致してゐる、神道は正直を以て體となし、愛敬を以て心となし、無事を以て行となす、而して此の正直、愛敬、無事の三者は中庸の所謂知仁勇の三德に相當してゐる、正直は知、愛敬は

仁、無事は勇である、彼れは更に此の知仁勇の三德を我が三種の神器と比較して左の如く論じてゐる。

神の代には未だ文字も無かりし也、象といふものありて、人の德を象どり、致をなし給へり、上古の書典なり。(中略)。夫れ心は形色なく聲臭なく、生々として遠近内外なし、然れども此心の中三の德あり、能く萬事萬物を照し、喩として辨へずといふ事なし、薄々淵泉にして、時に之を出すの德をば鏡を鑄させて之に象り玉へり、神明不測にして私なく、寬裕溫柔、慈愛の德をば、玉を磨かせて之に象り玉へり、人は萬物の長なれば、天下に恐るべきものなく堪忍の力强くて物を破らず、神武にして不殺の德をば劍をうたせて之に象り玉へり、唐土の聖人は之を知仁勇と名付け玉へり、天地の神道は倭漢同じ事なり、……我が朝の神皇の象と、唐土聖人の言と符節を合せたるが如し、故に神道に深き者は儒道を借らでも心法明に政敎備はれり、況んや異端をや、易

簡明白至れり盡せり。（神道大義）

神道大義（或は大意とも云へり）の書、或は以て熊澤蕃山の著と爲す人がある、然しながら假りに蕃山の著作と爲すも藤樹蕃山の二人が神道に樹する考へは同一である、蕃山は他の方面に於ては藤樹の說と異なる意見を懷抱せしも神道論に於ては全然藤樹の遺敎を奉じ尙ほ一層之を敷衍して神儒一致說に滿足せずして、遂に敬神卑儒の思想にまで進んでゐる、これは後ちに至つて述べるのであるから、今はたゞ藤樹の神道に關する意見の要旨を敍べるに止めて置く、此の神道尊崇の思想は、藤樹以後日本陽明學派の一大特色となつて發展して來たことは特に注意すべきである。

【著　書】

中江藤樹文集一册（有朋堂文庫第一輯）

（此書の內容は翁問答、鑑草、藤樹先生精言、文武問答、藤樹先生遺稿、藤

樹先生書簡雜著の六部を收む、最も學生に便なり、尙ほ日本倫理彙編陽明學派の部には翁問答五卷、藤樹遺稿二卷、藤樹先生書簡雜著一卷（三宅石菴校訂本）藤樹先生學術定論一卷（石河定源著）の四部を收載せるを以て此書に據ることも亦た頗る便なることを忘るべからず）

孝經啓蒙一卷

此書は甘雨亭叢書第五集に收載さる。

論語鄕黨翼傳三卷（寬保二年刊）

國譯孝經一卷（大正十四年杉浦親之助氏の孝經五種の一として刊行さる）

學庸解一冊（享保十三年刊）

論語解一冊（寫本）

藤樹の述作に係るものとして尙ほ此外に多々あるべきも岡田季誠の編纂せる藤樹先生全書三十五卷（寫本）及び明治廿六年の刊行に係る藤樹全書十卷（志

村巳之助齋藤耕三共編）あれば此等に據つて其大體を知り得べし、因に後者は多少の誤謬あれば前者に據るを可とす。

第二節　淵　岡　山

貞享三年（一六八六）

一、學　說

岡山は蕃山と違つて熱心に藤樹の學を信奉し、一意專心たゞ〳〵江西學の普及に努め、先師の遺意を祖述することを以て其任としたのであるから、彼れ獨得の思想といふものは、其遺著に依て見出すことは出來ない、然しながら藤樹の教義を自ら信奉して得たる實踐上の工夫に至つては見るべきものないではない、卽ち如何にもその教義を平易に親切に說いてゐる、所謂心學道話の類に等しい所が多い、今その遺著書簡集の中より、その重なる點を摘錄することゝする。

（イ）　致良知を以て學問の根本と爲す、

彼れは人生究竟の目的を以て致良知の三字に歸してゐる、所謂聖凡の區別も亦たこゝに在りと爲す、卽ち良知を致して本來の明德を發揮せるものが聖人で、舊習に拘へられてこの本然の良知を明かに爲し得ないのが凡人であるといふのである、固よりこれは藤樹學の精神であつて、彼れの首唱でないが、巧妙なる譬喩を以て之を說明する所、一讀、人をして首肯せしむるに足るものがある。

近日之御受用底御勢に被任所詮生涯の業と被思召候位、一段殊に存候、吾人致良知と申三字にて敎處も學處も不殘相聞候へ共、暫こまやかに手を下處を可申候者、吾儒聖人最初に一念の發起、天下利濟、萬々歲の人民を惠む心不淺より起たる由、先賢の御發明にて候へば、未學の者も此位を一つ期事に申、然も畢竟は自己の安堵をつゝまる事に候、自己安堵なれば自萬物を愛敬する心起る事に御座候、譬へば我身に甚疼痛するときは他人の痛を省事疎也、自己痛なきときは他人の看病不疎略かことく、自己安堵なれば天下の憂を常に

不ㇾ忘たとへ申もをろか第二義と可被思召候、先づ右の手段を主意として心術を勵み、若人欲起り良知をくらまし候時は、見解對算、其病によりて退治可有之事勿論に御座候、其中欲と申にも自然なる所御座候、學者誤て其自然をも不辨、一向に絕んと技倆を以て勵み候故、還而進むことなく退屈仕義誠に勿體なく事に御座候、……初より一念萠すを甚人欲と厭候へばいつまでも凡心不免と、我身を見限り却て進むなく墮落仕ものかと存候、時の勢と心得て其處に念不ㇾ滯は心上の障りに不成ものに御座候。（中略）本來明らけき空には月の在なれば蹈まかふべき道無之候へ共、目を蔽雲有故に迷の甚く候、聖域と凡夫之違は舊習と全不染との分ちのみ、然は色々の習も能辨知て其根を斷而已に御座候。（岡山先生書簡卷上答都筑氏）

岡山書簡集は僅かに寫本となつて稀れに傳はつてゐるので、誤寫も隨分多いことゝ思はれる、右の文中にも二三脫字などあるやうであるが大體の意味が分る、

而して如何にも實際の修養に苦心してゐたことが推察出來る、書簡集を通讀すると君子小人の區別に就ては、君子は世の治亂を愼みて軀殼を忘れ、小人は軀殼に滯つて世上の治亂を忘れるものであると論じ、或は世上の學者を評して「今倩々學者の器量を考ふるに初學より世を憤る程の學者は稀にして、皆一身の受用と計成候故少合點參候程にかしこく成候て便利逞く、しかも樂を求め候故少かまへに成」とて大に學者の不見識を笑ひ、苟も聖學に志すものは初より天下國家の事を念頭に置かざる可らざることを論ずるなど、觀るべき說多きも、要は藤樹學を敷演してゐるのであるから、今はこれ以上述べることを省略し、直ちに日本陽明學者として最も有名にして、且つ日本の學界に貢獻する所多大であつた熊澤蕃山の說に移つて、之を說明することにしよう。

第三節　熊　澤　蕃　山

元和五年（一六一九）——元祿四年（一六九一）

一、學　風

蕃山の學風に就ては、拙著「日本儒教概説」に於て稍々詳しく説明して置いたから、こゝでは要點のみを記述することにする。藤樹の歿後、江西の學は二派に分かれて來た、卽ち自反愼獨の工夫に力を用ゐ、專ら個人道德の方面を高調する淵岡山の一派、之を省察派と稱する、他の一は專ら國家社會の經綸を主とし、公共的倫理を唱道する蕃山の一派、之を事功派と稱するのである、岡山は藤樹の直系ともいふべきものであるが、蕃山は江西の學を出でゝ更に事功の一派をなした人であるから、時に江西の學を批評して、敢て忌憚する所なかつた、その著集義和書卷十一には、その功過を論じて、

尤も少しは益もあるべけれども、害もまた多し、しかと經傳をも辨へず、道の大意をもしらで管見を是とし、異見を立てゝ聖學といひ、愚人を導くも出來ぬ、江西以前には此弊なかりしなり。

と言つてゐる。その江西學に慊焉たる所ありしは以て推知すべきである。要するに彼れは一流一派に拘泥することを好まなかつた。從つて門人を養ふて自ら師を以て任ずるが如きことは、最も惡む所であつたのである、「學は一流に拘泥し徒らに異説を立つべからず、要は大道の實義を心得たらば宜しく時處位に應じて之を國家經綸の上に施さゞるべからず」といふのが其根本主義である。殊に時處位といふことは彼れの最も注意する所であつて、藤樹の説を駁して、而かも自ら藤樹の志に反せずと辨明してゐるのも、亦た全くこの時處位を重んずる精神があつたからである。彼が儒敎を解する上にも、常に我が國體觀の上に立つて論じ、佛敎を評するにも常にこの精神を基調としてゐることを忘れてはならぬ。彼れはたゞその自ら住む所の國家社會に對して、如何にしてその一員たる本務を盡すべきか、如何にして吾等の國家を向上發展せしむべきかを考究したのである、故に自ら陽明學者或は心學者などゝ稱せず、又た稱せらるゝこ

とを好まなかつた。

拙者をも世間には心學者と申と承候、初學の時心得そこなひて、みづからまねきたる事に候へども、心學の名目しかるべからず存候、道ならば道、學ならば學にてこそ有べく候へ、いづれと名を付かたよるはよからず候。漢儒の訓詁ありたればこそ、宋朝に理學もおこり候へ、宋朝の發明によりてこそ、明朝に心法をも說候へ、明朝の論あればこそ、數ならぬ我等ごときも入德の受用を心がけ候へ、論議は次第にくはしくなりても、德は古人に及がたし、後生の者、心は本の凡情ながら文學の力にてたまたま先賢未發の解を得ては、古人の凡情なき有德をそしり申事勿體なき義なり、一の不義を行ひ、一の不幸をころして天下を得事もせざる所は朱子王子かはりなく候。拙者世俗の習いまだまぬかれずといへども、此一事は天地神明にたゞしても古人に恥べからず。（集義和富卷第一）

天地神明に誓つても、其學の公平を期する所、如何にその抱負の大なるかを知るべく、學問發達の順序を辨知して先賢の遺德を追尊せんとする所、彼れが大處に着眼して敢て一小學派の圈內に跼蹐するを屑しと爲さなかつた態度を想ふべきである。取るべきは朱說も之を取り捨つべきは王子又は藤樹の說をも斥けんとするのである。乃ち曰はく、

愚は朱子にもとらず陽明にもとらず、たゞ古の聖人に取て用ひ侍るなり。道統の傳のより來ること朱王共に同じ、其言は時によつて發する成べし、其眞にをひては符節を合せたるが如し、又朱王までも各別にあらず、朱子は時の弊をたむべきがために、理を窮め惑を辨るの上に重し、自反愼獨の功なきにあらず、王子も時の弊によつて自反愼獨の功に重し、窮理の學なきにあらず愚自反愼獨の功の內に向て受用と成事は陽明の良知の發起に取、惑を辨するの事は朱子窮理の學により侍り。朱王の世學者のまどひ異なり、地を易ば同

じかるべし。(同書卷第八)

朱王二子、皆時の弊を矯めんが爲めに說を立てられたのであるから、今日から觀れば何れも斯道の先覺者として崇敬すべき人である。決して朱王の一方に偏してはならないといふのである。故に「愚は朱子にも取らず、陽明にも取らず唯々古の聖人に取りて用ひ侍るなり」といふ、この語は明らかに旣に復古學の精神を言ひ表はしてゐる。仁齋、徂徠の先驅をなせるものと言つてよい。然しながら蕃山の經學に於ける主張は、徹頭徹尾陽明主義の立場を離れてゐない、「道理本行は我心なり、經傳は我心の道理を解したるもの也、經傳をよみ得て悅ぶものは我心の道理を見得たればなり、我心の道理は無レ窮なり、書中の一章を肝要として止るべからず」(集義和書卷四)といふ所など全く陽明子の敎義を祖述せるものである。或は又た或人が先生の敎に、廣く書物を讀めとあるが、如何程の書物を讀むのであるかと問ふた時に、彼れは、

予が廣くと申候は、無極の理に體して心をこれのみとゝどめざるを申候、古の書のすくなかりし時に却て聖賢多し、經傳は貴殿の心次第に孝經大學中庸にてもたりぬべし。論語孟子にても足ぬべし、五經にてもたりぬべし、其中十が七八までも解し殘すとも妨なく候、要は書中にあらず、我心にあり、大意を得時は天下に疑ひなし、何ぞ書の文義を事とし候はんや。(集義和書卷四)と對へてゐる。以てその陽明學の神髓を發揮せる學風なること推知すべきである。

之を要するに、彼れは陽明主義の立脚地より、凡て學問を實地に應用せんことを目的とした、卽ち事功を重んじたのである、彼れの著書は一二の短かい文章を除いては、悉く假名書であるのも亦た彼れの主義理想の然らしむる所である、曾て或人が漢文と假名との優劣を論じて漢文にて書けばたとひ内容が淺くとも立派に見えるが、假名書であると、如何に深遠なる理を說いてあつても、

つまらぬ本と思はれると言つて、暗に彼れの著書をも漢文で書くやうに勸めたが、其時彼れの答へに、

それ道は聲もなく、臭もなくして存せり、思に及がたし、思は言にのべがたし、言は書に盡しがたし、漢字の文章にふくめる深理は和字の假名書にうつしがたし、しかりといへども學者聖經賢傳の吾心の註釋なる道理を失ひ心を外にして經傳を見時は、經傳本となり、吾心末と成ぬ、故に經傳の文の高く深きをもてあそび其理を口にのぶるばかりにて心を失へり、文の奥義も口耳の學となりて齊家治國の用をなさゞる事久し、是正心修身の實學にあらざればなり、假名書の直に理を發明して人心のまどひを解、人情時變に通じて心思を内に向はしめ、齊家治國の用にたよりあらんは、時にとりて益すくなからず……和書たりといふとも人生日用の受用に益あり、齊家治國の情に便あらばあなどるべからず。(集義和書卷九)

といつて、假名書を輕侮する理なきことを論じ、大に實學、日用の學を鼓吹してゐる。尙ほ孝經外傳には同じ理由の下に「和國に生れたれば和の風なり」といつて、日本人として假名を以て書するの當然なることを論じてゐる。蕃山の意見に從つて、德川時代の學者が其研究の結果を平易なる假名書で發表してゐたならば、如何に世を益し、學を進むるに便利であつたであらう、蕃山といひ、益軒といひ此の點に於ては、儒者として稀に見る卓見家である。蕃山の議論は悉く實際問題に觸れてゐるのも亦た、かういふ實學主義の人であつたからである。是れより少しく其學說に就て述べて見よう。

二、學　說

蕃山の學問思想は藤樹の說に胚胎してゐることは勿論であるが、彼れは飽くまでも實用を主とし、且つ人情に重きを置いて說をなしてゐる、「人情をしらざれば五倫の和をうしなふ事多し」（源氏外傳卷一）とて源氏物語の類をも熱心に

講じてゐる位である。その名著集義和書及び外書ともに之を讀んで一種の處世術を敎へられる感じがするのも、彼れが飽くまでも人情本位の道德論をしてゐるからである、且つ前節既に述ぶる如く。彼れは常に日本人としての立場を深く自覺して論議をするのであるから、その所説全然日本主義を以て一貫してゐる。藤樹の論と重複する所あつても、亦た別個の趣がある。彼れは要するに思想家としてよりも偉大なる政治家とし觀るべき人である。その爲政家としての立脚地より論ずる所甚だ傾聽に價するものが尠くない、今僅かにその二三の箇條に就てこゝにその說を叙べるのであるが、彼れの主義主張はこれに依て大體窺はれるであらう。先づ藤樹の最も重んじたる孝道に就て、彼れも亦たその說を祖述してゐることから紹介しよう。

（イ）　孝道論

孝道は藤樹學に於て最も重んずるものなることは既に藤樹の學說の條に於て

敍べた通りである。今蕃山の說を見るに、彼れも亦た大に孝道を重んじ、孝經を尊び、孝經小解、孝經外傳或問等の書を著はしてゐる、彼れは先づ仁孝の一致を說いて曰はく、

孝と仁と別なるにはあらず、ともに心の德なり、仁を體とし孝を用とするは先天の理のごとし、孝を體とし仁を用とするは後天の義のごとし、故に孝を德の本とする時は仁義禮智も孝の條理なり、たゞ人性のみならず、元亨利貞の天の四德も孝の時也。（孝經外傳卷上）

仁孝の一理を說き、孝を以て諸德の根本となし、孝を以て天地萬物の本根とするの說は言ふまでもなく、藤樹の思想より得來つたものである。集義和書には更に詳しく之を述べてゐるが、全く藤樹の孝論を敷衍したものである、曰はく

孝は天地未畫の前にある大虛の神道なり、天地人萬物みな孝より生ぜり、春夏秋冬風雷雨露、孝にあらざるはなし、仁義禮智は孝の條理なり、五典十義

は孝の時なり、神理の含蓄するところを孝とす、言語を以て名付いふべからず、しゐて象を取て孝といふ、孝の字老子の二を合て作れり、文字の傍偏となす時には、畫をはぶきしなり、天地いまだひらけざる大虚の時には、理を老とし氣を子とす、天地すでに開けては天を老とし地を子とす……此理を以て萬事萬物におしてみれば孝の理なくして生ずるものなし。(集義和書卷八)

これ全く藤樹の言と、一句一字も相違せざる言である、彼れは又た孝を以て天地萬物一體の理となし、先づ我が身を父母の身として親子一體の考を有たねばならぬとして藤樹の孝論を祖述してゐるが、尙ほ進んで此の孝の神理我が心に受用する所より言へば愛敬卽ち是れであると說明してゐる。

孝は愛敬の心なり、孝の字愛敬の象あり、上より見れば老者の子をいだける象にて愛なり、下より見れば子の老者にしたがへる象にして敬なり、故に孝終始なしとは、愛敬の心亡びたる儀なり、上一人より、下、衆人にいたるま

で愛敬の心少もなく成ては災害いたらずと云事なし。(孝經小解)

この語は孝經の「故自二天子一已下至二于庶人一孝無二終始一而患不レ及者未二之有一也」の句を解したもので、集義和書に於て言ふ所とその旨同じであるから、孝經小解の文を引用したのである。是れより彼れは上天子より將軍に至るまでも愛敬の心を失ふてはならぬと實例を擧げて之を論じ、況んや士庶人に於ては愛敬の心を失ふて其身を保つことは出來ないと說いてゐる。其孝を以て道德の根本となすの意知るべしである。而して忠孝一本の敎義に就ては、藤樹よりも一層詳細に之を述べてゐる、卽ち彼れは孝經に所謂身體髮膚を毁傷せざるが孝の始であるといふ意義を解して左の如く說いてゐる。

身體髮膚の輕きを擧げ給へば心性の重きは言はずして其中にあり、毁は德をそこなふ也、傷は身體をやぶる也天地の性人を尊しとするものは心に知仁勇の明德あるゆゑ也、人性身體父母全して吾を生ず、故に吾全して終に歸する

は孝也、これ人生の常なり、變にあひて心性身體二ながら全くしがたき時は身體をやぶりて心性を全くするを孝とす。志士仁人は身を殺して仁をなすものこれ也、義理の行をかき身をはづかしめ生を貪り死を怕るゝは人の至貴たる明德くらきもの也、禽獸にして存するものなれば大不孝也、故に曾子も戰陳に勇なきは孝にあらずといへり。親に事ふる愛敬の心君の難に逢ては變じて大勇となる也。(孝經外傳)

忠孝一本の教旨を、說き得て巧なりと謂ふべし。忠を以て單に孝德の一部分と見る從來の說を排し、忠却て是れ孝の本なることを說き、心性の德に依て孝を說く所、實に彼れの孝論に於ける特色であつて、其の飽くまでも日本精神を以て一貫せる主義なること以て察すべしである。

(ロ) 神道論

蕃山の學說に於て最も注意すべきは日本主義の道德を高調してゐることであ

る。此の點に關しては拙著「日本儒教概說」に於て既に述べたことであるから、今茲に彼れの神道論のみに就て考察して見よう。彼れは神道を尊崇し常にその振興に關して意を用ゐたことは言ふまでもないが、所謂俗神道者流と其觀る所を異にしてゐる。神道とは何ぞや、彼れ曰はく、

今世間に神道といへるは昔の社家の法なり、神道にはあらで神職の人の心用ひの作法なり、それを潤色して神書とし神道とす、日本紀を第一とすれども漸々陰陽大極の皮膚をいへるのみ、其外の祓などは神代上下にも及ばず、本邦の神書とすべき書は見えず、唯三種の神器のみ此國の神書なり。（大學或問）

彼れが神道と稱する者は卽ち我が惟神の道にして祈禱祓を主とする所謂巫祝の類を指すものでないことが是れに由て知られる。故に世人の以て神書と稱する書物は彼れの信用する所のものでない、神書は三種の神器の外なしとするのである。蓋し我が國上代に於て文字がないから、玉の溫潤にして光明なるを仁

德に象り、鏡の靈明にしてよく善惡を分かつを智の靈明に象り、劒の剛にして斷制するを以て勇の神武にかたどつたのである。文字の代りに此の三器を以て智仁勇の三達德を示し給ふのである。この至易至簡なる教が卽ち我が道德學術の淵源であつて、これこそ神道の經典である、一切の道德教訓も皆これより出づるのであるといふのである、彼れはこゝに於て、神儒の一致を唱へて曰はく、

此三種の象を注解して經傳とせばこれに過たる神書あらじ、三種の注解は中庸にしくはなし、唐土の聖人日本の神人その德一なり、其道不二なり、故に其象其書符節を合せたるが如し。(同上)

といひ、集義外書の中にも「三種の神器の註解は中庸の書にしくはなし、上古の神人出たまふとも、此書を置て別に註し給ふべからず」と論じてゐる、卽ち中庸を以て我が神書の註解書と見做し、神儒の道、毫も異なることなきをいふ

のである、而して彼れは更に世間の所謂神道なるものを斥けて次の如く言つてゐる。

世間に神道といへるは一事の神道にて全き事にあらざる事を知るべし、道は天地の神道なり唐土の聖人の道、本邦の神人の道皆天地の神道なり、本邦にて神といへるはかゞみの中のかを略してかみといへり、鏡の如く智明かなる人といふ意也唐土にても聖人を神聖といへり、聖人には神明の德あれば也：……神と人とを兼たるものは聖人なり。(同上)

是れ明らかに神儒二敎の一致を唱道するものである。此くの如きは惺羅以來我が國儒者の常に唱ふる所であつて、別に彼れの新しい考といふことは出來ないが、彼れの神儒一致說は神道本位の說で、從來の如く儒敎本位の說とは其旨趣を異にしてゐることを忘れてはならぬ、換言すれば從來の說は尊儒思想の立脚地に於て一致を說くのであるが、蕃山のは寧ろ敬神主義の立脚地に於て之を

唱ふるのである、卽ち我が惟神の道德は儒敎に優るものであるが、其敎義簡に過ぎて今日に適せず、之を今日に盛ならしむるには儒敎の敎義を借りることが必要である。儒敎の文字を以て說明しなければ我が神道の眞義を明らかにすることが出來ない、然るに俗神道家は儒敎を借りることを憚るから所謂神道家が無學にして斯道を今日の世に闡明することが出來ないのである。故に儒敎を借りることが今日に於て最も急務たることを論ずるのである。乃ち曰はく、

況や三種の象は孔門傳授の心法なり、是を本として神道を興起せんに殘す事あるべからず。(同上)

と、神儒一致を唱道するも、飽くまでも神道本位であることが是れに依て知られるであらう、尙ほ孝經外傳を見るに、日本を神國といふ所以を說明して、左の如く神の意義から之を論じてゐる。

神といふは古の賢き人也、鏡のごとく智明らかなる人といふ心也、鏡の中の

かを略してかみといへり、是を中略といふ也、やまとことは三字を一字略していへること多し、鏡の美惡をうつすこと善惡邪正を照してまどはざる人を神といへり、日本を神國といふとてきとくふしぎをいふにあらず、天照皇より五代は神聖の德おはします、其神人の敎へ開き給ふ國なるゆゑに神國といへり、上古はもろこしより日本を君子國といひし也、神國君子國同じ道理也。（孝經外傳上卷）

是れ亦た俗神道家が、妄りに我が國を神國と稱して奇怪不思議の言を爲すことを誡めたのである、而して儒敎の所謂君子の德を備へたるもの是れ我が國の美風なることを言ひ、聖人敎義の實德我れ既に備ふることを說かんとするのである。之を要するに蕃山は神儒二敎の一致を說くも、究竟する所我が神道を以て我が國民道德の準繩となさんとするのである。最も明白に之を論じてゐるのは集義外書である。

たゞかす事不ㇾ能かる事不ㇾ能ものあり、日本の水土によるの神道はもろこしへも戎國へもかす事あたはず、かる事不ㇾ能唐土の水土によるの聖敎も又日本にかる事不ㇾ能かすことあたはず、戎國の人心によるの佛敎も又しかり、文字器物理學はかるべしかすべし。（集義外書卷十六）

卽ちその眞意は敬神卑儒の思想なること以て知るべきである、彼れは何事に於ても、我が民族性と國土及び環境を正しく理解して、それに依て自己の見解を決定せんとするのである、神道はこの意味に於て我が國道德最高の標準であらねばならぬといふのが彼れの意見である。次の内答は最も能く彼れの眞意を言ひ表はしてゐる。

一、再書略。中夏の聖人を日本へ渡し候はゞ道學の敎いかゞ可ㇾ被ㇾ成候や。返書略。儒道と申名も、聖學と云語も、被仰間敷候。日本の神道を崇め王法を尊て廢れたるを明かにし、絕たるを興させ給て、二度神代の風かへり可ㇾ申

候。からめいたる事は、何もあるまじく候。國土によつて風俗ありといへども、天の神道は二なく候へば、儒といひ佛といひ、道と云名を、其國ならぬ國へ持來る事は、道をしらぬ者のしわざにて候。（集義外書卷二）

（八） 佛教及び吉利支丹に關する論議

蕃山は常に爲政家の立場より宗教を觀て細心の注意を拂つてゐる、彼れが神道を唱へ儒教を鼓吹するも、是れに偏する時は大に弊害あることを考へてゐた、政治論の中に四つの害となる事柄を指摘してゐるが、その三ケ條に左の言をなしてゐる。

儒をこのみ佛を好み神をこのむ、此三つは善なれどもかたよる時は政に害あり。（大學或問下卷）

神儒佛三教に對して、此くの如き見解を有する彼れは佛教に就て、如何なる考を有つてゐたのであらうか、蕃山存生の時分世間から佛敵と言はれた彼れであ

るから、世或は彼を以て排佛家の如く觀てゐるが、それは未だ彼れの眞意を知らぬからである。是れに就て嘗て或人が彼れに向つて天下の佛者は貴老を佛敵といつて貴老を害せんとしてゐるから注意せらるゝ樣いつた所が彼れは其人に對して、

世間、佛者多きこと千萬を以てかぞふべからず、根を堅くせしこと千歲にあまれり、世中佛者の有ならざるはなし、予が如き不德の獨夫、五尺にたらざる一身を以て、世間の佛者の敵となり、佛法を滅すべきか、つら〳〵おもふに今の佛者、人間世にをひては、まだ盛勢を失はずといへ共、天命はすでに滅亡におもむけり、その故は物皆盛衰あり、たとひ佛者あしからずとも、盛なることときはまらば、など變る時なからんや、しかるに今の佛者、不仁無道なること凡俗に越たり、奢も又極りぬ、これ天命の絕たる所なり、故に予が如き不德の獨夫をも、彼みづから敵とするなるべし云々。(集義外書卷三)

蕃山自ら佛者を敵とするにあらず、佛者自ら蕃山を敵とするなりといふ、その言裏、自ら彼れの佛敎に對する考が窺はれるではないか、彼れは常に破戒不法の僧を攻擊した、然しながら高德の僧は之を尊敬した、深草元政上人は彼れの親友である、ともに儒佛の墮落を嘆息したことは先哲叢談にも出でゝゐる、彼れは好んで佛敎そのものを攻擊したのではない、寧ろ眞の佛敎の興起を希ふてゐたのである、儒者が徒らに佛者を攻擊することを彼れは常に厭ふてゐたのである、左の言以て之を證すべきである。

此頃東より來候學者の申候は、世間に儒學をする人は、佛者をそしらずといふことなし、市井の中にても、聲をあげて甚退くれども佛者もこれを敵とせず、佛を退るの名もなし、先生はむかし東にをゐて、度々講明議論し給ふを聞しにも、佛をそしり給ふことなし、人のそしるをもとゞめられしなり。しかるに天下の佛者を退るの罪をば先生一人に歸する事は何ぞや云々。（外書卷

一）

とて之を問へるに對して、彼れはたゞ自分の虚名が、自然さういふ風になつたのであらう、自分は獨り佛者のみならず、凡て他を誹ることをしないといつてゐる、實に蕃山は他の學派の缺點をいふことを好まず、已むを得ざる時はたゞその道理を明らかにするのみで人の名を隱すのが例であつた、故に江州の龜泉庵の老僧などは大に蕃山の偉大なる人格に推服したといふことである。又曾て或人は儒道おこらば佛法は滅亡するであらうかといふ質問をした時、彼れは之れに答へて、儒敎が振興すれば佛法もむかしにかへりて改善せらるゝであらうとの意見を述べてゐる、又た或人が今日の佛敎は實に繁昌してゐるが、それでも滅亡の時があるであらうかと問ふた時に、彼れは今自分は眞實の佛者に成りかはつて之を觀ると今の佛敎は繁昌してゐるものと言へない、墮落してゐるのである、それであるから一時は衰微するかも知れぬが、それが結局今日の繁昌

よりも佛者の反省を促して眞の佛敎の爲めには善いことである、佛敎は決して滅亡するものでないといふやうな答をしてゐる、以て蕃山の佛敎に對する眞意の在る所が窺はれるであらう、而已ならず彼れは時に儒敎よりも佛敎の方が日本の水土に相應してゐるといふやうな意見を吐露してゐる。

近頃日本の水土により、山澤草木人物の情と勢とをみれば、易簡の善ならではあまねからず、長久ならざる道理あり、佛法は戎狄の異端ながらも、日本の水土時節に相應せる所有。是故に千餘年に及で、かく行はるゝなり、近年は佛法の世にかなへる易簡を失ひて、奢きはまり侍れば久しかるまし、しかれども、天より奢をそかれ、堂寺法師等すくなく出家らしく成て又々久しくつゞき侍らん、今の儒學の樣子にては、朱學も王學も治道の助とはなり侍らじ云々。(外書卷十六)

或は「佛法は水土にかなふ處あり儒法は水土に應せず」(外書卷十)といつて

ゐる、かくの如く佛教の盛衰を氣にしてゐる所など、決して排佛家の言と見ることは出來ない、寧ろ大に佛教に同情を有つてゐる人と觀なければならぬ、今の僧は盜賊なりとて之を痛罵するのも亦た護法の眞心より發せられたる言と觀るべきであらう、堂寺の多きと出家の多きとを以て佛教の繁昌と觀ることが出來ないといふのが彼れの意見である、彼れは儒教に於て孔子の當時に復活せんことを主張すると同樣に佛教も佛在世の昔に復らなければ眞の佛教再興しがたきことを屢々論じてゐる、蕃山の佛教觀には今日の佛教界も大に反省せしめらるゝ幾多の議論が含まれてゐるが、今はたゞその一端を敍するに止めて置く。

次に切利支丹に就ては彼れは如何に考へてゐたかといふに「吉利支丹は人心の惑と民の困窮によりて法を廣むるものなり」（大學或問）といつて頭から之を邪宗と觀てゐたようである。天下文明の教ありて人心正道に向ふときは之を弘めんとしても弘がるものでない、今日之れが弘まるのは即ち儒佛二道の教地に

墜ち、人心の向ふ所を知らないからであるといつてゐる、然しながら又た一面に於てはその長所を認めてかういふことをも言つてゐる。

後世と輪廻を立ていふときは、吉利支丹は後生の手だても、佛者よりは上手也、理を云事も、佛道よりはまされり、佛道の力を以てふせぐべき事かたし。(外書卷十)

布教の方法に於て佛者よりも巧妙を極めてゐるといふのは、當時幕府が所謂寺請の制を以て之を禁ぜんとするの愚を笑ふのである、「蛇のみちはへびがしるといへる諺のごとく吉利支丹ならでは吉利支丹は知らずといへり、今の寺請は何の用にもたゝず、殊の外なる國々の費也」(大學或問)といつてゐるのも是れが爲めである、要するに今日の有樣では儒佛ともに吉利支丹の爲めに壓倒されてゐることを痛嘆して儒者佛者の兩方面に反省を求めてゐる、以上述ぶる所によつて蕃山の神儒佛三敎に對する考が略ぼ推知することが出來るであらう。彼

れは殆んど三敎一致の如き口吻を漏らしてゐるが敢て三敎一致とは言はない、「佛者の不仁と儒者の理滞と、共に神道をなみする事は一也」（外書卷十）といふ所より觀ても、儒佛の二道はともに我が神道を補翼するものと考へてゐることが分る。彼れは儒敎に對すると同じく佛敎に對しても、釋迦もし日本に生るれば神道に從ふべしと言つてゐる。其日本主義の精神なること益々明白である、蕃山の政治論、敎育論等尙ほ述ぶべき點少なくないが、暫くこゝに筆を擱いて次の節に移ることゝする。

【著　書】

集義和書十六卷

（書簡五卷、心法圖解一卷、始物解一卷、義論九卷）

集義外書十六卷

（削簡三卷、脫論七卷、中庸九經考一卷、窮理三卷、雅樂解一卷、水土解一

卷）

蕃山の思想を知るには此二書は是非とも讀まざるべからず、外書は僞書なりとの説（横井小楠）あれども、外書刊行の序文に「外書にいたりては經世治敎の事にわたりて、頗る世の忌諱をおかせることあればにや、その徒秘してこれをつたへず、故にみるものすくなし。」とある如く和書よりも却て面白き論あり、僞書と疑ふは和書と重複する所まゝあるが故ならん、然れども決して僞書にあらず、學者としての蕃山は之を和書に據つて知るべく、爲政家としての蕃山は之を外書に依て窺ふべし、兎に角假名書にて讀み易く、處世上の訓戒を得る所多き有益の書なれば、是非一讀すべき有用の書なることを特に附記して置く。

大學或問二卷（嘉永二年刊行の單行本最も弘く行はる、尙ほ此書は日本經濟叢書第一卷及び日本文庫第五編に收載されたり）

貞享四年十月六十九歳の時封事を上りて忌諱に觸れ、禁錮されたること傳

にあり、此書卽ち其時の封事なりと謂ふ、故に門人改めて（經濟辨）或は（經濟拾遺）と稱せり、題して「治國平天下別卷」といひ、卷首には「和漢に通ずべからず。古今にわたるべからず、今を救ふ活法なり、其人を待て行はるべし、故に秘して不レ傳」といふ、以て此書の性質を推知すべし、且つ此書は彼れの著述中他と異なりて隨筆體にあらず、章節を分かつを以て之を觀るも殊に重要なるものなること推知すべし。

孝經外傳或問三卷（寫本）

古河幽閑中の作、大學或問の補遺とも謂ふべきもの、是れ亦た著書中重要なるものなり。

孝經小解二卷（天明八年刊）

（漢籍國字解全書第一卷に收めたり）

大學小解一卷（寛政八年刊）

中庸小解一卷（或は二卷二册）
論語小解八卷（或は十卷五册）
女子訓二卷（日本教育文庫第五編女訓篇に之を收載す）
源氏外傳五卷五册（寫本）
（國書刊行會本、三十輻の中に此書を二卷として收載すと謂ふ、予の所藏本は五卷五册なり、未だ彼此照合するに遑あらず）
蕃山の遺著はこれに盡きたるにあらざるも、他は之を略す。

第四節　三重松菴と三宅石菴

延寶二年（一六七四）――享保十九年（一七三四）
寬文五年（一六六五）――享保十五年（一七三〇）

蕃山以後の陽明學者として著名なる人は餘りない、三重松菴、三宅石菴、北島雪山の如き人々が世に知られてゐるのみである、三輪執齋の出るまでは陽明

學は一時不振に陷つてゐる、北島雪山には別に陽明學に關する著書あることを聞かないが、三重松菴と三宅石菴には各々その遺著が傳はつてゐるからこの二人の學說に就て簡單に述べることにする。

三重松菴の著「王學名義」二卷は寶永七年その門人豐滿敎元(江州八幡の人)に依て刊行されてゐる、卷尾松菴の記に據れば、元來この書はその門人村上明亮といふ十七歲の少年の爲に陽明學の大旨を述べたもので、通俗平易を主としてゐる、今その內容を見ると、上卷には致〻良知〻、父子有〻親、君臣有〻義、夫婦有〻別、長幼有〻序、朋友有〻信、孝といふ七ヶ條に分つて述べ、下卷には大學說、仁義禮智信、孝弟忠信、心性情、理氣、知行合一、四句敎法の七箇條に就て述べてゐる、今その卷頭の致良說を見るに、彼れは學問の第一義は致良知に在りとなし、良知を以て我が心の神明なりと說き、又た萬古不易のものと爲し、其良知を失はざるものを以て聖人又は賢人なりと論じてゐる、曰はく、

此三字は學問の肝要にて、聖人の人を敎たまふ第一義なり、良は本然の善なりとて、根本より善なるをいふ、知は明覺の自然をいふ、花を見て花と知り、月を見て月と知り、善は善、惡は惡と、それ〴〵に知りわきまふる心の神明にして、人たるもの同く天より稟賦て、根本より善なる智慧を、吾心の良知といふなり。(中略)此吾心良知を失はざる人を、聖人賢人といふ、然るに迷倒凡夫は目に美色を視て愛着し、耳に好聲を聽て心を動し、鼻に香を嗜、口に味を貪つて、朝夕種々の欲心妄念をおこし、吾心の良知を自と味まし、不孝不弟の業をなし、禽獸と相去こと遠からぬにいたる、誠に悲むべし愍むべし。(中略)

唯君父に忠孝すべしと知る心のおこるは、吾心の良知といふまでなり、致良知とはいふべからず、さて四書五經に說きたまふところは、皆吾心の良知をいたす註文なり、されば此致良知の三字を標的として、四書五經を讀

ば、皆我身のをこないとなりて、今日の用となるべし、若さなくば、四書五經と我身と別になりて其益なし、さてこそ此三字は學問の肝要にて、聖人の人を敎たまふ第一義といふ、殊に陽明學の宗旨たり。

以て如何に通俗平易に陽明の敎義を說明せるかを知るべし、然しながら彼れ自身の思想としては見るに足るものはない、只彼れに取るべきは、能く高尙なる理論を平易卑近に之を說明し、何人をも首肯せしむるに足る巧妙なる譬喩を以て之を解してゐることである、彼れが父子の關係を說ける所など、殊に人をして感發せしむるものがある、云はく、

誠に父母の恩は、廣大無類にて恩德の大根本なれば、先父母を愛敬するを本として、兄弟一族より一切の他人及び禽獸草木の類まで、各に愛敬を行を孝となづけ順德といふ。根本の大恩を忘れて、父母を愛敬せず、枝葉の小恩を報ぜんとて、他人を愛敬するを不孝といひ悖德といふなり、而親の慈悲あさ

く無道の事あるによつて不孝なるを、迷の凡夫宜もと思ふは、迷の中の惑なり。其所以は禮義正く情深くば、半面不識途人なりとも、睦く思ふべし。然らば親の慈悲ふかく道あるに孝あるは、行易ことなれば、さして孝行と言難し、親の慈悲あさく無道なるに孝なるこそ誠の孝行とはいふべけれ、(王學名義巻上、父子有レ親の條)

と、是れより彼れは大舜の孝を例に引いて、以てその模範とすべきを說き、孝行の條目多けれども畢竟は父母の心を安樂にすることゝ、父母の身を敬養することの二箇條に歸するものと爲し、更に進んで家庭敎育の忽にすべからざることを論じ、子弟の敎養を第一とすべきを說く所、亦た傾聽するに足るものがある。

さて親の子を慈愛するは、先學問の師を選で、仁義の道を學習し、賢人智者と爲すを本とす、當座の苦勞をあはれみ、子の願の隨に育を姑息の愛とい

ふ、其子隨意になりて、人の道を辨へず、禽獸に近くならば、慈愛に似て憎といふものなり、且吾身は親にうけたれば、即親の身なり、子を惡と育は親の身を惡するに同じ、故に子を敎へざるを不孝の第一とす、夫家を興すも廢も皆子孫なり、子孫を敎ずして其繁昌を求は、網なくして魚を捕、弓なくして鳥を射んと欲するが如し。(同上)

孝道を說いて、父母の子に對する本務を力說する所は確かに、從來の說よりも一步進みたる考にして、儒敎の缺點を補ふものと謂ふべし、而して彼れの解說また頗る巧妙を極め、よく俚耳に入り易く、親切なる說明なること、又以て之を推知すべし、王學名義に見はれたる敎說にて尙ほ敍ぶべきこと多きも、大抵以上の敍述に依て之を想見することが出來やうと思ふから、總て之を略し、最後に陽明の主張たる知行合一論に關する彼れの說明の一節を引用して置かう。

知はしると譯、事物を能合點するをいふ、行はをこなふと譯、身に道を修行

するをいふ、合一はあはせひとつにすと譯、儒學にても佛教にても知行を分て二とす、故に先事物の道理を心に知得て、其後身に行と會得たり。然るに陽明子の說は知是行之始、行是知之成と宣て知行合一なりと立たまふ、以二要言一之孝を行ひ弟を行はんと欲ふ心は是知にして行の始なり、其孝弟の淺深は行得て知る、是行にして知の成就したるなり、譬ば飮食するが如し、飮食せんと欲心ありて飮食を知る。其飮食せんと欲心は行の始なり、飮食の味は口に入を待て後に知る、是知の成なり。且夫孝悌を知と云は孝弟を行得たるを謂、孝弟の理ばかりを曉得たるをいふに非ず、是故に知卽行、行卽知にして知行不二相離一して兩個にあらざれば、知行合一といふ、是乃陽明學の宗旨にて孔孟の本旨なり、具に傳習錄に見へたり、方に今略して其大槩をいふならし。(同下、知行合一)

尙ほ陽明子四句の敎法に就ては、陽明の略傳まで附記して、熱心にその敎義を

敷演してゐる、想ふにこの通俗平易の著は却て陽明學を世に弘布せしむるに便宜であつたであらう、故にこの王學名義は日本陽明學發達の歴史から觀て注意すべき書物である。

松菴と同じく京都の人で陽明學を唱へた人に三宅石菴といふ人がある、大阪懷德堂書院第一代の學主となつて懷德堂の學風に大なる感化を及ぼしてゐる、石菴は世に鵺學問と謂つて之を誹謗する人もあつた位で、博學であつたがその代り餘り深か味のない人であつた、然しながら晚年は全く陽明學を信奉して其の鼓吹に努力したやうである、懷德堂の學風に陽明主義の著しく見はれてゐるのは此人の影響かと思はれる、石菴の陽明學者としての思想を窺ひ知るに足るものは藤樹先生書簡雜著一卷あるのみである、此書は藤樹の書簡を輯錄したもので正德三年の序文がある、彼れが藤樹を尊信せることは、これに依て知られる、然しながら其端書に彼れ自らの意見を附記してゐるから、これに依て彼れ

の陽明學に對する態度が窺はれる。

ある人いはく、藤樹先生の學、朱に始りて王に終ふ、今吾子先生の說を尊信すること如レ此なれば、亦王子に從ふ者なるか。余がいはく、これまた朱陸王の辨のみ、爲ることなかれ、朱陸王子は、皆吾道の宗子、斯文の大家也、世の朱を爲る者陸を非とし、その王を爲る者は又朱を是ならずとして、をのをのこれを壓倒せんとするの氣あり、これ三先生の心を知らざる也。當時朱子象山を謂て天下第一等の人也と、陸子も亦紫陽を謂て天下第一の人也と、その相交ること兄弟の如し、議論の間合はざること有といへども、こゝと並行はれて相害せざりき、これを君子の心といふ、その學は天下の公也、然れば朱に祖くと王に祖くと、祖く所異なりといへども、その私たることは一也。その朱子を排せず陸子に黨せざるを以て觀れば彼れの學に對する公平なる態度を知るべし、彼れ更に語を續けて曰はく、

三先生の道とする所は何ぞ、此私に勝ちて天下と大同するのみ、今先生の書をよむに、固より王子に據りて亦朱子を引けり、其語意氣象、かの適あり莫ありて固我を絶つことを爲ざる者と相天淵す、余もまたこゝを學ばんと欲して、みづから不逮の資を忘るゝのみ、何ぞ必しも朱といひ王といふことを以て爲んや云々。

と、是れに由て之を觀れば藤樹を學びて藤樹に偏せざる意なることが以て推知せらるゝであらう、卽ち彼れも亦た蕃山と同じく、藤樹先生の志と德業とを敬慕して師說の誤に於ては之を訂正指摘することに吝ならざるものであつたのである。

第五節　三輪執齋

寛文九年(一六六九)——寛保四年(一七四四)

一、學風

執齋は斯學中興の祖と稱せらるゝ人で、其德望の高きと、學問の博きとに依て、一時不振であつた陽明學も大に興隆するに至つた、彼れは初め佐藤直方の門に入りて朱子學を深く研究したので朱子學的の色彩が餘程その學風に見はれてゐる、(日本儒教概説一三四頁　一三七頁參照)而して陽明學を主張するに至つても決して朱子學を排するといふやうなことがなかつた、彼れの學風は要するに實學を貴ぶに在る、學派の爭などは眼中になかつたのである、曾て彼れと同窓の友であつた魚住靜安といふ人が、彼れに向つて共に朱子學を攻究して今後相共に朱學を張皇することを約しながら、何故に其學を變じて陽明學を信ずるに至つたのであるかと、其變節を難詰した時に彼れは左の如く之を辯じてゐる。

夫學有二三貴一焉。其寡レ過矣乎　志貴二高遠一、不レ貴二卑近一、道貴二自得一、不レ貴レ從レ言、學貴二易簡一不レ貴二煩瑣一、周程朱王、皆古之賢聖也、吾豈敢輕取二捨

之一乎、然若二其所レ志、則亞聖公有レ言、所レ願則學二孔子一、是所下以貴二高遠一不レ上貴二卑近一也。……古之志レ道如レ此、而吾何爲獨不レ然。（執齋先生雜著卷三）

彼れは此くの如く先づ學問の道に於て易簡を貴び、自得を貴び、その志す所は高遠を貴ぶの三事を以てして自分の主義主張を明らかにし、更に進んで何故に朱子より陽明に轉じたるかの理由を述べてゐる、

予嘗欲下以二通儒一稱上於二天下一、而從三事於二章句一幾十年矣。字解句釋、論二蠶絲一拔二牛毛一、自以爲三頗得二雲谷讀書之法一矣、及三退省二其私一、則無レ有二分寸之所レ得、於レ是竊謂、如二文公之學一、其道大其業廣、非三吾才所二能勝一、而雖二思孟周程一、亦未二必如レ此學一焉。乃歸二鄉里一自養、聞下苟有中能成二一德一者上、則不レ辯二朱王一、不レ擇二老佛一、必執二弟子之禮一、往相見、以爲二吾進レ學之助一矣、而未下得二君子者一而見上レ之、則皇々望々、如三亡子於二道路一、而猶未レ休、不二亦宜一乎、比年來讀二王夫子之書一、似レ知レ有下自得二易簡之學一者上、及三其考二諸朱說一、雖レ

未ニ嘗不レ同、以ニ其說之廣大一、而未レ見ニ其要領一耳、然後自ニ章句集註一至ニ語類文集一、於ニ凡文公之書一、吾亦取ニ其二三策一而已矣、豈獨朱子之書、雖ニ王夫子之書一、亦取ニ二三策一而已、豈獨王夫子周程孔孟之書、吾心自得外、姑舍而閣焉、則才之短、於レ是乎如レ有ニ少所一レ勝矣。(同上)

是れ實に能く彼れの學問の徑路を敍し盡した文である、故に長きを厭はず、ここに引用したのである、これに依て見ると彼れが初め朱子學を志したのは博學の先生たらんとしたのである、然しながら讀書萬卷退て其私を省みると何等身に得る所なきを悟つて、是より書物を捨てゝ實際人物の偉大なる人に接して德を磨かんとしたのであるが、世に君子人の少きを嘆息して聊か煩悶してゐる際、偶ゝ王陽明の書を見て易簡の學玆に在りと感悟したのである、然しながら要は自得を貴ぶのであるから、決して王子の說をそのまゝ汲み取らうとするのでない、周程孔孟の書と雖も自得せざる所は敢て取らないといふのである、か

ういふ主義の人であるから朱王の爭などに沒頭することは、彼れの立場から觀れば實に愚の骨頂である、故に彼れは之を排して、

若夫世之以二朱王一爲下如二水火一如中薰蕕上、而役々于二同異之辨一無レ所レ止者、其亦可レ謂レ不レ知レ言矣。（同上）

と言つてゐる、要するに彼れの學風は左の一詩に言ひ盡くされてゐると思ふ。

吾學從來無二異同一。事レ親則孝事レ君忠。何求二日用彝倫外一。明レ善誠レ心是聖功。

（雜著卷三、答二小出日新軒問一學）

二、學說要領

執齋の學は、以上述ぶる如く、何ぞ日常彝倫の外に求めんといふのであるから、其教訓悉く吾人日常實踐の倫理ならざるものはない、種々の教訓中最もよくその要領を知るに便なるものは其著「日用心法」一卷である、元來この書は彼れの日常工夫の條目を記したもので、其文も假名書であるからその書を一讀

すれば解を持たずして其要旨を知ることが出來るのであるが、今讀者の便利上其要旨をこゝに摘錄することにしよう。

本書の品目は左の十項目に分けてゐる、

一、立志をはじめとす、

二、辱をしるを助けとす、

三、孝悌を本とす、

四、氣を養ふ、

五、量を廣ふす、

六、氣象を考ふ、

七、內省

八、致ニ良知一、

九、言行念慮妄にすべからず、

十、執ㇾ中。

一、先づ立志を説て曰はく、

心は天理の凝聚、性の生活、人に受て知覺運動するものなり。志は其發出しさし向ふ處につきて心を得るものなり。心もと不善なし、故にその發し向ふ處もまた不善なきなり、聖人に志すは志の本體也、異學に志すは志の惑へるなり云々。

之を要するに志の一字は初學より聖人に至るまで、學問の全體なり、孔子が十五にして學に志すと云ひ、三十にして立つとは志を立つるなり、四十にして惑はずとは志の惑はざるなり、五十六十より七十にして心の欲する所に從て矩を踰えずと云ふも此志の矩を踰えざるなりと例證して大に立志の必要を明にしてゐるのである。

二、辱をしるをたすけとす、

此心は父母の遺體なれば此身此心是れ皆父母なり。故に人欲の爲めに之を害するは父母を害するに同じ、故に人は恥を知るを以て第一とすべきを論ずるのである。

三、孝悌を本とす、

孝悌は天地生々の德、之を人に受けて仁義となる、孝悌は其發用なり、故に孝悌は人心に根ざし、人心は孝悌に發す、有子が孝悌は仁を爲す本と云へるも此理なり、然り孝悌の心ありと雖も志足らずんば、此天眞を全うして生々の德を體すること能はず、故に立志を始めとし、孝悌を本とす、志は孝の工夫、孝悌は志の主意、更に二つあるべからず、本なくんば何をか生ぜん、始なくんばいづくによくならんとて、志と孝悌との一致すべき實體を論じてゐる。

四、氣を養ふ、

此章は要するに孟子浩然の章を解してゐるのである。

五、量を廣ふす。

此章殊に味ふべき言多し、云はく、

人の性は天の命なり、人の心は並びて三才と成るべくして氣もまた浩然たり、天もと無量、人の量何ぞかぎるに分界を以てせん、唯有レ我の私にかゝらはされ、各受の形體に局せらるれば、自私して天受の量を狹隘にす、故に聖學にこゝろざすものこの關をうち通らざれば更に補けとすべきなし。

彼れは此くの如く人間度量の自然に大なるべきを論じ、度量の廣大ならざる可らざる所以を說かんとしてゐる、曰はく、

凡そ量せばき者善事をなすといへども迫切の病ありて從容の氣象なし、毀譽に動きやすく憂苦に堪がたし、故にその人志をうれば忤恨睚眦の恨も必報ひんとおもひ、位をうしなへば悲憂痛憾いふべからず、晏子の御者のつまにわらはるべし、然れども量狹きものは喜怒發しやすしといへども心のはやく足

り安きを以て必大惡には至らざるものなり、如何となれば量狹ければ慮みちかし、一途におもひ入ぬればその處に屈して融通することあたはず、是を以て善にすゝみがたし、又惡にも大に流れず、諺にいへる、惡に强きものは善につよき物なり、世の狂病をうるものを見るに放蕩より入るものはすくなく、偏固なるもの多くこの病を生ず、是れ一所に屈して活所なければなり。

更にその斷案を下して曰はく、

故に量ひろからざれば聖學かたりがたし、……百尺の臺を築かんと思ふものは必その基を大にす、聖人に至らんとおもふものは、必其量を廣うす、故に今この條を設け、其矩模を大にすとしかいふ。

六、氣象を考ふ、

これも別に一等の工夫にあらず、卽立志養氣より廣量の內この趣有り、今これが條目をあらはすことは、人聖人にあらざるよりは必氣象昏明淸濁により

てかはりあり、氣象清明なる時は本心おのづから發しやすく、大に力をはぶく處あり、昏濁なる時は力を用ひて心をはげますといへども、必失ふ事又多し。

とて、氣象の考へざる可らざることを說き、更にその結論として左の如く述べてゐる。

之を以て氣象を考ふることをしらざれば信僞の界を辨じ進退の位を別けがたし、……常に氣象を考れば自得誠意の處より發する者の各別なる味しり安かるべし、夫れ自得誠意の處より發するものは、優々游々從容不ㇾ迫事のために いからず、もの丶爲に擾らず、志氣清明、事を終りて喜快こ丶ちよし、鳳千仭にかけるの氣象あり、たとひ死地に臨むといへども仁を求めて仁を得、また何ぞ恨みん、不ㇾ然ば善事を成すといへども心甚だ苦しみ、成しおはりてやすからず、利害の來るに逢ふ時は、却てこれを悔ることあり、これみな一

旦の意氣より出て本心自得の處より生せざればなり。云々。

七、內省。

言は心の聲なり、行は心の跡なり、爲㆓私欲㆒に隔斷せられて心跡二つとなる、言行よしといへども、爲めにする事あれば本心の發見に非ず、その心跡二つと成るものなり、……人のしらざる處にして己獨知る、この處に於て力を用るは誠意の愼獨なり、是則自反內に省みて、內自訟る者なり、人の學是よりすゝまずんば上に述たる數節の條目、凡ていつはりなり、其餘は何ぞ見るに足らん、天下の人こぞりて譽るも、歡ぶべからず、天下の人こぞりてそしるも愁ふべからず、只自反して心に快きはこれ則天心にあへるとしるべし、……本心卽天理、何ぞ他に求る事を煩はさんや、顧れば卽こゝに存す、予故云、自反內省は存亡の機なり。

八、致良知。

致知の工夫は大學に始めて是れをいひ、知を良知とすることは孟子に據れりとて此三字を丁寧に解釋してゐる、本文餘りに長き故之を略す、良知の解を知らんとする人は一讀の要がある。

九、言行念慮妄にすべからず。

言は心の聲なり、行は心の跡也、思慮は心の動なり、此三つのものは人の必あるものにして其事眞と妄との二つあり、是を此處につゝしむ、則是立志、養氣、內省、致知の條目なり、夫無妄は天理の實然心の本眞なり、人欲氣質のおほはれよりその本體を失すれば則妄をなす事あり、……なほ此本より本心にかへり求めて志をせめ、恥以はげまし、氣を養ひ良知を致す、各其他頭につきて是が工夫をなせば、邪妄退去す。

更に此の論を進めて曰はく、

一言妄に發すべからず、必ず之を良知に問ひ、之を孝悌に本づけ、之を志に

責め、之を氣象に考へて、さはる所なく耻るところなく、せまる所なく、疑ふ處なくして後に出レ之、然して後言天下に充て口の過なかるべし。

一行妄になすべからず、必是を良知にとひ、孝悌に本づけ志にせめ、氣象に考へて、障る處なく、せまる處なく恥る處なく、疑ふ處なくして後に行レ之、然して後行ひ天下にみちて、うちみ憎むことなかるべし。

一念妄に思ふべからず、必これを良知にとひ、孝悌にもとづけ、志にせめ、氣象に考へて、さはる處なく、恥る處なく、疑ふ所なくして後に思レ之、然後その心に生じて、其事に害あらず、其政にそこなひあるべからず、……則内外を一つにして表裏を合せ、衆人より以聖人に至り、一身より以天下に施すべき要道なり、かりにもゆるがせにすべからず。

と結論してゐる。

十、執中。

大禹謨に曰はく、人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執ニ厥中一、是れ先聖相傳（堯舜禹）の旨意なりとて、この語を解してゐるのであるが、其中左の言最も味ふべき教訓である。

然れども人此身あれば、かならず自私する處ありて、道とひとつなりがたし、是を以て道に志なきものは、常に軀殼より念を起し、其道心あらはれがたし、故に微なりと。夫善を見ては必これをよみし、惡を見ては必惡レ之は是道心の發見軀殼によらざるものなり、我身にいたりては、善にはうとし惡には近きは軀殼に從ひて自私するものなり、故に人至愚といへども人を責むる事の必明らかなるは、天下の眼を以て公に見ればなり、至明といへども己をはかることの必くらきは、一人の身を以て自ら私すればなり。故に人心道心たがひに消長を相成す、道心專一なれば人心消し、人心盛なれば道心微なり、道心微にしてかへる事を知らざれば其終禽獸を去ること不レ遠なり、人心

の危きは道心本體をうしなへばなり、道心微なるは人心の事を用ゆればなり、聖人人心を去るを惟精といひ、その道に復するを惟一といふなり、二事あるにあらず云々。

尙ほ最後に

以上の工夫は當所によりて、名を異にすといへども、その實は十個只一個の工夫のみ、十條を通貫し、會得すれば一事にえても九事その內にあり、十條の別にかゝはりて支離破裂すべからず、十條にわかつものは、一條一條の趣をよくくしりて眞に至らん事を願ふのみ。

と注意してゐる、以上十箇條の敎訓は以て吾人日常の鑑戒とすべきである。尙ほ「四言敎講義」も、彼れの思想を窺ふべき重要の書であるが、今は之を割愛して述べない、その他雜著中にある、「自警以て諸兒輩に示す」の一文なども亦た吾人の服膺すべき金玉の文字であるが凡て之を省略する。

○執齋の門人川田雄琴には、遺著「學談敗鼓」ありて、執齋の教學を祖述してゐるが、この小冊子の能く述べ盡すところでないから、是れも亦たこゝには略することにする。

【著　書】

日用心法　一卷（元祿十五年刊）

四言教講義　一卷（享保十二年の著）

執齋先生雜著　四卷

古本大學俗解　二卷二冊（寫本）

大學講義　七卷三冊（寫本）

（右三部の書は日本倫理彙編にあり）

古本大學和解　二冊（刊本）

古本大學講義　二卷一冊（東敬治詳註、明治四十一年）

傳習錄筆記（漢籍國字解第十六卷にあり）

正享問答（日本文庫第六編にあり）

救餓大意附社會略法、社會法大意

（右の書は日本經濟叢書第六卷に收めらる）

標注傳習錄四卷

其他之を省略す。

第六節　中根東里

元祿七年（一六九四）――明和二年（一七六五）

一、學說要領

東里は初め僧門に入りて佛學を修め、更に蘐園の學を攻究し、轉じて鳩巢の門に於て朱子學を習ひ、晩年悟る所あつて陽明の學に歸したのである、その修養の徑路は執齋のそれに似てゐる、卽ち彼れの學問はたゞ〳〵實踐躬行を主とす

るのである、（日本儒敎概說一三九――一四一頁參照）その遺著としては東里遺稿東里外集の二部、傳はつてゐるが今その書に依て、先づ彼れの根本主義たる天地萬物一體の仁に就て述べることにする。彼れが作る所の學則一篇は最もよくその主義を簡明に表はしてゐるから之を引用しよう。

聖人之學、爲レ仁而已矣、仁者天地萬物一體之心也、而義禮智信、皆在二其中一矣、蓋天下之物、其差等雖レ無レ窮、然莫レ弗下得二天地之性一以爲二其性一得二天地之氣一以爲中其氣上、此之謂二一體一。是故自二我父子兄弟一、以至レ於二天下後世之人一、皆吾骨肉也…………人之善惡、若二己有一レ之、先二天下之憂一而憂、後二天下之樂一而樂、是之謂二天地萬物一體之心一。…………聖人之學、豈有レ他哉、勝二夫人欲一以盡二是心一而已矣、蓋合二內外一以平二物我一而已矣、此之謂レ爲レ仁、此之謂レ好レ學。（東里先生外集）

卽ち彼れが門に在つては、學問の本領はたゞ〳〵博愛仁慈を實行するにあるの

である、萬物一體の理を體得して、博く萬人を愛するのが學者の理想であつて、經義の解釋、文辭の麗を欲するは是れ陋學なりとして之を卑めてゐる、彼れが一生涯その到る處に於て、德を以て衆民を化することに努めたのもこれが爲めである、尙ほ彼れの學の本領は「一體之訓」に於て之を表示してゐる。

一體之訓、其由て來こと久し、後儒の新意に非ず……秦誓に曰、惟天地は萬物の父母、惟人は萬物の靈なり、夫れ天地果して萬物の父母ならば萬物は乃ち天地の子なり、子と父母と一體ならざるもの有らんや、………萬物の區にして以て別れたるは、一身の中に於て耳目口鼻首足肩背各其分ち有が如し云々。（同上）

彼は此くの如く一元的世界觀によつて儒敎の根本義たる仁の本體を明らかにせんとしてゐる、大人歌の中にも此意を述べて、

天地與二萬物一渾然惟一人、陰陽爲二呼吸一、四時是屈伸、分野唯虛名、全體靡レ

不レ均。（東里遺稿）

と説き、世界は卽ち人の大なるものと考へたのである、更に人説を作つて曰はく、

吾聞レ之、人者天地之心也、故天地者人之身也、萬物備焉、無レ內無レ外、無レ始無レ終、何時非レ仁、何處非レ中、欣合和暢、浩々悠々、此謂二宇宙一、宇宙卽是人、人卽是宇宙、人之大全也。嗟呼宇宙不三曾限二隔人一、人自限二隔宇宙一、謂二之小人一、學問之道無レ他、撤二其藩籬一而已。（同上）

彼れが遙かに凡俗の境界を脫して、而かもその凡俗を導き得たるものは、蓋し此くの如き大なる理想境に住したる爲めであらう、學問の道他なし、物我の藩籬を撤するに在りとは、誠に彼れの敎義を遺憾なく發揮してゐる言である。是れより少しく彼れが實踐倫理の方面に於ける敎訓に就て槪觀して見よう。

二、實踐的敎訓

彼れは上述の如く聖人の學はたゞ仁愛の德を實行するに在ることを云へるを以て、その人に教ゆる教訓も、亦た頗る實際に適切なる言に滿ちてゐる、嘗て聖人の學問は何ぞやとの問に對して答へたる書簡に曰はく、

聖人の學問は、善をなして惡を去るのみなり、善にてもしかたあしければ、善けがれて惡となれるなり、第一言語の上にて見るべく候、譬いかほど善事をいふとも、いひかたあしければ、善言けがれて惡言となり人も信せず、自分にもこゝろわるし、然る故に物いふ事を大切に愼むべし、至極尤なることをいふとも、かるはづにいひはらふべからず、せわしなくいひとるべからず、氣儘にいひはるべからず、此二つことばの病なり云々。(東里先生外集)

聖人の學は別に難事にあらず、只々善を行ひ惡を去るのみといひ、且つその善事を行ふも常にその方法を考慮すべきことを說き、言語の三病として輕率、躁急、氣儘の三事を擧げて注意するが如き、以て彼れの訓言が如何に平易にして

又た如何に用意周到なるものなるかは推知せらるゝであらう、更に學者名聞の弊を戒めたる言に、

名を好む心は學問の大魔なり、早く名を棄て實を勤むべし、……名を惜しむと申候へば、よき事に聞え候へども、聖人の學者は義を惜み候間、名には頓着不レ致候、名をおしむ心有レ之候へば、事ごとに外聞をかざりて、眞實の心なく、世上のうはさを恐れて、氣遣ひ多し、果には只名のために義をすつるかたに成りゆき申候、……義と名とは玉と石となり、取違ひなき樣に擇びわかつべき事に候。（同上）

とある、義と名とは玉と石との區別あり、石を得んとして玉を捨つる勿れとの戒は、吾人日常の鑑戒として深く注意しなければならぬ、尚ほ彼れは一日の命あらば一日の學問を勤めんと言つて常に自ら修養の工夫に專心した人であるから、その方面に於ても亦た吾人の服膺すべき敎訓が尠くない、特に注意すべき

は彼れは靜立の工夫を創唱したことである、靜坐は動もすれば消極的枯寂に陷るの弊あるを觀て、彼れは此の工夫を案出したのである、所謂靜立とは何であるか、彼れ之を說きて曰はく、

老拙近來靜坐を勸候に付、靜立をも致候、古來靜立といふ名目は聞及ばず候へ共、愚意を以つて作爲いたし候、靜坐は時を待ち所を擇ぶ事も有ㇾ之候へども、靜立は其差別なく、內にありても外へ出ても、道路を往來するにも、心まかせになるべし、殊に山に登り、水に臨む時などは別ての佳興也。且又靜立は全身を運用するが故に、勉强の氣味も少く、心氣從容として血脉周流し、拘局凝滯の思ひなし、德を養ひ、生を養ふに於て、大に益あるべし云々。

(同上)

此くの如く靜立の效果を說き、更に古人の名目にはなきも此事必ず古に於ても在りしなるべしとて、論語の「嘗獨立、鯉趨而過ㇾ庭」の語と「他日又獨立云々」

の語を引用して、所謂獨立は卽ち靜立の意なるべしと論じてゐる。更に彼れの修養法として特に注意すべきは、笑字を去るの工夫なり、卽ち說いて曰はく、老拙近來は、一つの笑の字を去る工夫に於て力を用ひ申候。……此笑の字は夫子莞爾而笑、夫子樂然後笑、人不ㇾ厭ㇾ其笑ㇾなどいふ笑字にては無ㇾ之候、別に一種の笑字、人不ㇾ知而已獨知の地に在て、大罪極惡の本根となるものを指て云。……眞によく此笑字を除き去らば、怠惰放肆の日に去て、聖域の道路廓然として障碍なかるべし。(同上)

と、是れ中庸に所謂愼獨の工夫の一轉せるものと謂ふべく、頗る味ふべき敎訓である、眞によく此笑字を去らば、吾が向上の一路廓然として眼前に現出するであらう、東里の遺編を通讀して感ずることは、如何に彼れが實踐躬行に努め、その修爲の工夫に力を致したかといふことである、靜立といひ、笑字の除去といひ、何れも彼れが心を茲に用ゆる久しきの結果發明したものであらう、

最後に彼れが童蒙の爲めに書ける壁書十六ヶ條を掲げて、吾人座右の箴として鑑戒に供したいと思ふ。

一、父母をいとをしみ、兄弟にむつまじきは、身を修る本なり、本かたければ末じけし。

一、老を敬ひ幼をいつくしみ、有德を貴び無能をあはれむ。

一、忠臣は國ある事を知て家ある事を知らず、孝子は親あることを知ておのれあることを知らず。

一、先祖の祭を愼み、子孫の敎を忽にせず。

一、辭はゆるくして誠ならむ事を願ひ、行は敏くして厚からむことを欲す。

一、善を見ては法とし、不善を見てはいましめとす。

一、怒に難を思へば悔にいたらず、欲に義を思へば恥をとらず。

一、儉より奢に移る事は易く、奢より儉に入ることはかたし。

一、樵父は山に登り、漁父は海に浮ぶ、人各その業を樂むべし。
一、人の過をいはず、我功にほこらず。
一、病は口より入るもの多し、禍は口より出るもの少からず。
一、施して報を願はず、受て恩を忘れず。
一、他山の石は玉をみがくべし、憂患のことは心をみがくべし。
一、水を飲て樂むものあり、錦を衣て憂るものあり。
一、出る月を待べし、散る花を追ことなかれ。
一、忠言は耳にさかひ、良藥は口に苦し。

第二章　輓近の陽明學

（日本儒教概說第五章第六節參照）

第一節　佐藤一齋

一、學風

晩近陽明學の巨頭として佐藤一齋の事蹟及た學說などは可なり弘く知られてゐる、そこで簡單にその學風如何を敍べて見よう、彼れは所謂陽朱陰王主義の人であつたと謂はれてゐる、聖堂の敎官であつた關係もあらうが、表面は在來の宋學を講じてゐた、而じて自らの修養は主として陽明學に因つたのである、門下に多數の陽明學者を出してゐるのも是れが爲めであらう、然しながら朱子學を表面に講ずると言つても、全然之を信奉しなかつたのでない、言志晩錄の中に藤原惺窩の朱陸併取の學風を述べ、自分の朱王併取も之れに淵源してゐることを說いてゐる、（日本儒敎概說三二〇參照）卽ち彼れは要するに朱王併取主義の人であつたのである、而して惺窩は朱子を主としたるに反し、彼れは陽明を主にしたのである、彼れが學問硏究の順序を說いてゐる「初學課業次第」と

いふ書物を見ると別に陽明學を主張した樣な所がなく、たゞ陸象山や王文成公の書目を擧げ「他の詩文集を以て見るべからず」と說明し、最後に、

往年爲二弘前侯索一錄二初學課業次第一、後又爲二諸生一續二記必讀書目一。然至二於眞學問一則不二必在一レ此、姑擧二當今學流所一レ爲耳。

といつて、暗に陽明學を以て、其根本精神と爲すべきことを諷してゐるのみである。「雅言」といふ彼れの講話筆記を見ると朱子學を非常にほめてゐる、例へば、

先生嘗云聖人を去ること千有餘歲にして宋朝に至り、周程張子是を明にし朱子に至て愈精しく聖人の道皓然たり、夫よりして日本は道春に至り稍朱子を宗とすと云へども、然れども其學善しとするに足らず、是に於て山崎闇齋朱子を信じ、聖學の朱子によらずんばあるべからざることを知ると云へども、其流猶朱子の正意にあらざるもの多し、是に於て其道體性命天道をのみ事とするを見て、聖人の學は然らず、只日用孝悌忠信のみ道理は空言なりと云て道

理をきらい我意に隨い大に道を訛謬するものあり、仁齋の學是なり、又人ありて山崎の流伊藤の流二つをつき合せ計較して思へり、彼の二家の者の聖學をあやまつものは、唐土の書にくわしからず、文字に疎き故なり、然らば力を古書文字詞章に盡すにしくはなしと、則一箇の學黨をなして又あやまるものあり、徂徠の徒是なり、其外新室中貝の流各其學を作ると云へども朱子の正意にあらず、然則元明以來往々過つものと幷に日本諸儒の過を見、朱の意とつぎ合せ考、其違ふ所を見、正意を察得ずんばあるべからず。

の如く、朱子を宗として、仁齋徂徠の學は固より、白石、鳩巢、藤樹、益軒の學をも排し、たゞ朱子の正意を得んことを期してゐる、彼れの門下より大橋訥菴、中村敬宇の如き朱子學者をも多く出してゐるのも亦た怪しむに足らないのである、想ふに彼れが嘗て師事せし中井竹山の感化が大に彼れに影響してゐるのでなからうか、卽ち竹山の學風は朱子を標榜しながら、一方陽明の學を深く

信じたのであるが、彼れの學風も亦た頗る之れに類似してゐる、獨り一齋に限らず幕末の儒者に就てその學派を區分することは甚だ困難である、朱子學者陽明學者と謂はるゝ人でも、從前のそれと違つて學派の見に拘泥することは甚だすくない、彼等はたゞ儒學卽ち孔子の道を實地に行はんとしたのである、故に晩近の儒者として概括することは最も穩當な方法であらうと思はれるが、研究上その人の特色に依て之を分類することは便宜であるから、一齋の如きは朱王併取主義の人であるが、大體に於て陽明主義が濃厚である、殊に幕末に於ける陽明學者は殆んど皆直接間接の相違はあつても彼れの影響に依て起つたものである、故に晩近の陽明學を研究するには是非とも彼れの學說を考究することを要する、次に簡單にその要領を述べて見よう。

○一齋先生遺稿卷二を見るに理學眞僞論あり。劈頭「道者天下之公道而學亦天下之公學也」と論じ、世の學者徒に朱陸の辨に拘泥するの甚しきを戒めて

てゐる、以てその公平なる態度を知るべきである。

二、學　說

（イ）　理氣の說

一齋が後世に與へた感化は、その學說よりも、寧ろその實踐的敎訓に於てゞある、學說としては何等組織的に述べたものはない、又た別に新らしい意見もないのである、然しながら其實踐倫理の根本思想となつてゐる二三の問題は之を明かにして置くことが必要であるから、先づ理氣の說に對する彼れの考を述べて見よう。彼れは此の問題に關しては理氣合一論を取つてゐる、即ち天地萬物は皆氣である、氣分れて天地萬物となる、然らば理は氣外に存在するものかと云ふに、さうでない、理と氣とは一にして二、二にして一の如き不可分離の關係を有する、卽ち本體主宰の側から觀て、之を理といひ、變化流行の側から觀て之を氣といふ、卽ち體用の關係であつて、同一物を異なる方面から名付く

るに過ぎないと言ふのである。
主宰よりすれば之を理といひ、流行よりしては之を氣といふ、主宰なくんば流行すること能はず、流行ありて然る後、其主宰を見る、二にあらざるなり、學者輙ち分別に過ぎ、支離の病を免れず。（言志耋錄）
宇宙萬有の眞相は流行して止まざるものと爲し、之を氣といひ、その本體を云へば卽ち理の主宰に歸すと爲すのである、其一元的宇宙觀に於て朱子と全く異なる立脚地に立てゐることが知られるであらう。

（ロ）萬物一體の說

宇宙間の萬物、萬殊なりと雖も、要するに本體界より觀れば、只一個主宰の理に歸着すと爲す。
程子萬物一體をいふ、試に思へ、天地間飛潛動植物、有知無知、皆陰陽陶冶中より出て來るを、我其一なり、易を讀みて理を窮め、深く造りて之を自得

すれば、眞に萬物の一體たるを知る。（言志晩錄）

又曰はく、

我身一たるに、老少あり、老少の一身たるを知らば卽ち九族の我が身たるを知る、九族の我が身たるを知らば則ち古往今來の一體たるをしる、萬物一體は是れ横說、今古一體は是れ竪說、須らくよく形骸を忘れて之を自得すべし。（同上）

これ理氣合一論より自然に來るべき結論であつて、萬物一體は空間的に之を證すべく、古今一體は時間的に之を證すべしといふのである、萬物一體、古今一體の信念が彼れの實踐倫理の根本基調をなしてゐる。

（八）　宿命論

一切の現象は萬變萬化をなすと雖も、皆是れ主宰たる本體の支配に歸するものである、然らば人類も亦た現象界の一物であるから、その支配を脫すること

能はざるは勿論である、然るに世人はこれを知らずして、終身役々として煩悶苦慮をなし、少しも天理の正に歸することを知らないのは惑へるの甚しきものである、乃ち曰はく、

凡そ天地間の事、古往今來、陰陽晝夜、日月の代明、四時の錯行、其數皆前定す、人の富貴貧賤死生壽夭利害榮辱聚散離合に至りても、一定の數にあらざるはなし、殊に未だ、之を前知せざるのみ、譬へば傀儡の戯機關已に具りて、觀者は知らざるが如し、世人は如し此を知らずして、以て己が知力の恃むに足るとなし、終身役々、東索西求、遂に悴勞して以て斃る、斯れ亦た惑の甚しきものなり。(言志錄)

と、又た曰はく、

天道漸を以て運り、人事漸を以て變ず、必至の勢、之を卻けて遠ざからしむること能はず、又之を促して速かならしむること能はず。(同上)

此等の言に由て、彼れは深く宿命を信じたものであることが知られる、人力の以て命數に勝つべからざることを信じたのである、然しながら極端なる運命論者と異なつて、或點までは人力を以て運命を左右し得るものと信じたやうである、卽ち、

人の受くる所の氣、その厚薄分數、大抵相若く、軀の大小、壽の脩短、力の强弱、心の智愚の如き大に相遠きものなし、其間一處厚を受くる者もあり、皆之を非常と謂ふ、非常は則ち姑く之を置く、常人の如きに就ては、軀と壽と力との分數は之を奈何ともすべからず、獨り心の智愚に至りては學を以て之を變化すべし、故に博學、審問、愼思、明辨、篤行、人之を一十すれば己れ之を百千す、果して此道を能くせんか愚なりと雖も、必ず明。柔たりと雖も必ず强、漸を以て非常の域に進むべし、蓋し此理あり、但常人多く遊惰にして然ること能はず、豈に亦た天の算籌あるか。(同上)

の語以て證すべきである、然しながら此理ありて尙ほ常人の之を實行し得ざることも亦た天命の爲す所であらうかと疑つてゐる所などから觀ると、彼れは徹頭徹尾宿命論者たることを免れない。

（二）　善惡の說

一齋は其哲學的立脚地より人間を以て一小天地と爲し、吾人の精神は天の來りて我が身體に寓するもの、身體は地氣の精粹より成れるものと信じ、人皆仰いで蒼々たる者を天と爲し、俯して隤然たるものを地と爲すことを知る、而して吾が軀皮毛骨骸の地たり、吾心の靈明知覺の天たることを知らず。（言志晚錄）

と言つてゐる。彼れは此の身心の說明から善惡の說に移つてゐる、即ち人間の精神は之を天に受くるものであるから、純粹にして善なるものである、然るに身體は地より成るものであるから善惡の兩者を兼ねてゐる、人間の惡事を爲す

のは本性の然るにあらずして、身體の然らしむる所であるといふのである、性これを天に禀け、軀殼これを地に受く、天は純粹にして形なし、形なければ則ち通ず、乃ち善に一なるのみ、地は駁雜にして形あり、形あれば則ち滯る、故に善惡を兼ぬ、地本と能く天に承け、以て功を成すもの、風雨を起して以て萬物を生ずるが如き是れなり、又時ありてか、風雨物を壞る、則ち善惡を兼ぬるなり、其所謂惡たるもの、亦た眞に惡あるに非ず、過不及あるに由つて然るなり、性の善、軀殼の善惡を兼ぬること亦此くの如し。（言志錄）

人間の本性は善であるが、身體の之を妨ぐることに由て惡なるもの生ずと爲すのである、而かも其惡なるものはたゞ善の過不及より生ずるものといふのである、乃ち曰はく、

看來れば宇宙内の事曷ぞ嘗て惡あらん、過不及のある處卽ち是れ惡なり、看來れば宇宙内の事曷ぞ甞て善あらん、過不及なき處卽ち是れ善なり。（同上）

と、陽明子の所謂無レ善無レ惡心之體の意を敷演してゐるのである、更に彼れは惡の起源について之を論じ、吾人身體の感觸に存すと爲してゐる。

性の善なるを知らんと欲せば、須らく先づ惡を爲すの由る所を究むべし、人の惡を爲す、果して何の爲めぞや、耳目鼻口四肢の爲めにあらずや、耳目ありて而して後ち聲色に溺る、鼻口ありて而して後ち臭味に耽る、四肢ありて而して後ち安逸を縦にす、皆惡の由りて起る所なり、設へば軀殼をして耳目鼻口を去つて打して一塊の血肉と做さしむるときは、則ち此人果して何の惡を爲す所あらんや、又性をして軀殼を脱せしむれば、則ち此性果して惡を爲すの想あるや否や、盍ぞ試みに一たび之を思はざるや。（同上）

と、彼れは此の論を推及して人心道心の問題を說いてゐる、卽ち所謂人心は軀殼に交渉する所より名づけ、その本體より觀て之を道心といふのであつて朱子の如く二心を立つることの理なきをいふのである。

（ホ）死生論

次に死生に關する彼れの意見を見るに、彼の宿命論よりして、死生も亦た本來の命數であつて人力を以て如何ともすることは出來ない、たゞ服從するの外ない、然しながら人常に死を畏ゝのは惑の甚しきもので、人に死生あるは尙ほ天に晝夜あると同じである、之を畏るゝ理なしと論じてゐる。

生物は皆死を畏る、人は其靈なれば當に死を畏るゝ中より、死を畏れざる理を練り出すべし、吾は思ふ、我身は天物なれば死生の權は天に在りて、當に之を順受すべし、我の生るゝや、自然にして生れて、生時未だ嘗て喜を知らず、則ち我の死するや、應に亦自然にして死し、死時未だ嘗て悲しみを知らざるべし、天之を生じ、天之を死せしむるなれば、一に天に聽かむのみ、吾何をか畏れむや、吾性は則ち天にして、軀殼は則ち天を藏するの實なり、精氣の物たるや、天此室に寓し、遊魂の變たるや、天此室を離るゝなり、死の

後は卽ち生の前、生の前は卽ち死の後、而して吾が性の性たる所以は、死生の外に恒在す、吾何をか畏れむ、夫れ晝夜は一理、幽明は一理、原始反終、死生の說をしる、何ぞ夫れ易簡にして明白なるや、吾人當に此理を以て自省すべし。(言志錄)

彼れは此くの如く肉體上の死生を認めて精神上の死生を認めず、吾が性の性たる所以は死生の外に恒在すといふのである、卽ち本性の精神は永久不滅のものと爲すのである、俗人はたゞこの軀殼の我(假我)を認めて死を悲しむのであるが、聖人賢人に至りては死生の外に超然たる本性(眞我)を認むるのであるから敢て死を畏れないのであるとて、死生を超越すべきことを勸めてゐる、

夢中の我も我なり、醒後の我も我なり、其夢我たると醒我たるとを知るものは、心の靈なり、靈は卽ち眞我なり、眞我は自ら知り、醒睡に間なく、常靈常覺、萬古に亙りて死せざるものなり。(言志晚錄)

と、以てその死生觀を推知すべし、一齋の言志四錄は吾人日常座右の銘として服膺すべき格言に富んでゐる、西鄕南洲の如きも亦た之を拔錄して愛誦されたことは人の知る處である、今こゝに之を引用することは紙面の許さゞる所であるから之を割愛して置く、有志の士は是非その書を一讀せられんことを望む。

【著　書】

愛日樓文詩　四卷（文政十二年刊）

言志錄　一卷

言志後錄　一卷

言志晚錄　一卷

言志耋錄　一卷

右言志四錄は日本倫理彙編に之を收載せり。

初學課業次第一卷（日本文庫第二編にあり）

傳習錄欄外書　三卷
大學一家言　一册（明治四十三年刊）
大學摘說　一册（寫本）
大學欄外書　一卷
中庸欄外書　一卷
論語欄外書　二卷
孟子欄外書　二卷
（右四部の書は日本名家四書註釋全書に收載さる）
小學欄外書　一卷（寫本）
近思錄欄外書　三卷（寫本）
周易欄外書　十卷（寫本）
古本大學旁釋補　一卷

（其他尚ほ多くの述作あれどもすべて之を省略す。）

第二節　大鹽中齋

寛政六年（一七九四）――天保八年（一八三七）

一、學　風

中齋の學風は山崎闇齋のそれと同じく頗る嚴格なるもので、實踐躬行を主とし、記誦の風を排斥した。洗心洞盟約書を一讀する時はその教育の方針が窺はれる曰はく、

聖賢の道を學んで以て人たらんと欲せば、則ち師弟の名、正さゞるべからざるなり、師弟の名正しからざれば、則ち不善醜行ありと雖も、誰れか敢て之れを禁せん、故に師弟の名誠に正しければ則ち道其間に行はる、道行はれて善人君子出づ、然らば則ち名は學問の基なり正さゞるべけんや、某固陋寡聞と雖も、一日の長を以て其責に任ずれば則ち師の名を辭するを得ず、而して

其名の壞れざるとは、大率下文條件の立つと立たざるとにあり、故に盟を入學の時に結び、以て豫め其不善に流るゝの弊を防ぐ。

忠信を主として聖學の意を失ふべからず、若し俗習の爲めに牽制せられて廢學荒業以て奸細淫邪に陷らば、則ち其家の貧富に應じ、某告ぐる所の經史を購ひ以て出ださしむ、其出だす所の經史、盡く之を塾生に附す、若し其本人にして出藍の後、各々其心の欲する所に從はゞ可なり。

學の要は孝悌仁義を躬行するにあるのみ。故に小說及び異端、人を眩するの雜書を讀むべからず、若し之れを犯さば、則ち少長となく鞭扑若干。是れ卽ち帝舜扑を敎刑となすの遺意にして某の創する所にあらざるなり。每日の業經業を先んじて詩章を後にす、若し之れを逆施せば鞭扑若干。

陰に交を俗輩惡人に締び、以て登樓縱酒等の放逸を許さず、若し一たび之れを犯せば則ち廢學荒業の譴と同じ、一宿中私に塾を出入するを許さず、若し

某に請はずして以て擅に出づれば、則ち之れを辭するに歸省を以てすと雖も敬て其譴を赦さず鞭扑若干。

家事變故あらば則ち必ず諮詢す、之れに處するに道義あるを以ての故なり某、人の陰私を聞かんと欲するにあらざるなり。

喪祭嫁娶、及び諸の吉凶、必ず某に告げ、與に其憂喜を同うす。

公罪を犯せば則ち族親と雖も、掩護すること能はず、之れを官に告げて以て其處置に任ず、願くば倆門小心翼々父母の憂を貽すこと莫れ。

右數件忘るゝ勿れ、失ふ勿れ、此れ是盟を恤へよ。（洗心洞入學盟誓）

此くの如く子弟を敎育すること頗る嚴格にして鞭扑を加ふることを辭しなかつた、又た實踐躬行を主として研學を第二に置いた所、或は古今大學刮目を著はして「梱外不出之書」として門人以外の者に示さなかつたと云ふやうな點は闇齋のそれと同一である、又た闇齋、中齋二人の性格も餘程よく似た所があつたやう

である、又た闇齋は朱子の白鹿洞學規を壁間に揭げて日常の鑑戒とした如く、中齋も亦た王子の天成篇を揭げ、附記して「錢緒山以ニ天成篇一揭ニ喜義書院一示ニ諸生一、吾亦謹書揭ニ洗心洞一、弟子日讀而心得焉、則猶ニ躬親學一於陽明先生一」といつてゐる所など、一は朱子を尊崇し、一は王子を尊崇する相違はあるが何れも熱烈なる道德の實行家であつたことが想はれる、彼れは又た學堂の西揭に、王陽明が龍場の諸生に示せる立志、勸學、改過、責善の四篇を揭げ、その東揭には呂新吾の學に關する語十七條を擧げ、門生に對する日常の訓戒とした、但だ闇齋と異なる所は闇齋は朱子一點張りで其他の學は之を斥けたが、中齋は陽明を奉じながら、自ら陽明學と言はずして孔孟學と呼び、敢て朱子の語を排することを爲さなかつた、卽ち偏狹の處は比較的に尠なかつたのである、洗心洞學名學則も亦たその主義を窺ふに足るものがあるから之を引用して置かう。

弟子余に問ふて曰く、先生の學、之れを陽明學といふか、曰く否、之を程子

學朱子學といふか曰く、否、之れを毛鄭、賈孔訓詁註疏學といふか、曰く否、仁齋父子の古學が、抑々徂徠詩書禮樂を主とするの學か、曰く否、然らば則ち先生の適從する所、將た何の學なるか、曰く、我學只仁を求むるにあるのみ、故に學名なし、强ひて之を名づけて孔孟學といふ、曰く其說いかん、曰く我學大學中庸論語を治むるなり、大學中庸論語は便ち孔氏の書なり、孟子を治むるなり、孟子は便ち是れ孟氏の書なり、而して六經は皆亦孔子刪定の書なり、故に强ひて之れを名づけて孔孟學といふなり、毛鄭賈孔の學は則ち經書の名義を註釋するなり、程朱の學、大抵經書の精微、性命の底蘊を說破するなり、陽明先生の學、其中に就いて易簡の要を提ぐるなり、仁齋徂徠は則ち特に其唾餘のみ、嗚呼孔孟の學、一の仁を求むるにあり、而して仁は則ち遽に手を下し難し、故に或は其訓詁註疏を讀み、而して其影響を求め、或は其居敬窮理の工夫により、以て其精微を探り、其底蘊を窮め、或は良知を致し

て以て其易簡の要を握り、而して畢竟各々皆孔孟の學に歸するのみ、然り而して孔孟數千百歳以前既に逆め數千百歳の後、諸儒各々意見を爭ひ、宗を立て派を分ち、以て同室の鬪をなすを知る、故に孔子孝經を以て曾子に授け、之れを至德要領といふ、孟子も亦曰く、堯舜の道は孝弟のみ、是を以て之れを考ふれば、則ち四書六經、説く所多端なりと雖も、仁の功用、遠大なりと雖も、其德の至、其道の要、只孝にあるのみ、故に我學孝の一字を以て四書六經の理義を貫く、力固より及ばず、識固より足らず、然れども之れを心に求めて眞に心中の理を窮め、將に死を以て斯文に從事せんとす、故に直に孔孟學といふ、是れ乃ち僭ならず、吾徒小子宜しく奉遵すべし、而して若し我學を問ふものあらば、則ち之れを以て答へて可なり、嗚呼其所生を忝めて靦然儒を以て自ら冒すものは、則ち孔孟の罪人にあらずして何ぞ。（洗心洞學名學則）

以上の言に由て之を觀るに彼れは程朱の學を排せず、且つ自家の學名について

も、敢て陽明學と言はずして之を孔孟の學と稱し、頗る公平ならんことを期したことが知られる、「後素固より王子致知の敎を奉ずと雖も、而かも朱子博約の訓に於て寧ぞ之れを廢せんや」といひ、或は「吾れ姚江良知を致すの敎を奉ずと雖も二程子の說を以て徵と爲す」といひ、徒らに陽明に偏するものでないことを屢々言つてゐる、兎に角この點は闇齋の朱子に於ける如き偏狹の見解でなかつたことは明かである、闇齋の如き學問上の僻見はなかつた、而して彼れは陽明の致良知說より更に進んで歸太虛の說を述べ、之を以て自家根本の主義としてゐる、固よりこれは中齋獨創の見解ではないが、彼れの學問は全くこの太虛說に基いてゐるのであるから次に之を說明しよう。

二、學　說

(イ)　歸太虛の說

彼れは太虛を以て道德的本體と爲し、この太虛に歸することを以て、道德的

理想となした、彼は實に太虚の理を信じたのである、而して此の信念を以て、すべての道德的教訓を述べてゐる、劄記劈頭の語に、

天特に上にありて蒼々太虚なるのみにあらず、石間の虚、竹中の虚と雖も亦天なり、況んや老子が云ふ所の谷神をや、谷神なるものは人心なり、故に人心の妙、天と同じ、聖人に於て驗すべし、常人は卽ち虚を失ふ、之を語るに足らんや。

とある、世人はたゞ蒼々たる天を觀て虚となし、或は石間の虚、若くは竹中の虚も亦た天なることを知らぬ、況んや我が方寸亦た天なることを知り得ない、然しながら人心の妙は天と同じであつて虚なるものである、常人は卽ちこの虚を失ふが故にこの理を語るに足らないといふのである、彼れ更に語を次で、

軀殼外の虚、便ち是れ天なり、天は吾心なり、心萬有を保含す、是に於て悟るべし、故に血氣あるもの、草木瓦石に至るまで其死を視、其摧折を視、其

毀壞を視れば則ち吾心を戚傷せしむ、本と心中の物たるを以ての故なり、若し先づ慾ありて心を塞ぐときは、則ち心虛にあらず、虛にあらざれば、則ち頑然たる一小物にして天體にあらざるなり、便ち骨肉と旣に分隔し了る、何ぞ況んや其他をや、之を名づくるに小人を以てす、亦た理ならずや。

彼は此くの如く身外の虛卽ち天なりと爲し、而して天は吾が心にして、心は一切萬有を包含するといふのである、陽明子の所謂心卽理とか、天下又心外の事、心外の理あらんやと云ふ主旨を敷演したのである、草木瓦石の類に至るまで、その破壞を見るときは、卽ち吾心を傷ましむ、是れ卽ち萬物皆吾心の所生である證なりと論ずる所、全く心外無別法の唯心論である、但だ彼れは人も知る如く純然たる思想家でないから、その說明は簡に過ぎ議論徹底せざる所あるを免れない、例へば精神界の空虛と物質界の空虛とは彼れの說明に於ては混然として判明してゐない、然しながらそれ等の批評はさて置いて結局唯心論であるこ

とは確かである、而して彼れは深き信念を以てこの太虚の說を述べてゐるのである、吾々の本心は元來空虛なるもので、天地萬物と相通じてゐる、然るに慾あつてそれを間隔するが故に、遂にその虛を失ひ、他萬物と隔離するに至り、本心の妙用を失ひ、却て物に役せらるゝやうになる、是れ卽ち小人であるといふのである。そこで彼れは吾々の本心は宇宙の實在たる太虛の宿在する所、卽ち道德の本源であるといふことを熱心に說くのである。

心の體は太虛なり、太虛は一靈明のみ。(洗心洞劄記)

吾は惟だ天地の中、卽ち太虛の德にして、之れを人の方寸の心に付す、而して方寸の心は太虛の德を含む、故に曰はく、天地の中は他にあらず、人也と、此は乃ち實見の言、而して仁也、性也、道也名を異にすと雖も、要は皆其德のみ、故に人、天地の中を全うせむと欲せば則ち亦奚ぞ他に求めんや、只其良知を致し性に率ひて以て道を行へば、則ち仁熟して心、太虛に歸す、學者

此に至りて亦た聖か。（同　上）

彼れは此くの如く太虚は心の本體なることを說き、之を失ふときは人死するなりとて次の譬喩を以て論じてゐる、

方寸の虚は太虚と刻くも通ぜざるべからざるなり、如し隔つて通ぜざれば則ち生人にあらざるなり、何となれば今物を以て口中を塞ぐときは卽ち方寸の虚閉ぢて呼吸絕え、忽ち死人と爲らん、故に方寸の虚は刻くも太虚と通ぜざるべからざるなり、是れ他なし太虚卽ち心の本體たるを以ての故なり、亦た何ぞ疑はんや。（同　上）

この議論は前既に述ぶる如く精神界と物質界とを混同してゐる、如何にも兒童の言に類するものであるが、彼は堅く之を信じて疑はなかつたのである、心の本體は太虚であるとするならば、吾々の理想はこの太虚に歸することである、そこで「學は歸太虚をもつて能事畢れり」とも言つてゐる。然らば如何にして

此の理想に達すべきかといふに、彼れは誠意愼獨の工夫を以て唯一の方法と論じてゐる、卽ち意誠なれば忿懥恐懼好樂憂患する所なく、あらゆる情欲を一掃して太虛に歸することが出來るといふのである。

只幸とする所は、天地の德性、方寸の虛に含るが故に、獨を愼みて其虛を塞がざれば、則ち德性の一知、乃ち大君となり、四知を使用し以て崇なからしむ、是を仁者知者といふ。（古本大學刮目）

或は又た、

人心、太虛に歸するも、亦た愼獨克己よりして入る、若し愼獨克己よりして入らざれば、禪學の虛妄所謂毫釐千里、故に心學者動もすれば之を誤まるなり。（同　上）

とも言つてゐる、彼れは自己の太虛說が佛敎より得來りたるものなることを疑はれんことを恐れ、頻りに之を辨明してゐる、彼の「儒門空虛聚語」は此の目

的の爲めに著はされたのである。

尙ほ誠意愼獨の外に、致良知、氣質變化、克己復禮等を述べ、以て太虛に歸すべきことを述べてゐるが、その要旨をいへば「陽明先生、訓する所の致良知の實功を積むにあらざれば、則ち横渠先生が所謂太虛の地位に至るべからず、故に心を太虛に歸せんと欲せば宜しく良知を致すべし」といふのである、こゝに所謂良知とは太虛の靈明を指していふのである、乃ち「夫れ良知は只是れ太虛靈明のみ」ともいつてゐる、この靈明を發揮するには知覺、聞見、情識、意見の所謂四知の邪障を掃ひ除かねばならぬ、良知を致すとは卽ちこの邪障を破つて太虛の靈明を發揮することである、この致良知の工夫は、彼れに在つては積極的工夫とも稱すべきもので、此れに對して消極的工夫として氣質變化の說を述べてゐる、「方寸の虛は、是れ太虛の虛にして、太虛の虛は便ち是れ方寸の虛、本と二なし、畢竟氣質之を牆壁するなり、故に人學びて氣質を變化すれば則ち

聖人と同じき者、宛として偏布照耀し、包涵せざるなく、貫徹せざるなし、嗚呼氣質を變化せずして學に從事する者、其學ぶ所將た何事ぞ陋といふべし」と、蓋し彼れは氣質といふものは我々の身體あると同時に、その身體に伴隨する所の私情私欲であつて、これが良知の光明を牆壁するものと考へたのである。

眼を開きて天地を俯仰し、以つて之を觀れば、則ち壤石は卽ち吾が骨肉、草木は卽ち吾が毛髮、雨水川流は卽ち吾が膏血精液、雲烟風籟は卽ち吾が呼吸吹噓、日月星辰の光は卽ち吾が兩眼の光、春夏秋冬の運は卽ち吾が五常の運而して太虛は卽ち吾が心の蘊なり、嗚呼人七尺の軀、天地と齊しきこと卽ち此くの如し、三才の稱豈徒然ならんや、宜しく氣質を變化して以て太虛の體に復すべし。（剳記上）

中根東里の熱心に唱道せる天地萬物一體の訓と同じく、人は卽ち天地、天地卽ち人といふ說であつて、人間の心が卽ち天地の心と一致するものと信じたるが

故に之れが障壁たるべき氣質の變化を主張するのである、その他克己復禮、或は虛僞を去るの工夫等あるも、以上略ぼ彼れの歸太虛說の綱要を明らかにし得たことゝ思はれるから凡て之を略し、最後に彼れの死生觀について一瞥して見よう。

○（太虛說と云ひ、氣質變化說と云ひ張横渠の思想に影響せられたること以て推すべし）

（ロ）　死生觀及び敎訓數條

彼れの死生觀は又た注意すべき說である、その著洗心洞剳記を見るに始んど佛敎の涅槃說に類する言をなしてゐる、卽ち太虛は我々の心の本體であつて、常住不滅萬古一日のものであるから、吾々にして能く工夫の功を積んで太虛に歸することが出來たならば、吾人は此世ながらにして不生不滅の域に達する、卽ち涅槃の狀態に入ることが出來るといふのである、固より吾々の形骸は死滅

を免れないが、吾が本心に至つては恒存不滅のものである、形骸の我は一時的のものであつて所謂假我である、本心の我は恒存不滅のものであつて卽ち眞我である、所謂生死といふものは假我の上から起る一變化に過ぎない、眞我に於ては永久不變化のものである、彼れ曾て曰はく、

未だ出でざるの息は、內に在り、卽ち生なり、既に吹ける息は外に出づ、卽ち死なり、身に就て之を見る、則ち生死何の知り難きことか之れあらん。（洗心劄洞記）

と、生死を觀ること此くの如く輕く、只假我の一變化に過ぎずと爲すのである、生死に迷ふて仁を害することなく、又た禍福の爲めに志を左右してはならないたゞ本心眞我の境界に住すべしと言ふのである、この事は彼れの一生の事蹟に徵すると一層明かである、その公明正大の行爲は此くの如き生死禍福を超越せる眞我の命に從ふ所から生じたものと想はれる、洗心洞劄記を通讀するときは此等の見解は隨處に見出さるゝであらう。中齋の學問に就て學ぶべきは組織的

の學説にあらずして、彼れが事上錬磨の工夫より實得せる片言隻語が無限の教訓を含むことである、そこで今洗心洞劄記中より參考の爲め數條の格言を摘錄して置かう。

一、

英傑大事に當りては、固より禍福生死を忘る、而も事適成れば則ち亦或は禍福生死に惑ふ、學問精熟の君子に至つては則ち一なり。

二、

生を求めて以て仁を害することなかれ、夫れ生は滅あり、仁は太虛の德にして萬古不滅の者なり、萬古不滅の者を舍てゝ滅ある者を守るは惑なり、故に志士仁人は彼を舍て此を取る、誠に理あり、常人の知る所にあらざる所なり。

三、

我れ常に一日を以て一年と爲し、光陰を歷度す、近ろ古人一日を以て百年と

爲し、百年を以て一日と爲すの語を讀むに因て、道窮りなくして學際りなきを悟るなり。

四、

常人天地を視て無窮となし、吾れを視て暫となす、故に欲を血氣壯時に逞うするを以て務となすのみ、而して聖賢は則ち獨り天地を視て無窮となすのみならず、吾れを視て亦以て天地となす、故に身の死するを恨みずして心の死するを恨む、心死せざれば則ち天地と無窮を爭ふ　是故に一日を以て百年となし、心凜乎として深淵に臨むが如し、須臾も放失せざるなり、故に又嘗て物を以て志を移さず、欲を以て壽を引かず、要するに人欲を去り、天理を存するのみ。

五、

天地の道は一順一逆のみ、順境の如きは則ち心虛に歸せざるものと雖も、亦

善く應ず、而して逆境に至つては則ち心虚に歸する者にあらざれば之れに應ずるに足らざるなり、姑く論語の首章を以て言へば、則ち學習朋來は卽ち順境なり、故に猶易し、而して人知らずして慍らずとは卽ち逆境なり、故に難し、然り而して虚心の君子之れに處すれば則ち又猶ほ順境と異なることなし其他此を以て類知すべきなり。

六、

平生至安の時に當りて危難の念なかるべからず、倉卒危難の時に當りて至安の樂なかるべからず。

七、

利害生死の境に臨み、眞に趨避の心を起さゞれば則ち未だ五十に至らずして乃ち天命を知るなり、而して其心を動かして以て趨避するものは則ち百歳の老人と雖も實に夢生のみ。

【著　書】

古本大學剳目七卷（天保三年刊）

（日本倫理彙編卷三陽明學派の下に之を收載す）

洗心洞學名及學則一卷

（日本敎育文庫の第八編學校篇にあり）

洗心洞剳記三卷（天保四年刊）

儒門空虛聚語三卷（天保四年刊）

增補孝經彙註三卷

（右二部は古本大學剳目と共に日本倫理彙編にあり）

洗心洞詩文二卷（明治十二年刊）

（其他尙ほ遺著あるべしと思はるゝも未だ寓目を得ざれば姑く之を略す）

第三節　山　田　方　谷

一、學風

方谷は初め中井竹山門下の丸川松陰の塾に入つて深く程朱學を修め、後ち佐藤一齋に就て王學を受けたと謂はれてゐる。そこで普通の陽明學者と違つて餘程朱子學的の學風を帯びてゐる、又た一方に於て禪學を學びたる結果禪旨を以てその道を述べてゐる所なども、一般の王學者と異なつてゐる、川田甕江の方谷傳にはこの事を「先生初め宋學を尙び、後佐藤一齋に從つて良知の說を講じ、參するに禪旨を以てし、豁然として自得する所あり」と言つてゐる、尙ほ彼れは小蕃山の名を以て稱せらるゝ如く、熊澤蕃山を崇拜し、その遺流を汲んでゐるのであるから、學問よりも寧ろ事功の方面に於て力を盡した所が多い、卽ち蕃山が芳烈侯を補けた如く、彼れは松山藩主板倉松叟公を補けて內政の改革に從事し、國事に盡瘁したのである。三嶋中洲翁の撰べる山田先生墓碣銘にはこ

の方面の事蹟を詳細に敍述してゐる、彼れは實に蕃山以來の事功派の泰斗である。彼れの學風を見るに蕃山と同じく學派拘泥の見がない、王氏の說と雖も、疵瑕なきを得んやとは友人某に與へた書簡（日儒三三九參照）中の言である、程朱陸王何れにも偏せず、頗る公平なる態度を以て、所謂治國平天下を目的として活學問を主張したのである。獨り儒學に止まらず參するに禪旨を以てしたことは前述の通りである。

悟則法身、迷則色身、本非レ有二分界一、一切平等、渾二融大小一。（歲晚書懷十篇の序）

の如き、以て禪的修養の淺からざるを示した語である。而して致良知よりも、寧ろ誠意格物の工夫を重んじ、友人春日潜菴とこれに關して論爭し「王氏の學誠意を以て主となす、致良知は卽ち誠意中の事のみ、然れども格物を以て之れに配す」と述べてゐる所は確かに朱子學を學んだ影響と想はれる、要するに彼れの學風は區々たる學派の見を脫し、進んで佛教の主旨をも之を採用し、たゞ

たゞ實踐躬行を重んじたのである。學生を戒めたる學規五條は彼れの教育上に於ける根本精神を窺ふに足る文である。

學規五條

一、朔望及初五念五日弁に會講を休む、童子課業も隨意放休す、かの晨興夜臥の限の若きは、違ふを許さず、平日童子の淸書作詩是日を以て檢正す。

一、歸省及び遠きに往くを除く外、他宿を許さず、途上疾作り、或は故あり還るを得ずば、專使これを報告せよ。

一、毎朝遙に祖先父母を拜するの儀、遊學中第一の禮とす、童子遺忘する者は、典儀これを戒告す、或は儀に從ふ能はざる者は、冠者と童子とに論なく、速に退塾家に歸り、各其祠堂に拜禮し、其膝下に定省するを可とす、それ地方に滯在して、子たるの禮を闕く勿れ。

一、新凉方に至り、燈火親むべし、三冬も遠きにあらず、夜學の好時節なり。

各寮相警め、假寢業を許さず、炷線香を用ひて刻を量り、就寢の時を定むべし。

一、灑掃は童子の務むべき所なれども、朝夕定節の外、冠者も意を加へ力を合はせ、寮の内外を常に清潔ならしむべし、傘笠履屐諸品最も整頓を要すかのみだりに他の屐を用ふる若きは禮を失ふ甚し、童子或はこれあらば、典儀これを戒めよ。

その子第教養に關する親切懇情を見るべきである。彼れは決して豪傑風の學者を養成せんとしたのでない、その學風は全く嚴格なる朱子學者と同じであつた。然しながら彼れは一方に於て又た朱子學的形式的外容に拘泥することをも誡めてゐる、「欲下修ニ邊幅一掩中疵瑕上、齷齪安能成ニ大家一、百圍巨木棟梁用、枝幹何曾着ニ一花一」といふ一詩以てその眞精神を知るべきである。

二、學　說

（イ）太虛說及び理氣說

太虛とは空虛にして形迹なき宇宙の一元氣卽ち心の本體を指していふのである。この太虛は生々不息のものであつて萬物の發育は卽ち太虛の萬古不易の活動に因るものと爲すのである。今直ちに中庸を解せる彼れの言に依て其說を窺ふことにする。

不偏不倚の實は、太虛のなんにも無きものなり、故に中とはなんにもない太虛、卽ち心體を云ふ、庸とはなんにも無き太虛と一なる心の、物に滯らず生生事物を生じて息まざる處、天地あらんかぎり易らざる故庸と云ふなり、程朱の註せる過不及なきと云へば、一物あつてからの詞なり、庸も平常と云へば、已發の後なり、今夫れ中庸を天地に言へば太虛を中と云ひ、其生々萬物を發育し、物に結んで息まざるを庸と云ふ。中の名はかたよらずよりかゝらぬより起る、庸の名は萬世不易より起る、是れ形跡を指すに非ず、形跡は生

れて又死す、不易には非ず、太虛より言へば、死生の分つべきなし、太虛は唯生々人獸草木等を生ず、故に形の死するは、太虛より言へば生々として發育するなり、是卽ち不易なり、故に人で言へば心は卽ち太虛なり、而して感應息まざるなり、若し七情の形跡に滯れば、感應が息むなり、故になんにも無き太虛の心より感應し、七情に滯らざれば生々息まず、是れ不易にして卽ち中庸なり、中故に庸なり、庸卽ち中なり、是れ中庸の義なり、程朱の不偏不倚と云ふも、取りやうに依つては宜し、不偏はかたよらぬなり、不倚はよりかゝらぬなり、偏倚のかたよりかゝるは、物なければ然る能はず、程朱は理によりかゝるにはあらざるか、物なくなんにも無きを不偏不倚と云へばよろし、程子も不偏不倚は物に偏倚することなく、空中にあるが如しと云なれども、空中の無き處にても一定しあれば、又無の物に偏倚するなり、又中と云ふを上下四方に偏せず倚せず、其眞中に居ると見るは、大なる誤なり、惑

ひなり、唯中とは一大氣のなんにも無きを中と云ふ也、程子の如き不偏不倚と云ふなれども、一の理に倚り偏するなり、卽ち是れ亦一物に偏倚するなり。（學庸講筵筆記）

卽ち太虛とは心の本體、七情の如き形迹に執滯しないことである、大鹽中齋が身外の太虛卽ち我れの本體、胸中の雲霧を一掃して、何等情欲をも有しない所を以て理想とした主旨と同じである。次に彼れは朱子の理一分殊說について自家の意見を述べて左の如く言つてゐる。

朱子の理を說くも、一個の理てふ者氣の先にありといふにあらざるなり、ただ渾然たる一理、散じて萬殊となるをいふのみ、譬へば水晶を碎き皆六角たり、蕎麥を碎き皆三角たり、其細末塵粉眼力及ばざる者にして、皆六角三角にあらざる者なく、而も又箇の六角三角てふ者が、水晶蕎麥の先にあるにあらざるが如きなり、故に茫々大窮極あることなし、只渾然一理、兩儀となり

五行となる、萬物の生皆其理の分殊のみ、是を以て人の四端あるは、卽ち其理の發見、兩儀五行と自ら相配す。以て糟粕塵埃に至るも、兩たり五たらざる者なし、猶水晶蕎麥の六角三角たるが如きなり、窮理の學、事々物々に卽きて、其兩たり五たる所以の理を窮め、皆渾然一理に歸るなり、故に四端の發擴して之を充つ、以て四海に達すべきなり、他なし、天下四海皆兩たり五たる故なり、(師門問辨錄)

此くの朱子の理一分殊說を批評し、朱子の所謂天地あらざるの先き、畢竟先つ此理ありの言を斥けてゐる、卽ち理先氣後の說を排し、寧ろ氣先理後說を唱へるのであつて、氣の外に理あるにあらず、氣の自然條理を生ずる之を理といふ、卽ち氣も理も同一物であるといふ一元的立脚地に立つてゐる所は朱子說と異なつてゐる。彼れの學說としては尙ほこの外述ふべきこと尠くないが凡て之を略し次に儒者の說として珍らしい輪廻因果の說を紹介して置かう。

（ロ） 輪廻因果の説

從來儒者は佛敎を嫌ふ所から輪廻因果の說を唱ふるものなく、甚しきは楠公が七生以て國賊を亡さんと言つたのを非議し之を以て楠公の人格をも疑はんとするものがあつた、然しながら方谷は深く輪廻因果の說を信じ、楠公が七生賊を亡さんとて兄弟誓をなした言は、果して二百餘年間にその驗があつたことを主張するのである、楠公七生傳の自序に云はく、

それ死に臨み一念他生に牽緣するは匹夫匹婦なほ然り、況んや至誠天地を貫く公の如き者に於てをや、七生賊を殺さんとて兄弟誓をなす、其言果して二百餘年間に驗あり、姦賊をして君臣子孫日に相誅殺、殆んど其後を絕つに至らしむ。その後皇統の尊日月と並び懸り、萬世墜失するなく、忠遂げ業成り、神魂天に歸す、公にありて復た毫髮の遺憾なし、而して室町鎌倉氏の亡ぶ、其迹一途に出づ、政を失し國を誤る、之を使しむる者あるが如し、七生紀年の

數も其期を違ふなし、一言の誓左券を合するが如し、それ亦何の疑を容るゝ所あらん、而も擧世瞢焉、今に至て其由を知る者なし、獨り何ぞや、史傳の作大率儒者斷見の徒に成る、（中略）獨り二子の勤王の久きを擧げ以て公の遺烈となす、それ二子の勤王烈は烈なり、然れども宿世の因を以て父子の縁を結ぶ、因縁の感ずる所自ら相繼かざるを得ず、之を要するに公の餘波の及ぶ所のみ、餘波猶且然り、公の自ら志とする所に至ては、固より此の區々の者を以てせず、これ亦理の必然の者、彼儒者間ま知識ありて幽明の故に通ずるも、亦討究此に至る者なし、抑も又何ぞや、それ效迹見るべき、事理推すべく、昭著明確此の如き者あり、而も猶悟らず、其極輪廻を信ぜず、因果を恐れず、忠義の心を沮みて、姦賊の志を逞くするに至る、これ余の深く斯世の爲めに悲む所以たり、頃日人あり、公の畫像を携へ來りて余に一言を題せんことを請ふ、因て平日の懷を述べ兩絶を賦す、曰はく、賊運將レ窮二百春、忠魂正値

七生辰、雲飛風起山河裂、若レ個英雄是後身」人間果締七生緣、牽到遙々永祿年、姦賊子孫誅殺盡、忠魂此日始歸レ天」と題し畢りて又竊に謂ふ、公七生の身當時必ずその人あり、而して天下の治亂に關する者、常人の得て知る所にあらずと雖も、心誠に之を求めば、或は其髣髴たる者を得んと、乃ち極力索考數日、建武より永祿に至る迄竟に七人を得、而して未だ自ら信ずる能はざるなり、(中略)是に於てか斷然決定、七人の事迹を次敍して之が傳を作る、冠するに公の初生史傳所載の事を以てす、則ち室町氏の滅する所以、王室の全き所以、皆公の後身の爲す所の者に係ること目下に瞭然たり、かの鎌倉の同く滅ぶる若きも亦た必ず之を使しむる者あり、或は弟正季(正成と交刺して死す)の後身にあらん、然れども史乘疎闕、室町に比して更に甚しとす、故に敢て遽に之を索めず、以て他日を竢つ。(楠公七生傳、自序)

と、此れを以て是を觀るに、彼れは輪廻說を深く信じたことが知られる。然る

に彼れはこの輪廻說は儒敎の敎義に基いたもので決して佛者の妄見を抱けるものとは違ふと言つて、遂に儒佛の說を融合せんとしてゐる。云はく、

輪廻の途に達せんと欲して、經世の業を成す能はざる者、佛氏の妄なり、經世の業を成さんと欲して、輪廻の途に達する能はざる者、俗士の陋なり、已に輪廻の途に達し、又經世の業を成す者、楠中將これのみ、蓋し輪廻に明ならされば經世の業を成す能はず、經世の業を成す能はざれば輪廻の途に於て其往く所を失す……それ天下の亂を撥し天下の逆を除き、以て萬世の業を定む、志を抱くの士皆臂を奮ひて起ち、身を挺して赴く、然れども或は中途にして廢し、或は僅に成して忽ち敗る。或は其成すなきを計りて肯て爲さず。幸にして成すあるも、牽强の爲に出で丶苟且の計を免れず、久しからずして之を失し、反て禍を後世にのこす、之を要するに、同く其志を成すなきに終る、此れその視る所の局、而して期する所の道、輪廻の理に達せざるの過な

り、夫れ治亂相代り順逆互に爭ふ、孰れか輪廻の致す所にあらざらんや、此れ豈に一身の能く任する所、而して一生の能く了する所ならんや、故に其途に明なる者、不幸亂逆の起るに遭へば、宏遠の謀を運らし、局迫の念を絕ち、現在の身を恃まずして、後身の多きに分任し、自今の生を限らずして、事を他生の久きに了し、紆餘委曲時に乘じ、乘に因り、成を千百年の後に期す、何の亂か撥すべからざらん、何の逆か除くべからざらん、而して成す所の業、萬世墜つるなし、此は佛氏の知らざる所、俗士の達せざる所……公七生轉身の迹、當時必ず其人あり、而して神變奇幻、世固よりこれを知るに及ばず。（楠中將論）

佛氏の妄と俗士の陋とを破してゐる所から觀ると、自らその說の佛說と同じからざるを辨じてゐるが、その眞意は儒佛一致を信ずるものと考へられる。故に彼れは儒者にして輪廻轉生の說を難ずる者は未だ眞に經世の道卽ち孔子の道を

知らざるものとして之を排斥するのである。例へば彼の室鳩巣が楠公の湊川に於ける自殺を難じてゐることを大に攻撃するのも亦たこれに由るのである、而して自己の説は飽くまでも佛者の説と同じからざることを辨じて左の如く言つてゐる。

或は謂ふ、輪廻の理果して此の如きか、今世の事復た爲すべからずば、拱手以て來世を待つ可ならんかと、曰はく噫なんぞ可となさんや、是は經世の道を知らずして輪廻の途亦其往く所を失す、乃ち佛氏の妄に類する者なり、夫れ輪廻の途、今世の嚮ふ所を觀て、來世の往く所を知る、今世に拱手して爲す所なし、其來世に往きて尚何の事業を成すを得ん哉、其れ亦公の事を覩ざるか、公の攝津に軍するや、上宮太子の讖を得て之を讀み、乃ち治亂の數千古に定まるを知る、魚鳥の爭已に驗し、獮猴の掠、天下果して出づれば、一元の歸未だ其何時にあるを知らざるなり、然り而して公尚能く百戰の場に崎

嘔し、未だ嘗て一日の安を懷はず、終に身を以て國に殉するに至り、臨死の志を奮ひ以て七生の後に達す、今生の嚮ふ所精勵奮發能く此の如し、來世の往く所乃ち志の如くならざるなし、經世の業自ら其間に成る、此れ豈かの佛氏の妄と同日にして語るべけんや、世の佛を學ぶ者、飽食煖衣士大夫に抗禮して、世の治亂安危漠然意を經る所なし、人之を問ふあれば、曰く來世來世と其妄たる孰れかこれより甚しからん、彼の徒にして生を來世に受く、吾斷じて其蠢然の昆蟲たらずば、莽然の草木たるを知るなり、然れども彼既に前世の業に因て此無用の人となり、且方外を以て自ら居れば、舍つる所にありてこれを問はず、吾れ天下の士亂逆交生の時に當り、尙拱手の觀をなし、相率ゐて佛氏の奴となり、生を昆蟲草木に受け、天下の亂百世を經と雖も底止する所なきを懼るゝなり。(同上)

飽食煖衣の俗僧を罵倒してゐる所は如何にも痛快を極めてゐる。然しながらそ

の輪廻因果の説を確信せること此くの如く深きを以て之を觀れば、その佛學研究の影響たることは之を否定することは出來ない、彼れは楠公論より轉じて時事問題に及び、攘夷家は一時の勝を求めて萬世の計を知らず、和議を主張する者は萬事を時運に任せて拱手坐視するものとして之を批難してゐる、之を要するにこの輪廻因果の説を力説する所から見ると、彼れは冷靜なる學者といふよりも、寧ろ熱烈なる信念を有する敬虔の人であつたことが想像せられる。彼れの一生の事蹟から觀ても空疎なる論議に耽る一般儒者を以て目すべからざることが知られる、彼れの最も得意とせる所は時務の論である。獻策對問の諸稿大にその經綸の才を窺ふに足るものがあると謂はれてゐる。今はたゞその學説の他に異なつた一端を擧げたるに過ぎない。

晩近の陽明學者としては奥宮慥齋、梁川星巖、春日潜菴、池田草菴等尙ほ幾多の學者について敍ぶべきであるが、一小册子の本書に於ては、悉く之を敍述

することを許されないから、之を省略する、日本儒敎概説の「近世の陽明學に就て」の條にはその概要を記し、舊著大日本倫理思想發達史下卷には、尚ほ一層詳細に之を述べて置いたから有志の士はそれを一讀されんことを望む。

近世日本儒學史上卷終

昭和二年五月十五日印刷
昭和二年五月二十日發行

定價金貳圓

不許複製

倫理叢書第六編
近世日本儒學史　上卷

著作者　岩橋遵成

發行者　大葉久吉
東京市日本橋區本銀町三丁目十四番地

印刷者　東勇治
東京市小石川區久堅町百〇八番地

共同印刷株式會社印刷

發行所
東京市日本橋區本銀町三丁目
振替東京二八〇番
東京寶文館

大阪市西區阿波堀通四丁目
振替大阪四三番
株式會社大阪寶文館

松浦勇
畠山彌藏
長谷川彌平　共編

教育要領叢書

洋裝全十二册
定價各金六拾錢
送料各金四錢

第一編 教育學要領	既刊
第二編 心理學要領	既刊
第三編 論理學要領	既刊
第四編 各科教授法要領	近刊
第五編 教育史要領	既刊
第六編 學校管理法要領	近刊
第七編 最近教育思潮要領	既刊
第八編 國民道德要領	近刊
第九編 倫理學要領	近刊
第十編 哲學概說要領	既刊
第十一編 社會學要領	既刊
第十二編 公民教育要領	近刊

全編十二卷廣義の教育に於ける各般の學科に亙り內容は新奇な一派の學說に偏することなく穩健中正な旨とし而かも最新の研究を洩らさず表解的に示したものである。附錄として最近數ヶ年分の小學校教員檢定・文檢教育大意・同教育科・同修身科竝に國民道德等の問題を載せてある。

東京—寶文館—大阪